

# 盆裁培養法



# 始



特107  
699



盆栽培養法

大正  
13. 8. 1  
内交

はしがき

家庭の讀物としての盆栽ぼんさい！これがなせ讀物であるか見よ盆栽は高尚こうしょうなる娛樂ごらくの一つで、その趣味しゆみはなかなか尋常じんじょうの娛樂とは同日どうじつの比ひではない。趣味！趣味といつても様々にあり、娛樂！娛樂といつても亦種々あるが、盆栽は趣味の中に詩的快感してきかいかんをふことを含み娛樂といふ間に徳性とくせい涵養かんようてふ理想りそうを有する以上は、正しく家庭の讀

物たるに足るべき價値のあることは言はずもかなである、既に盆栽が家庭に必要であるといふ以上は草花の培養法がこれに伴ふべきは理の當に然るべき所で一花を栽に、一卉を養ふの中にかのづから己れに得るものゝ多かるべきは贅言するまでもなからう。而して附録とするところの蔬菜の作り方に至つては、おのづから津々たる趣味の擲すべきものがある、試に思へ鑑を菜

圃敷畦の間に弄し、点々たる曉露を衣袂に滴らしつゝ、彼の胡蝶を追ひつ逐はれつ、時に自家が養ふところの菜根を咬ひてこれを味はふときは、たゞ運動の快樂を覺ふばかりか、精神もために暢び、理財の妙味もその中に存するのではないか。これぞこの書を編せし所以である。若し世間頻出の類書と價値を比較せんとするに於いては、著者もとより著作を是否するを好まね

ば、一に讀者の評判に任すのみである。

明治丁未紀元節の前一日

著者識

目次

第一編 總論

○家庭園藝の娛樂

○家庭に於る適當なる園藝

第二編 栽培方に就ての心得

○栽培といふ事

甲 土壤

乙 肥料

丙 繁殖法

丁 耕し方

○肥料を與へる事に就ての注意

○土壤の種類と其性質

○砂

一五七 一〇九 一〇〇 一一二 一一六 一七

○砂の用方に就ての心得

○合せ土

○黒土の性質

○溝土の性質

○忍土の性質

○黄土の性質

○赤土の性質

○田土の性質

○眞土の性質

○肥土の性質

○肥料の種類と其性質

○油粕

○貝殻

○鶏卵の殻

○泥水

一九 二〇 二二 二二 二三 二三 二三 二三 二四 二五 二七 二七

- 米泔水
- 魚の洗ひ汁
- 干鰯
- 下肥
- 松魚節
- 茶滓
- 厩肥
- 繁殖法の種類と仕方
- 甲 實生法仕方
- 乙 接木法の仕方
- 砧木の事
- 接木を爲す時期
- 砧木の作り方
- 接木の器具
- 砧木を切る心得

㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳

- 砧木と接穂に就て
- 接穂に就ての注意
- 接木の仕方の種類
- 切接の仕方
- 根接の仕方
- 腹接の仕方
- 挿接の仕方
- 水接の仕方
- 寄接の仕方
- 丙 挿木法の仕方
- 挿木の種類
- 挿木を爲す時期
- 挿穂を切る心得
- 挿木法の種類と其仕方
- 肉挿の仕方

㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

- 挾挿の仕方
- 葉挿の仕方
- 丁 壓條法
- 戊 根分法
- 耕し方のしにた
- 第三編 草花培養法
- 第一章 總説
- 草花の培養
- 草花の移植と鉢植の仕方
- 第二章 各論
- 蕷菜
- 牡丹

㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

- 燕子花
- 花菖蒲
- 石竹
- 美女撫子
- 芍薬
- 牽牛花
- 菊
- 第四編 盆栽
- 第一章 總説
- 盆栽の意義
- 盆栽の種類
- 盆栽の形に就ての種類
- 直幹物の盆栽

㊿ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

- 双幹物の盆栽
- 寄植物の盆栽
- 根上物の盆栽
- 水盤物の盆栽
- 懸崖物の盆栽
- 武者立物の盆栽
- 實生物の盆栽
- 盆栽用の土
- 盆栽の肥料
- 肥料の種類
- 肥料の與へ方
- 寒肥
- 盆栽の苔
- 叡山苔
- 石苔

一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九九 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四

- 岩苔
- 天鷲絨苔
- 青苔
- 石に苔を生ず法
- 石に苔を匍す法
- 石に早く苔を匍す法
- 水盤物の石に苔を早く這す法
- 苔の置き方
- 水
- 盆栽に水を與へる心得
- 鉢と水の関係
- 水を選ふ事に就ての心得
- 水を與ふる就ての注意
- 盆栽を仕立る事に就ての心得
- 植込の法

一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九九 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇〇

- 盆栽に就て一般の手入方
- 盆栽の棚
- 盆栽の棚の造り方
- 盆栽物の枝に就ての心得
- 盆栽物の枝を切る心得
- 盆栽物の枝を裂き取る心得
- 枝をためる心得
- 根を切る心得
- 新芽を摘む事
- 移植に就ての心得
- 根固の事
- 荒木を掘るべき時期
- 根固の仕方
- 移植すべき時期
- 移植に就ての注意

一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九九 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇〇

- 植移と肥料
- 盆栽の手當方
- 春の盆栽手當方
- 花を十分に咲す用意
- 夏に於る盆栽の手當方
- 冬に於る盆栽物の手當方
- 盆栽の鉢
- 鉢の種類
- 水盤
- 盆栽に就て注意すべき事
- 盆栽の價値
- 盆栽を取扱ふ心得
- 盆栽の害となる物
- 盆栽の臺
- 花を早く咲す法

一〇四 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九九 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇〇

○貴き盆栽

第二章 各論

甲 観葉樹類の盆栽仕立方

○松の盆栽仕立方

○盆栽に仕立る松の種類

○松の實生盆栽仕立方

○松の葉を短かくする法

○銀杏の實生盆栽仕立方

○榿の盆栽仕立方

○檜の盆栽仕立方

○樺の盆栽仕立方

○楓の盆栽仕立方

○桐の盆栽仕立方

○櫨の實生盆栽仕立方

一五

○杉の盆栽仕立方

○竹の水盤物盆栽仕立方

○楓の實生盆栽仕立方

○榿の盆栽仕立方

○榿の盆栽仕立方

乙 観花樹木類盆栽仕立方

○梅の盆栽仕立方

○梅の盆栽に花を多く持せる心得

○櫻の盆栽仕立方

○椿の盆栽仕立方

○茨牡丹の盆栽仕立方

丙 観實樹木類盆栽仕立方

○林檎の盆栽仕立方

○桃の盆栽仕立方

○無花果の盆栽仕立方

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

○百両金の盆栽仕立方

○柿の盆栽仕立方

○杏の盆栽仕立方

○栗の盆栽仕立方

第五編 蔬菜及果實培養法

○蔬菜と果實の培養法

○蔬菜之部

○大根の培養法

○二年子大根の培養法

○蠶豆の培養法

○豆類の培養法

○垣豆の培養法

○土芋の培養法

一四

一四

一四

一四

一四

一四

一五

一五

一五

一五

一五

○さやべじい菜の培養法

○燕青の培養法

○百合根の培養法

○南瓜の培養法

○夏大根の培養法

○唐辛の培養法

○茄子の培養法

○胡瓜の培養法

○白瓜の培養法

○胡蘿蔔の培養法

○水菜の培養法

○果實之部

○桃の培養法

○杏の培養法

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六



- 李すももの培養法
- 葡萄ぶどうの培養法
- 梨なしの培養法
- 梨なしの實みを多く結むすす法
- 林檎りんごの培養法
- 密柑みかんの培養法

一六  
一六  
一七〇  
一七三  
一七三



目次終

草花 盆栽 培養法

榎本法令館編輯部編

第一編 總論

○家庭園藝の娛樂

家庭園藝の娛樂

園藝えんげいと云ふ事を嚴きびかなる意味に依つて解釋かいしやくすれば、即ち學理がくりと技藝ぎげいとを用ひて吾々の賞味しょうびする果樹くわじゆ、生活の補助ほじよに無くて叶かなはぬ野菜類、目を喜よろこばしめ鼻はなを樂たのしましむる花卉かき盆栽ぼんさいの類を、繁殖はんしよく培養かいようする一つの業務ぎふのことを云ふのである、故に園藝えんげいと云ふ事は、その範圍はんみ頗こゝろる廣大くわいたいなると同時に、満足まんぞくに之れを行はんとするには、忍耐にんたいと經驗けいけんと綿密めんみつの三者が、相並行あひこゝろしてゆくにあらざれば、爲し能たふべきものならねば、蓋し隨分骨ほねの折れる事業じぎやうと云はざるを得ないのである、とは云ふまでもなく、活物かつぶつを取り扱つかふて、而もその活物かつぶつをして我が思ふ通りに

繁殖發育せしめむとするのであるから、其の至難の事業たるや殊更に云ふまでもないことなのである。

因て園藝てふ業を専門として營まんとするには、凡ての樹木草花、さては蔬菜類の各種特有の性状と、其の發育状態とを學理に因りて研究し、而して其の研究したる學理を實地に應用して、十分なる技量を現はさねばならぬのであるから、園藝も亦た純乎たる而も極めて複雑なる専門事業である。

以上の如き高尚にして、至難なることを以て園藝に依つて作られたる果樹蔬菜さては花卉の類に至るまで、人生に如何ばかり必要なるか、蓋し喩ふべくもないのである、其必要なると同時に、之を行へば一種云べからざる娛樂を感じ其感じたる娛樂は、又名狀すべからざる趣味を呼び起し、其の趣味は事實に現はれて多大の利益となるに依つて、一度園藝に手を下せば其の娛樂と其の趣味は人をして之を棄る能はざらしむると同時に、事實に於て得るところの利益多きより、更に進んで益々行はんとするの感念を惹起するに至るのである、加之み

### 趣味と利益

### 園藝の必要

ならず園藝のことたる、新清にして高尚なる事業なるを以て、家庭に於て繁雜なる事務を執の余暇に、一の娛樂として之を行へば、趣味を感じ利益を得る以外に精神を爽快にし頭腦を明晰にし、健康をしてより鞏固ならしむるを云ふ、亦た甚大なる利益があるのである、宜なり晩近家庭に於て一つの娛樂的業務として、園藝を行ふことの流行的に普及せる蓋し偶然ではないのである。

況んや此の事業たる専門なれば、兎も角も家庭にては、最も婦女子に適合せることなるを以て、比較的運動不充分なる奥様や令嬢方には、之れを行はれかすと切に勧めるのである。

斯く云ひ來たらば或は園藝のことたる、學理の應用を事實の上に現はす技術なれば、些の素養なきものには、如何に之れを行はんと欲するも、行ひ得べきの理なしと云ふ人もあらむ、然り、然りと雖も之を専門的の事業として行ふてこそ、學理の應用も必要なれ、技術の鍛練も大切なれど、家庭にて行はんには學理の應用や技術の鍛練などは差し當つてその必用を認めず、其の之を行ふべき

方法手段の一般を會得すれば、蓋し其れにて足れりと云ふも敢て不可なき次第である。

若し其れ學理の應用や、技術の鍛練の如きは、園藝の事業に通じ、多少の経験を積たる後に於て、斯道の先進者に就て糺すも可く、又た而せずとも経験を重ぬれば、自家にて其々發明することもあるべければ、家庭に於て之れを行はん人は、唯だその培養の仕方に就て一と通りの方法手段を會得して、其れを實地に就て行はるれば、其れにて十分である、習ふより馴るゝが早しで一年より二年、二年より三年と、年月の進むに従つて益々多く自然的に發明することがあるのである。

乃で園藝と云へば、前にも云ひし如く、其の範圍が頗る廣大にして、植物全体の培養方、及び野作物等はれ皆な園藝に屬するのである、併しながら家庭にて之を行はんには敢て全体を爲せよと云ふにらあず、又た仮に全体を爲し試みると欲するも、事實は決して之を許さないものであるから、其の範圍に於て最も娛

家庭に於てなすべき園藝

家庭に於て適當なる園藝

樂的にして趣味に富んでゐる物を選びて、之を行はれよがしと云ふのである。然らば如何なる物を選んで、之れをなせば家庭に於る園藝として、適當なるか少しくその事に就て述べむとするのである。

### ○家庭に於ける適當なる園藝

園藝の範圍内に於て、家庭で行ふて最も適切なる物は、花卉類の培養と、盆栽類の仕立方と、尙ほ慾には格別手数を要せず、極めて無難に作り得べき果實類と、日常の膳部に上し得べき蔬菜類中の、單純なる物とであらふと考へられるのである。

家庭にて花卉類を培養せば、眼を喜ばすと同時に、活花を爲すの材料ともなるべく、盆栽を仕立れば、眼を樂ましむるの傍、美術心を養成するの媒介ともなる、又た果實蔬菜の類を栽培せば、四季新鮮にして而も清涼なる物を得るてふ無限の快樂あれば、予は家庭に於て以上の四種、又は四種中の一二に就て各自その好むところの物を選びて、業務の余暇にこれを栽培せば、常に數多の利益

を得るのみならず、一家團樂の快樂を得ることになれば、少しく余裕ある家庭に於ては、是非とも園藝を行ふの必要を絶叫せんとするのである、而も此の事たる一たび之を行ふて、其の趣味を感せば、終生また棄つべからざるてふ興味のあるに於てをや。

此に於て予は本書に、家庭に於て栽培するに最も容易にし、且つ趣味ふかき花卉類の栽培方、盆栽の仕立方、并に果樹蔬菜の培養方に就て、其の一般の手續を殊に實地に適する様葉せんと思ふのである。

學理に涉ることは、強て之れを述べず、思ふに學理の應用は幾多の經驗を積み斯道の技術に熟達せし後ならねば、之を利用するに難く左れば初の中は、唯だ實際に就て其の栽培方を會得するの優れるのみならず、之を一の業務とし此によつて生計の途を講ずるにあらぬ、云々家庭の娛樂として行ふに於ては、蓋しその栽培方の一般を會得すれば十分に於て、學理を應用するてふ高尚なることは、斯道に熟達したる後に於てなすべきである。

### 第二編 栽培方に就ての心得

#### ○栽培と云ふ事

栽培とは何如なる事を意味するか、土地を耕やして物を植へ肥料を與へて成育せしめ、之れと同時に其の作物の入手を爲し、且つ其れを完全に成育せしむべく保護することを總稱して、栽培とは云ふのである。

乃で凡ての植物を栽培する、その基礎となるべき物は、即ち土と肥料にて、而して繁殖せしむる方法は、種子を下して苗を作り、其れを接木するのと、種子を下したまゝで成長させるのと、其他三通りの仕方がある、此れが栽培の基礎にて此に伴ふは、寒暑の手当方等である、因て先づ家庭園藝を行ふに就て、第一に心得ねばならぬのは。

- 土壤、
- 肥料、
- 繁殖法、
- 耕し方、

この四通りである、寒暑の手當に至りては、樹木類は特別にして一定の手當方あれど、花卉類に至りては四季その氣候に應じて花を開くものなれば、其の手

園藝に必要なる地

當方は各種の花弁其の物に就て、一々述る事とし又た樹木類の手當方は盆栽の編に於て、之れを述ぶることならしぬ。

乃で家庭園藝を爲すには、余程廣き土地が必要であらふと、或は感ぜらるゝ方もあらむが、決して左様でない専門として之を行ふならば、或は百坪二百坪、さては千坪以上の廣濶なる土地も必要なるべけれど、家庭園藝は極めて規模の小さきもの、否な規模の小さいのを貴ぶのであるから、少しばかりの空地があれば十分である、然しながら家と家との中間、さては塀と塀との間の如き、太陽の光線を受ることの少なき土地は、園藝に適しないのであるから、十分に日當のよき土地を選ぶのが、何より彼より最も大切なることである、と云ふのは凡て植物の發育に就て太陽の光線、即ち熱は猶ほ我々動物界に於ける空氣と同一のことき、關係あるものなれば、日當の悪き土地にて園藝を行へば、勞して功なき不結果に終るものたる事を忘れてはいけないのである。

太陽の光線

家庭園藝に於て、果樹や蔬菜類は氣候の關係頗る大なるものなれど、目を樂し

土壤

甲 土壤

ますべき花卉や盆栽の類に至つては、氣候に差したる關係を有せず、その繁殖せしむべき時期に於て繁殖法を行ひ、其の肥料を與ふべき時期に於て適當に肥料を與へ、而して花卉其の物に相當せる手當を行ひゆけば、其れにて十分に繁殖發育させることを得るものである。

土壤とは土の事にて、園藝には土が凡ての基礎となるのである、ところで土にも幾通かの區別がある、言葉を換て云へば、一概に土と云ふものゝ、土の中にも其の天然の性質を異にせる土の種類が、澤山に在るから其の異なりたる土の性質を心得て置くことは最も大切である、とは、樹木草花の種類に就て各自の好むところの土がある、故に其の好むところの土に、之を栽培するにあらざれば、仮令肥料その他の手當を十分に行ふも、決してその發育繁殖を満足に得ることは難いのである、是れ土の性質を一通り、心得ざるべからざる必用があるのである。

乙 肥料

肥料は植物を發育させるに、欠くべからざる物にて、猶ほ我々が生活を繼續させるに必用なる食物のごとく、極めて大切なる物にて、唯だ殖物其の物に相當せし土に植ゑたのみにては、決して完全に發育するものにあらず、必らず相當の肥料を與へざる可からず、而して肥料にもその種類極めて多く、亦た随つて其の功能の著るしき物と、左までに其の功能の著るしからざる物とがあるし、又た甲の肥料は甲の植物を培養するに適し、乙の肥料は乙の植物を培養するに適すと云ふ區別が、自然とあるにより肥料の種類に就き、聊か心得て置くべき必要があるのである。

丙 繁殖法

繁殖とは同じ種類の物を殖すといふ意味にて、其の殖すに一定の法則がある、即ち實生に依りて苗を作り、又は其の苗となりたる物を接木して育てたり、或は挿木して育てたりする、その種々の仕方、總稱して繁殖法とはいふのである。

丁 耕し方

である、因て繁殖せしむべき種々の方法を心得ざれば、決して園藝を行ふことは出来ぬ、即ち播ぬ種子は生ぬで、一番に大切なることである。

耕やし方とは、果樹草花その他、凡ての作物を成育せしむべく爲めに、取り扱ふ其の仕方をいふのである、唯だ土へ種子を下し肥料を與へたといふだけでは決して完全に發育するものではない、必らず相當の手入を施さねばならぬ、此の手入方が即ち耕やし方であつて、其耕し方に就ても其亦れくゝの心得があるから、其の心得に就て十分に承知して置かねばならぬのである。

○肥料を與へる事に就ての注意

肥料を與へるといふことに就て、一般に注意すべき事がある、先づ其の土の性質如何を考へる、即ち土の緻密なる物、仮令ば粘土赤土等の如き細かくして塊り易き質の物には、肥料を一時に十分與へ置くもよろしけれど、彼の砂地等の如き其の土の荒くして、粘り氣のなき物に在りては、一時に肥料を與ふるはよ

肥料は晴天に施す

ろしからず、必ず度々に之れを分ちて與ゆるがよろし、其は肥料分を土が持てぬすして、他へ流し出して終ふことの、比較的ひかくてきに多ひからである又た肥料を與へる時には成るべく天氣を見計らひて爲すべし、肥料を與へて間もなく雨の降るが如きは、折角與へたる肥料を流失せしむる媒介となるものなれば、些々たる事なれど注意すべきである。

元肥と追肥

次に肥料の與へ方に就て、固有の名稱がある其は元肥と追肥とである、此の元肥と追肥の區別は非常に大切であるから、能く心得て置かねばならぬのである元肥とは種子を下すべき時と移植をなすべき時に、その下すべく植ゆべき土地をならして、而してその土に肥料を與へる、その肥料のことを云ふのであつて

此の元肥は必らず與へねばならぬものにて、此に用ゆる肥は成る可く其の功能の著はれることの遅き肥料を選ぶ様にせねばならぬのである、此の功能の遅く著はるゝものを學問上の言葉にて、遅功肥料と云ひ早く著はるゝものを速功肥料とは稱へられてある、而して遅功肥料に屬する物は、干鰯、油粕、厩肥など

元肥の解

にて速功肥料に屬する物は、泥水、大小便、魚の洗ひ汁など、凡て液体の肥料を云ふのである。

芽出肥

追肥とは元肥を與へて後に、其の物が段々と成育するにつれて、少しづつ與へてゆく肥料のことにて、此れに芽出肥、花肥、實肥、寒肥などの名稱がある、芽出肥とは植ゑた其の物が、芽を出し初めた時に其の生育を促すべく爲に與へる追肥のことである。

花肥

花肥とは花卉類の蕾を結びたる時に、施す追肥の事にて此れは其の花の咲てる期間を長からしめむが爲めに與へる肥料のことである。

實肥

實肥とは花が落たる後に於て與へる追肥の事にて、此れは果樹類に在りては其の實を能く結ばすべく、又た花卉類に在つては、其の種子の善良なる物を得る目的である。

寒肥

寒肥とは寒中に一回與ゆる肥の事にて、此は寒氣の爲に果樹などの弱らぬ爲であるから、余り多分に與ふるには及ばず、唯だ少量を與ふればよいのである。

固体肥料  
液体肥料

以上の種類の肥は必ずしも與へねばならぬのである。

肥料の種類の中には、あぶらかすほしか油粕干鰯の如く固体の物もあれば、又た下肥ごうみづ泥水などの如く液体の物もある、固体の物は之を粉にして土を堀て埋める様にするか、又たは湯にて溶して與ふるが可い、液体の物と雖ども、土の上より撒かすに土を堀つて入れて其の上より土を覆せて置くのがよい、殊に下肥泥水厩肥などの種類に至つては、臭氣の甚だしき物ゆへ、必ず土を堀つて入れて土を覆せて置く方が、臭氣も發せざれば、又た作物の爲めに肥料の利くと云ふことが十分であるから、必ず土を堀つて與へるがよろし、元來植物全体の通性として、その養分即ち肥料を根が吸収するのは、其の仕方が二通りある、其の一は根より一種の液をだして、其が肥料を溶して吸収するのと、水の爲めに肥料が溶けて其れを根が吸収するのとである、故に固まつた物、即ち油粕干鰯の如き固体の物を粉として與へる場合には、根をして吸収するに便ならしむる爲めに、必ず水を與へて置く様にせねばならぬ、下肥泥水の如き液体に在りては、格別水

植物が肥  
料分を吸  
ひこる手  
續

雨は與へ  
り肥料を  
流す恐あ

の必要もなければ、固躰の場合には水といふことを、決して忘れてはならぬのである、次に凡て肥料を與へる場合には、必ずしも天氣のよき時に於て爲すべし雨天は勿論のこと、今にも雨の來らむかと思はるゝ曇天の時には、如何なることのあるも、肥料は決してあたへてはならぬのである、其は肥料をあたへて間もなく雨の來たるが如きことあらむが、折角あたへたる肥料の大半を雨の爲めに流されて終ふ恐れがある。

又た前にも一寸と述べたる通り、元肥を施す場合、即ち種子を下すに當つて先づ其の下すべき土に肥をあたへて置かねばならぬ、此の元肥をあたふるにも一定の方則がある、即ち天氣よき日に於て、土に穴を堀りてその内へ肥を入れるか、又た畝を造りて下す場合には、其の畝に鋤にて深く切り形を入れ、其の内へ肥をあたへて其の上より土を覆せて、少なくとも二日はどは其のまゝにして置ひて、而して後に種子を下すがよろしい、元肥をあたへて其のまゝ直に種子を下してはならぬ、其の二三日間其のまゝに爲し置く所以のものは、土に肥料を



土壤の種類  
質土壤

土壤の大別

十分に浸み込ませむが爲めである。  
尙ほ肥料をあたへる事に付て、注意すべきは其の土の性質に依りて料を多く又は少なく置くことである、此に附ては随分面倒な學説あれど、家庭園藝を行ふ初めの人は、肥分の多き土には少なく、少なき土に多くあたねるものなりといふ事だけを心得置きて其の與ふる際に、其れぐの注意を拂ふて、參酌すれば其れにて足りである。

○土壤の種類と其性質

土と云ふことに就ては前に述べたる通りであるが、さて土には何れほどの種類があつて、又た其の性質は如何なるものであるかと云ふ事を、心得て置かねばならぬにより、次に其種類の性質に就て述べむ。

凡て果樹草花盆栽物等の栽培に就て、必要なる土の種類を分ちて。

- 甲 天然質の物。
  - 乙 天造化質。
  - 丙 人工化質。
- の三種とされてある。

土壤の細別

甲 天然質に屬する物は。

- 眞土、 黒土、 赤土、 黄土、 砂

の先づ五種が其の重なるもので。

乙 天造化質に屬する物は。

- 忍土、 田土、 溝土

の先づ三種を重に用ゆるものにて。

丙 人造化質に屬する物は。

- 肥土、 合せ土(三和土とも記す)の二種である。

今左に右の各種の性質に就て委しく述べん。

砂の性質

○砂の性質 盆栽に砂の必用なることは、云ふまでもなけれど併し砂ばかりでは、決して工合よく生育つものにあらず、併りして他の様々な土のみにてても亦た育つものにあらず、故に砂と土と等分に用ゆるがよろし、又た人に依りては砂の澤山に置れたる盆栽を好む人あれば、又た砂の少なきを好むのもあ

る、併しながら何れかと云へば、砂の多き盆栽より少なき物の方が馴れざる人には養ひやすむ、其理由は砂は互ひに相着くと云ふ力の少しもないものであるから、長く水を含むでる事が出来ぬ、依て砂多き盆栽は怠らぬ様に絶えず水をあたねねばならぬ、若しあたへ方を怠らば、其れが爲めに盆栽を枯す恐れがある、故に砂勝の盆栽を養ふ人は、水をあたへると云ふ事に、深く注意をせねばならぬのである、砂を選ぶといふ事が必用で、盆栽に用ゆる砂は何でも差支ぬ、砂でさねあらばよいかと云ふに、左様ではない鹽氣を含むでる物、鑛氣を含むでる物などは、決して用ひてはゆかぬ、故に清き流の川に在る砂、山の砂などよろし、併し山の砂は時に依ると、鑛氣を含むでる恐れがあるから、成るべくば清き流の川より採りたる砂を選びて用ゆるが可い、海の砂濁つて川より採りたる砂などは、決して用ひぬが可い、砂の中にも色の白き物もあれば、又た少しく黒味を帯びてる物もある、盆栽用としては、黒味を帯びてる方の物を貴ぶのである。

砂の用ひ方の心得

○砂の用ひ方に就ての心得 砂を用ゆる時には、仮令如何ほどよき物と雖ども中には小石瓦の片々などを含むでるから、必らず一度は篩にて振ふる用ゆる様になすべし、然らざれば時に植たる物の根を痛め損することあれば、注意を要するのである何んでもなきことの様なれど、盆栽家には必用なる心得である。

合せ土

○合せ土 合せ土とは土を三種合して拵らへたる物にて、天然に在る物ではない、此の土は盆栽及び草花を培養するに最もよろしき物にて、此を使用すれば凡ての物は、大底十分に發育するを以て、園藝家は是非とも之を貯はへ置かねばならぬ、其の拵へ方は、野土五分赤土眞土各二分五厘の割合にて混ぜ合し、此れに大小便を等分に混ぜた物を、其の量の五分だけ入れて能く練り日射のよき處へ積で置きて雨天の節には菰をかぶせて、雨のかゝらぬ様にし、一月乃至一月半ほど置きて能く碎き、野土を半分だけ混ぜて用ゆるのである野土とは畑や常に日當りのよき場處にある土のことです。

質 黒土の性

○黒土の性質 澤山に在る土で、此れは其の名の如く眞黒な土にて、此の土は盆栽用としては、赤土より一層によろし、東京地方にては黒土と云はずして武蔵野といね、此れは竹藪の中叢の中などに多くある、其の種類の依つて少しく赤色を帯てゐるもあるが、其れは宜しくない眞黒な物を貴ぶのである、此の土は盆栽の種類に依つて、出合ぬ物もあれど併し此の土に赤土を少し交せて、凡ての樹木の荒根かためなどに用ゆれば、殊の外に宜しきとは専門家の證明せる處である。

質 溝土の性

○溝土の性質 又た下水土と云ふ、此の土は樹木物よりは草花物を育つるに、無くて叶はぬ大切な土であつて、而も之を手に入れんことは最と易いのである、即ち溝ドブ乃至は下水の底などに在る、腐りたる泥土を採りて、其れを日和に二月ほど曝して置く、斯すれば其の土に含まれてゐる臭氣は去るを以て、此の時に其れを十分細かく碎きて、荒き篩にてふるふて、其の中に在る塵埃及び小石の類を去つて用ゆるのである、併し此ればかりではきつ過るを

質 忍土の性

以て赤土か又たは普通の地上にある土を、三割ほど交せて用ゆるがよろし。  
○忍土の性質 忍土とは文字の現はす如く、他の物の中に忍びがくれていると云ふ意義の土で、此の土は肥料分を多分に含むのであるから、盆栽用としては缺くべからざる大切なものである、此れは天然の物を得んこと最と面倒なれば寧ろ人工にて製する方がよろし、其の拵へ方は木の葉を集めて一處に堆で置くと、雨に逢ひつ日に照されつして、長さ日の中には腐りて地上の土と混じて、黒き土と成る此れが忍ぶ土である、尙は容易く得んと思はゞ塵溜の底の土を採れば其れにても宜しい、少しく臭氣はあれど、樹木草花の發育には非常に効能のあるものである。

質 黄土の性

○黄土の性質 薄黄色な土で、此の土も盆栽家には欠くべからざる大切な物にて、之を求めむには地を掘こと二尺ほど、左すれば粘土の如き粘り氣ありて色の黄ばんでる物を得る、此れが即ち黄土である、此れを用ゆる場合には重に赤土に交せて鉢の下の方へ入れる、此の土の特殊の機能は水氣を早く吸ひ

赤土の性質

取りて、鉢より外へ出す力を有つてゐるのである。

○赤土の性質 赤土は山の土に多くして粘氣を帯てゐる物と、乾ひてゐる物の二た通りある、粘氣を帯てゐる物は盆栽に用ひて面白くない、故に乾ひてゐる物に砂と田土とを各等分に加へて能く混て、一度荒き篩にてこしたる物を用ゆるがよろし、樹木の根を固める爲めには、此の土を用ゆるが至極適當である。

田土の性質

○田土の性質 盆栽には良き土にて、即ち田甫たんぼの土の事を云ふ、田甫たんぼの土は多少肥を含み居れば、盆栽用の土に用ひて大ひによろし、殊に草花を養ふには此の土を最も宜しとす、之を用ひむには先づ土を二三日天日に干して、水分を發散せしめ其れを細かに碎きて、然る後に篩にて能くふるふて、塵埃小石の類を除きて用ゆ。

眞土の性質

○眞土まうちの性質 此の土は普通庭などにある土にて、盆栽には感心せぬ土なれど鉢へ移植いしやくるまで地に植て置く場合には、其の功能著るしきものである、此の土は黒土の如く、其の色黒くして且つばらくに乾き切つてものである、而

肥土の性質

して其の多くは砂を混じてゐるから、此の土を地植に用ひんとする場合には能くく碎くだきつふして篩ふるひにて土と砂とをふるひ別けて用ゆるがよろし。

○肥土の性質 此れは人工の土にて草花の培養さつては、盆栽用として又た欠くべからざる物である、此の土は文字の現はす如く、土に肥を交せた物である其れ故に素もとより天然にあらふ筈はずはない、是非とも人工もて拵はしらねばならぬ其の拵はしらへ方は別段べつだんに面倒めんどうではない、寒中かんちゆうに日射ひあたりのよき土地を選びて、四角なと丸なと好みの形に周囲ぐわいを囲かこみて、其の周囲は藁わら又は蕙むしらで囲んで置き、而して此の中へ好みの土を入れ、其の上より大小便を注ぎかけて、其のまゝ日に照てらさせて置く、但し此に注意すべきは、雨に當てゝはならぬのである、故に雨天の時は菰こもか板いたかを上に載せて置く、斯して置くと懸やぶて乾きてかららくに成る、此の時に再び大小便をかけて、其のまゝ雨に當ぬ様にして三月の中旬まで打ちやつて置くと其の土は龜かめの甲こうの如く裂けます、此の時にも早や肥が土に全然すつかりと浸み込みて臭氣は更さらにない、之を成るべく細かく碎きつふして、

篩ふるいにてふるふて、小石や塵ごみを丁寧ていねいに取りて用ゆるのである、但し注意すべきは、此の土を其のまゝにて用ゆれば、所謂いわゆる肥負こぼまひをするから、此に他の土を半分だけ交せて用ゆるがよろしい。

此の外に尙なほは陰土かげ、京都土きょうとなど、云ふ名稱を附つしてある物があるが、併し先づ以上の十種だけを心得てゐれば、凡ての花弁果樹かきくわじゆの培養ばいよう及び盆栽用には差支はないのである。

肥料の種類  
性質

○肥料の種類と其性質

肥料にも天然てんねんの物と、人工じんこうにて製造せいぞうせる物との二種ありある、天然の物よろしきか、人造の物がよろしきかと云へば、其りや無論もちろん人造の物がよい、と云ふのは天然の物には必らず多少自然的に、種多しゆたの物が混合こんごうしてゐるから、人工にて純粹じゆんじゆつの物を製造せし其れには、無論及ばないのである、晩今ばんこんは應用化學の進歩殊じゆに著るしく、従したがつて人造にて様々なる完全な肥料が製造さるゝに依り、家庭園藝の肥料としては、人造肥料を用ゆるの優まされることは云ふまでもなければ

人造肥料  
の種類

併し天然肥料を用ゆるにも無論よろし故に、天然肥料の種類に就て其の性質を委しく述べて置く必要がある、同時に天然肥料を作物其の物に施すの欠くべからざることは、素より云ふまでもなきことである、だが併し其の功能と云ふことに就ては、人造肥料の方が著るしいのである、左りながら人造肥料を用ゆると天然肥料を用ゆるとは、其の之を行ふ人の任意である、園藝用として人造肥料中其功殊りゆうとに著しき物は、硫曹りゆうそう肥料、多木肥料、日星にっせい印肥料さてはブランド、ソード肥料等である。

次に花卉果樹かきくわじゆの培養盆栽等に用ゆる天然肥料の重なる物の種類と、其の性質に就て述べれば左の如くである。

- 一 油粕あぶらかす
- 二 貝殻かいがら
- 三 鶏卵けいらんの殻から
- 四 泥水どろみづ
- 五 米泔水めいせんみづ
- 六 魚うをの洗あらひ汁じゆ
- 七 干鱈ほしか
- 八 下肥しもこに
- 九 松魚節かつぎせし
- 十 茶粕ちやく
- 十一 厩肥うまや

先づ以上の十種を重に用ゆるのである、其の委しき事は追次之を左に述べむ。

○油粕あぶらかす 盆栽には最も適當なる肥料にて、之を施ほすには細かく碎くだきて粉こなとし

天然肥料  
の種類

油粕

て、土を掘り少しづゝ三四箇所ほどに置き、上より菰をかふせて水を與ふるがよい、尙ほ早く能く肥の廻る様になさむには、油粕を熱湯にて溶きて、其の十分に溶けたる時に、水を加えて能くかき交せて、根の周囲へ與ゆるがよろしい。

貝殼

○貝殼 貝殼も亦た肥料として、盆栽に施せば中々大した功能がある、其の用ひ方は二た通りある、一は貝殼を水にて四五回よく綺麗に洗ふ、此れは何にも貝を清潔にする目的ではない、貝につひてゐる鹽分を去る爲めである斯して其れを鐵槌の類にて碎きて、臼にて挽きて粉末とし鍋に入れ水を加えて、とろ火にて二時間ほど煮きて桶などへ入れて、貯はねて置ひて少しづゝかけるのである、又その一方は貝殼を同じく二三度洗ふて桶へあけ、水を十分に張りて其のまゝにして、時々交せては打ち棄て置くと、水は腐敗する此の腐敗つた水を肥料として用ゆるのである、其から貝殼の種類である何の貝殼を用ひても差支はないが、併し肥料として最も功能のある物は蜆

鶏卵の殼

かあさりである、其の次は蛤か牡蠣である、何れも十分に能く洗ふて鹽氣を取らぬと盆栽の爲めによろしくない。

○鶏卵の殼 玉子の殼も、貝殼と殆んど同じ位な成分を有してゐる物ゆへ、棄てずに貯置きて肥料とすれば、随分功能のあるものである、此れを用ゆるに二た通りある、一は割つて臼にて挽きて粉として與ゆる、一は二つに割た物を、其のまゝ鉢へ伏せて置けば、其の土に密着いてゐる處より次第に腐りて、肥が廻るのである、盆栽に卵子の殼の置れてゐるは、体裁にあらずして、全く肥料を取らしむる目的である。

泥水

○泥水 下水や溝の中に溜つてゐる泥土は、盆栽の肥料として亦た功がある、先づ泥を取つて桶へ移し、米泔水を入れて能く交せ、二三日そのまゝにして置ひて、其の上澄の水を用ゆるのである。

米泔水

○米泔水 米を洗ふた、其の最初の濃き米泔水を桶へ取りて貯わねて置ひて、此れに等分の水を交せて、時々與ふれば亦た非常なる功がある。

魚の洗汁

○魚うほの洗せん汁じゆ 良よき肥料ひよくである、生魚なまうほを料理りやうせざる家庭かていはない、魚うほの洗せん汁じゆとは即ち生魚なまうほを料理りやうして洗せんひたる其そのの汁じゆを云いふのである、此これが盆栽ぼんざいに非常ひじょうに能よく利きく肥まとなるのである、故ゆゑに盆栽ぼんざい家は魚うほの洗せん汁じゆを棄すてず、一定いぢやうの場ば處ちよを定ぢやうて其その處ちよへ入いれて貯たくわへて置おくようにするが可よい、但たゞし鹽魚しんぎよの洗せん汁じゆや鹽しん分ぶんを合あひでる物ものは、決けつして用もちひぬがよろしい。

干

○干ほしか 盆栽ぼんざいの肥料ひよくとしては、油糟あぶらぞうと相あ竝ならんで十分じふぶんに功能くわん能がある、之これを施せすには其そのの儘まま碎くだきて粉こなとして與あねても、無も論ろん差さ支しはないが其そのれよりは碎くだきて鍋なべへ入いれ、水みづを十分じふぶんに張はつて煮たきて、溶とかした物ものを貯たくわへて置おひて、少すこしづゝ撒かけるがよろしい、斯かすれば肥料ひよくが萬遍まんべんなく土つちに廻まりて、能よく功こうを奏そするものである。

下肥

○下肥じんぶん 人糞じんふん小便せうべんの類るいも亦またた盆栽ぼんざいの肥料ひよくとして、殊ことの外ほか功能くわん能のあるものであるが、併ひし我々われわれの習しゆ慣かん上じやうじやう不潔ふけつ視しするの甚こだしきと且かつつ一種いっしゆの臭しゆう氣きあるを以もて、之これを盆栽ぼんざいに與あふるものなけれど、觀實かんじつ樹木じゆもく類るいの盆栽ぼんざいを仕立しだむ爲ために、下拵げぢゆう

へをなしつゝある中なか、即ち未だ鉢ひちへ上あげざる前に、之これを與あふれば大おほひに功こうあるものである。

松魚節

○松魚節まつぎよせう (糟ぞうを用もちゆ) 松魚節まつぎよせうは盆栽ぼんざいの肥料ひよくとしては上等じやうとうの物ものである、松杜松まつとせうなどに與あふれば頗おほる功こうがある、と云いつて松魚節まつぎよせうを其そののまゝ卸おろして與あへては、嘗かつてたに價あいの高たかくつゝのみならず、肥あすぎで反かへつて樹きを損こする恐おそれがある、故ゆゑに松魚節まつぎよせうを肥料ひよくとして用もちひる時には、其そのの煮出にだし滓かすを用もちゆるのである、煮出にだし滓かすの出来きぬ家庭かていはなき故ゆゑに、其そのれを棄すてすに箆いかきへあけて、四よ五ご日間かひかんに於おてゝ、摺すりり潰つぶして粉こなとして、貯たくわへて置おひて用もちゆるのである、但たゞし少すこしにても鹽分しんぶんを合あひでる物ものは、斷たんじて用もちひてはならず、又また其そのの貯たくわへて置おにも鹽分しんぶんの移うつらぬ様ようにするが可よい。

茶 箱

○茶滓ちやくさす 立派りっぱな肥料ひよくとなるのである、因ゆゑて先まづづ茶滓ちやくさすを干かして貯たくわへ置おき、能よく乾かわきたれば手てにて揉もみて細こくして袋ふくろへ入いれ置おきて、時々ときとき與あふべし其そのの與あへ方は根ねより一寸いっせんほど離はなれたる處ところを、圓まるく淺あく堀ありて其そのの中なかへ萬遍まんべんなく入いれ、上うよ

厩肥

り土をかぶせて、水を與へるようすれば宜し、此の肥は凡て暑に弱き樹木  
草花などに與へて宜しと云ふ。

○厩肥 此れは牛馬等の家畜類が、日々排泄する大小便を藁の細かく切りたる  
物の上に取りて、即ち土の上へ排泄させて、之を貯へ積み重ねて藁ぐるみ腐  
敗せるる物を云ふのである、而して此の肥料は花卉界樹の培養に最も良好な  
るものなれど、家庭にて之れを得んこと困難なれば、家庭園藝には之を用ゆ  
るに及ばざらむ。

以上の肥料は、花卉果樹の栽培盆栽の仕立方、左ては蔬菜の培養等に一般に用  
ひて、其の功あるものにて、中に油槽下肥千鰯肥魚の洗ひ汁松魚節泥水等は  
その効能殊に著るしきものである、なれど下肥と厩肥とは其の効著るしきにも  
拘はらず、家庭にては之れを用ゆるの誰しも好まざるを以て、他の種類の物を  
用ゆるがよろしからか、奥様や令嬢が下肥の田桶を肩にさるゝと云ふは、氣の  
利きたるばんち書にもありそふで、感心されれば他の肥料を選ばるゝがよろ

豆腐粕

し、併し其の滑稽的なるを忍んで之を與へらるれば、作物に對しての効能は、  
蓋し甚大なるものであると云ふも、決して過言ではないのである。  
以上の肥料の他に、亦た肥料として用ひて、莫大なる効能を有してゐる物は、  
豆腐粕である、豆腐粕は都會の土地に於ても、容易く之れを求め得らるゝを以  
て、而も臭氣なく取り扱ひに極めて便利よろしきに依り、家庭園藝用の肥料と  
して豆腐粕を勧めるのである。

繁殖法の種類と仕方

○繁殖法の種類と仕方

繁殖法とは前に述べたる通り、同一種の物をふやすことにて、其の繁殖させる  
方法に、五通りある、即ち

- 甲 實生法。
- 乙 接木法。
- 丙 挿木法。
- 丁 壓條法。
- 戊 根分法。

此の五種である、此の中何れかの法を用ひて、其々繁殖させるのであるが、  
其の仕方は盡く趣を異にせるを以て、今左に其の仕方に就て述べむとす。

甲 實生法の仕方

家生法



實生の種類  
法の種類

實生法とは實まき法の事にて、即ち種子を播きて苗を作ることを云ふのである。花卉類の凡ては皆な此の實生法に依つて繁殖せしむることを得るも、果樹の類に至つてはこの法に依つて繁殖せしむれば、十中の九まで不完全なる發育をなす者なれば、接木挿木等の法を用ひざるを得ないのである。

床地へ種子を下す  
仕方

實生の仕方に二法あり、一は床地に種を下し、其の芽を出したる時に花園へ移植ぬるのと、初より花園又は畑へ下すのである、併し花卉類に在つては、最初床地へ下し其れから花園より畑へなりへ植ぬ換るが、其の發育をしてより十分ならしむる効があるのである。

さて床地へ下す場合には、先づ其の土を十分にならして、少しく元肥を施して後に、初めて種子を下し、上より砂勝の土を薄く覆せ、尙ほ糞糞などの類を掛けて置き、その芽を出したる時に、糞を去り引き續きに、薄き追ひ肥を與へ水を十分に與へて、苗の長が二三寸に及びたる時に、花園なり畑地へなりへ移して、少しばかりの肥料を施し、續て水を與へて其の手入を怠らざれば、發育す

床地の事

ること云ふまでもないのである。花園又は畑地へ直に種を蒔く時にも、以上の如き手續を履めばよろしいので、種子を下してから、砂勝の土を薄く掛けて置くのと、糞の切つた物か、又は菰などを掛けて置くのは、芽を出さしむる事に就て、必須缺くべからざることなれば、必らず忘れてはならず、又た此れと同時に種子を下して、砂勝の土を薄くかけたらば、直に上より水を與へて置くと云ふ事をも亦た忘れてはならぬ、大切なことなのである。

土地を換  
て植へる  
事

床地とは種子を下すべく爲めに、設ける小さな畝でもよく、又た一の摺鉢焼の如き大きな、植木鉢を用ひても差支ないのである、實生させるには、兎も角も床地に種子を下して、芽出でたれば薄き肥料を少しく與へ、一二寸の苗となりたる時に、初めて畑地か園地へ、移植するがよろしいのである。次に實生法に就て更に注意すべきは、毎年同一地に同一の花弁の類を植ぬぬことである、必らず其の場處を換へて植ゆるがよろし、併らざればよき花を咲さ

んこと困難である、此れ等の事も家庭園藝を行はん人は、是非とも心得ざるべからざる要件である。

接木法の仕方

乙 接木法の仕方

接木法は園藝作物を繁殖せしむるに、最も容易にして且つ便利になし能ふ法にして、普通に殊に多く用ひらるゝ仕方にしあれば、亦た大切な繁殖法である花卉類は敢て此の法を行はずとも、實生法又は挿木法によりて容易に繁殖發育せしむる事を得るも、獨り果樹類の凡てに至りては此の接木法に依るにあらざれば、蓋し完全なる發育繁殖を望むことは出来ないものである、此の一事は苟くも家庭園藝を行はむす人は斷じて忘れてはならぬ、大々的必要なることである元來接木を行ふの方法は、其の仕方の種類が實に十種ほどある、だが然し之を大別すれば、枝接と芽接の二通りである、枝接とは枝に枝を接ぐ法にして、芽接とは枝の代りに其の芽を接ぐ法のことを云ふのである。今左に接木を行ふに當つて、一般に心得ざるべからざる大切なる事項に付き、

枝接と芽接

了解に便宜なる爲めに、項を分ちて之れを述べむ。

砧木の事

○砧木の事 砧木とは接がるべき株のことを云ふので、言葉を換て云へば接るべき樹の幹の事を云ふのである、さて此の砧木に二たつの種類がある甲を居

居接砧と堀上砧

接砧といひ、乙を堀上砧といふ、甲は其のまゝにて切り取つて接ことを云ふ

即ち實生法又は挿木法によつて、培養したる砧木を掘り起さず、其の接ふと思ふ部より切り取つて、接合す仕方を云ふので、掘り上げ砧とは、甲の反對で、即ち實生又は挿木法に依つて、培養したる砧木を掘り起して、頃合の處を切り取つて接ぐ仕方を云ふのである、其の用ひようと乙の方を用ひ様とは、接木を爲さんとする人の任意である。

次に接木を爲すには、砧木を何んの樹でも差支ぬから、樹幹に接ばよいと云ふ譯のものでは決してない、其の樹の質が極く能く似てゐる物に接ねばならぬ、併らざれば兎んでもない物が出來上つて終ふのである、仮令ば桃に杏、李に梅など云ふが如くである。

接木をなす時期

砧木の作り方

接木をなすに用ゆる道具

○接木を爲す時期 接木を爲すには、接ふと思ふ時に何時なしに行ふてもよいかと云ふに、決して左様でない一定の時期がある、だが樹木草花の異なりたる性質に依つては、其の時期に多少の相違が無論あるから、素より一概に云ふことは出来ぬが、先づ春季植物の芽を出して、その元氣の殊によるしき時に於て行ふが第一である、故に春期を以て接木の好時期と見なせばそれでよいが、彼の花卉中の王とも云ふべき、牡丹の種類に在りては、秋期を好時期とされてある。

○砧木の作り方 接木法に依つて、果樹類を繁殖せしめんには、必ず砧木を作らざる可からず、砧木を作るには殊更に云ふまでもなく、實生法か又は挿木法に因つて、十分元氣のよき砧木を培養するの必用があるのである、砧木は何を云ふても接木の基礎なるを以て、特に元氣のよき發育盛なる物を選ばねばならないのであるや、素より云ふまでもなきことである。

○接木を爲すに必用なる器具 接木を爲すには多少の道具が必用である、其の

器具とは如何なる物かと云ふに、即ち

鋸のこぎり○

小刀こがたな○

鋏はさみ○

接繩つぎなわ○

接蠟つぎろう○

以上の五種である、接木を爲す場合には、徹頭徹尾此の五種の器具を準備して置く必用があるのである。

鋸は樹の幹に接木をする場合に、其の幹を平に切るべく爲めに用ひられるのである。

小刀は西洋ナイフの類か、又は切出の類を用ゆるが可い、此れは砧木の皮を開く爲に用ひられるのである。

鋏は枝を切る爲めに用ひられるので、即ち木鋏を一番に使ひ易いから多く用ゆる。

接繩は接木を行ふたる其の部を、巻き縛る爲めに用ひられるので、多くは藁を用ひ又た芽接などを行ふたる場合には、細き物が必用なれば藁表の藁の古き物を用ゆる、而して其の接木したる部を縛へたれば、直にその上より水を十

鋸 小 鋏 接繩

接 蠟

分に繩へかけて置く必要があるのである、さて斯して縛れたる繩はそのまゝにして打ち棄て置くと、工合よく癒合た後に於て、自然と腐敗て取れてしまふものである。

接蠟とは前條の手續に依りて、藁にて縛へたる其の上を、更にこの蠟を木綿片に敷きて、其れにて巻ひて置く必用があるよりして、此の接蠟が大切であるのである、此の蠟は商品として販賣されてあるが、併し家庭にて製せんとならば、松脂に密蠟を加へて、此に豚脂を少しく交せて煮きて、冷した物を用ゆるがよい、其方は松脂一分に密蠟二分の割合にて、先づ松脂を碎きて鍋へ入れ、とろ火にかけて其れが溶たる時に、密蠟を入れて能く交せ次に豚の脂肪を松脂の半分だけの量を入れて、混合して火より下して冷して、塊た物を云ふのである、是れも接木には無くて叶はぬ大切な物である。

砧木を切る心得

○砧木を切る心得 砧木を切り、接穂を合すに其の砧木何れの部を切つても差支ぬかと云ふに、決して左様でないのである、樹の心と皮の間の軟らかな部

を切つて、其處へ接穂を接合せる様にせねばならぬ。

○砧木と接穂に就て 接木に用ゆる砧木は、余り太く大なる物はよろしくない成るべく細く小さき物の方がよい、とは小さき物は其の發育力盛んなるものゆへ、癒合することも早く、又た癒合したる後も其の發育速やかなるものゆへ、實生法に依つて作りたる苗の、二三年を経た位のところ、砧木として最もよろしく、又た接穂は前年生の物にて殊に元氣よく、而も芽の三個以上生じたる枝に就て、其の中央の部より二三寸位の長に切つた物を用ゆるがよい。

砧木と接穂に就て

○接穂に就ての注意 接はに用ゆべき接穂は、必らず前年生の物にて、無傷の元氣よき物を選び、而して其の中央より切つて、尖に必らず新芽の三個以上出てゐる物に限るのである、新芽の少なき物や枝の下より切つたりした物は接穂として其目的を達し得られざるものたる事を、忘れてはならぬのである以上の事項が先づ接木を爲すに就て、一般に心得ざるべからざる大要件にて、

以上の要件を一つでも欠きたる場合には、接木をして満足なる結果を得んことは難いのである。

次に接木の仕方の種類に就て述べむが、尙ほ一つ注意をすべきは、接木したる部を縛へるのに、多少の參酌があるので、即ち樹の質の硬き物は、堅く縛へるがよろしく、軟らかき物は成るべく軟らかに縛へるがよいのである。

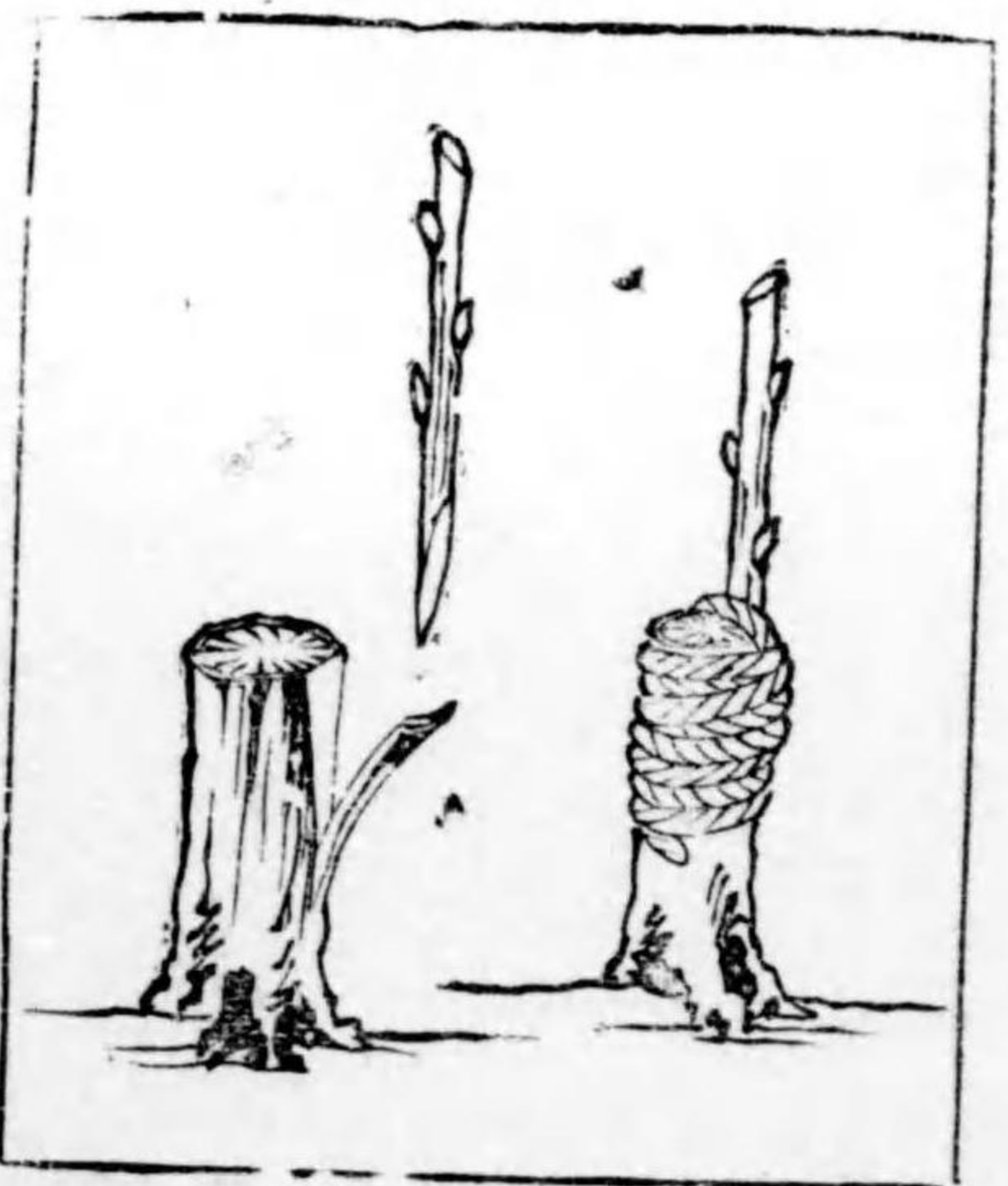
### ○接木の仕方の種類

接木の仕方は前にも述べたる通り、枝接と芽接の二種あり、だが併し此の中に枝接が最も行ひ易くして、且つ接木したる結果が、非常に良好なるものなるを以て、斯道の専門ならぬ家庭にて、娛樂的に行なはむには、枝接の方法に依りて、研究さるゝの優れるに如ざるなりと信するを以て、本書には枝接の仕方にのみ就て之れを述べ、芽接の事は殊更に省ひたのである、仮し之れを述べらるも其の方法復雜にして、馴れざる者は往々不結果に終るを以て、寧ろ枝接法に依つて行ふ方容易ならむ。

### 接木の仕方の種類

### 切接の仕

○切接の仕方 先づ接んとする砧木を、二寸ほどの長に平に切り、其の心と皮の間との軟かき部を圖の如く切り置き、次に接穂の枝を三寸ほどの長さに切り、其の上部を平に切り、下部即ち接合す部を一方は五六分ほど、又の一方は二三分ほど削りて、さて削たる尖を當めて砧木の切り口へ入れて、砧木の切りたる皮を當て其の上を葉繩にて巻きて縛へ、而して土を接穂の上部が隠れる位に覆せて、芽を出して來た時に、土を去つて接きたる部を出すのである。



切接の圖

### 根接の仕

○根接の仕方 此れは砧木の根を前條の如く切りて、接穂もまた前條の如くに切つて、其の根へ接合すので、つぎてよりの後の手續は、前條の如し此のつぎ方の目的は尋常の臺木に上等の種のつぎ穂をつぎて、善良なる物を得んと

腹接の仕方

するのである、天竺牡丹、柿、桑、牡丹、芍薬等の如き、凡て宿根草木類に施すべきものである。

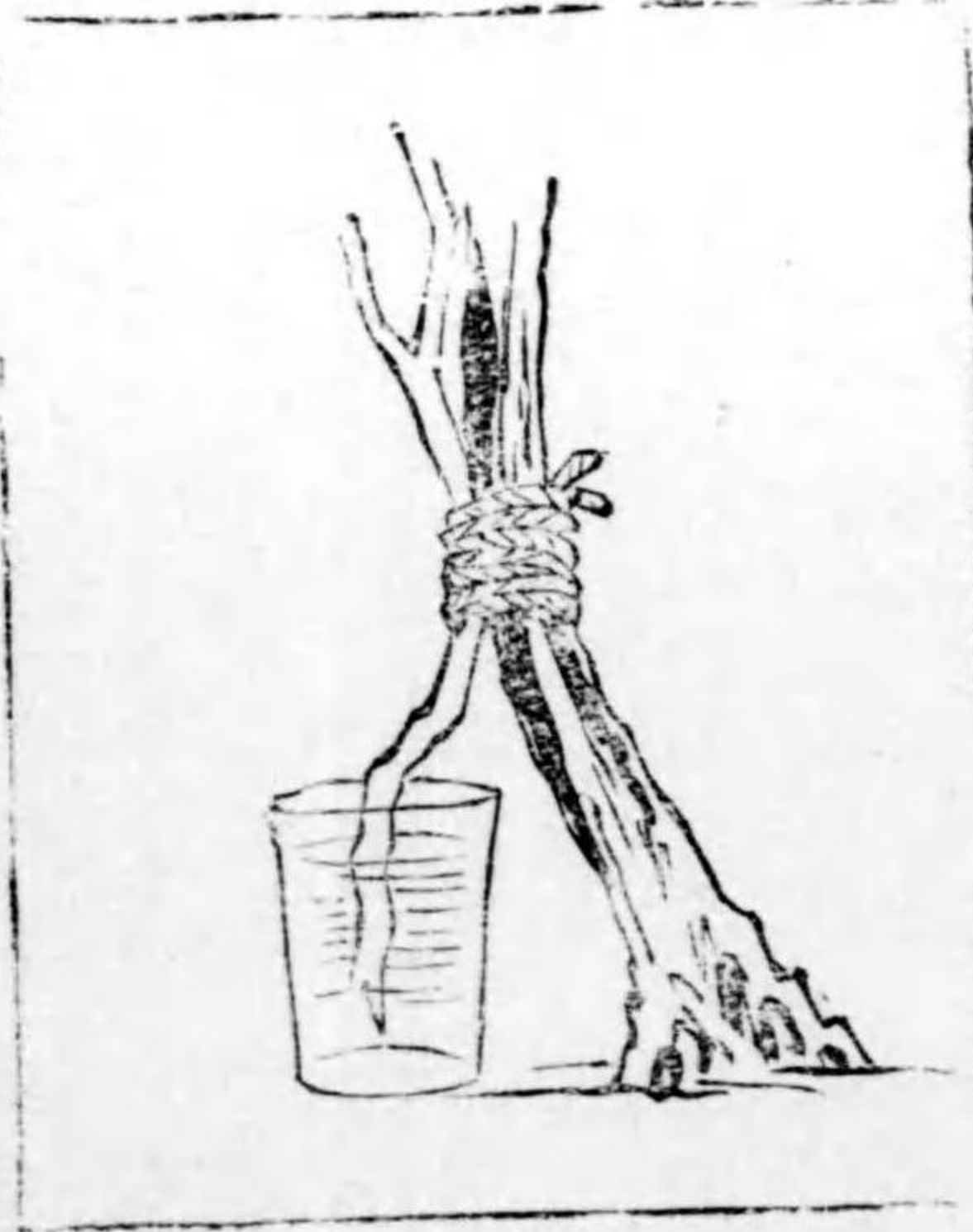
○腹接の仕方 此れは臺木側部を縦に切り開きて、つぎ穂の下の部をくさび形に切りて、其の部に挿し込み、能く合せて其の上を藁にて幾重にも余り堅からぬ様に巻き縛りて置くのである、菊、朝顔の類に此の法を行へば、一本の株より種多の異なりたる、花を咲すことを得て、殊に面白きものである。

挿接の仕方

○挿接の仕方 此の法はつぎ穂の勢弱が弱くして、其れを切つた時には枯れ凋む恐れのある種類の物に用ゆる法にて、先づつぎ穂を濕り氣多き土地に挿し植にする、但しさし植にする場處は、つくべき臺木の傍でなくてはゆかぬ、さて挿し植をしたら、臺木を地上より二三寸の處にて、側部を斜に切り其の切口へさし植をしたるつぎ穂の中央の處を、少しく切りて右のきり口へ合して、藁にて緩く十分に巻き縛りて置き、而して芽出て十分に癒合したらば臺木の根を斷ち切つて置くがよい。

○水接の仕方 此れも亦たつぎほの勢力弱き物に施す仕方にて、前條のさしつぎの仕方と、毫も異ならないのである、其の異なるところは、つぎほを土中に挿す代りに、竹の筒か器物へ水を入れて置ひて、つぎほの下の部を右の水の中へ浸けて、前條の如く臺木につなぎ合すのである、其の委しきことは圖の如し。

○寄接の仕方 此れは楓又は躑躅の如き、稍や木質の堅實なる物に施す法で、即ち種々の物を一處に寄せて、其の枝の中央の部を、互ひに少しく削りて、前のさしつぎの時の如くに、互ひに寄せて其切口を能く合せ、藁にて十分に緻密に緩ひ目にいわねて置くのである、此の法を行へば一株にて種々の異なりたる花を咲し得べく、又た數個の臺木の勢力が、一つの株に集合



水接の圖

する道理なれば、随つて堅牢なる樹を作ることが出来るなど、此の法を巧みに應用せば、面白き細工物を拵得らるゝのである。

此の他に舌つぎ、合つぎ、鞍つぎなど云ふ名稱を附せられたる仕方あれども、余りに複雑なれば、此の位に止めて、次には挿木法に就て述べむ。

挿木法の仕方

○挿木法の仕方

挿木法は古來より廣く一般に用ひられつゝある繁殖法にして、即ち枝を切つて土中に挿入し、以て根を生せしめて、その枝を一つの立派な樹とするのであつて、先づ砂地がちな床に於て繁殖せしむるは、果樹類には其の功なきも花卉類には此の法を用ゆるぞ



寄接の圖

挿木の種類

殊によるしきである。

さし木を行ふに就ても、また一般に心得べき要件があるにより、左に項を分ちて聊か述べむ。

挿木法に依りて繁殖せしむべき枝を、さしほと云ふさて此のさしほも前年生の元氣よき枝か、本年生にても發育十分にして、殊に元氣の銳きものを貴ぶのである。

○さしきの種類 さしきも亦た分ちて二た通とす、即ちめさしと枝さしとである、併しながら家庭にて馴れざる者が行はんには、枝さしの方を宜しとす、何となれば其の法ことにやさしくして、且つ好結果を收むる事の多きを以てある、めさしは其法困難にして馴れざる者は、比較的に好結果を收むることの難ければ、本書には枝挿の法に就てのみ述べむ。

○挿木をなす時期 さし木は春夏秋の三期に於て、之れを行ふことを得、併し樹木花卉等その物の性質に依つて異なれど、樹木類に在つては春芽を出す前

挿木をなす時期

挿木法の種類と其の仕方

に行ふがよく、夏差秋差は、其の莖葉ともに能く固らんとする前に於て之を行ふべく彼の菊の如きは莖葉ともに、固らんとする八九月の頃に差木すれば其の年の十一月には早や美なる花の咲くを見られるのである。

○さしほを切る心得 さしほとして用ゆべき枝をさるには、速かに枯れ凋むべき種類の物は兎も角も、然らざる物は晴天の日を選びて、而も其の日中に於て、切斷するを最もよろしとなす。雨天曇天は勿論のこと、晴天と雖ども朝夕に於て之を行へば、さし木したる後に於て、地中の水分を吸収すること遅きを以て、従つて好結果を收むることが難いのである。

以上が先づさし木法を行ふに就ての、大体の心得である、此の心得を十分に會得して、而して後に始めてさしきの事を行ふべきである。

○挿木法の種類と其の仕方

さし木の仕方にも亦た色々の種類がある、其の種類中に於て、最も容易に且つ其の結果の良好なる仕方に就て述べて置ふと思ふのである。

方 節差の仕

○節差の仕方 節差の事を、又た玉さし芋さしとも云ふ、其の仕方はさしほを三四寸の長さに切り、其のきりたる下の處即ち差すべき處に、能く濕ひたる土に細かき砂を交せて、徑一寸ほどの球状になしたる物を以て包み、而して之を土の中にさして發育せしむるのである。

撞木差の仕方

○撞木差の仕方 此の法は先づ前年發生せるゑだで、而も本年そのゑだに芽を出してゐる物を選びて、前年の發生にかゝるゑだの處を撞木の形の形にきりて、そのしもくの形をなしてゐる部を土の中へ差すのである。撞木の形とは丁の形で下部の一の字形をなしてゐる處は、前年發生せしゑだにて、上の一の部は今年そのゑだより發生せし新枝のことである。



撞木差の仕方



肉差の仕方

○肉さしの仕方 此の法は一寸と風變の仕方にて、先づ春季芽を發したる頃に其のさしきとなさんとするつぎは其の皮だけを、半ば削り取りて其の削りたる部に粘土を塗り、其の上を堅紙にて包み、其の傍に添木乃至は添竹を施して、右のつぎはの上部と下部とを、其の添木にいねて置く、併すれば時日を経るに従つて、其のけづりたる部に塊が出来る、此れが即ち肉とも云ふべきものにして、さて入梅の頃に至りてその塊の生じたる部より切斷して成るべく日の當らぬ陰の土地を選びてさしきをする、而して其の十分に地中の水を吸ひ上げて、元氣の良くなるまでは、太陽の光線に直接に當ぬ様にし若し日當の良き場處であつたならば、其の上に簀にて日覆をなし置くの必用がある、以上の仕方を肉差と云ふ、此の法に依つてさしきをすれば、つぎ難む物と雖も、亦た容易につくものである。

挟差の仕方

○挟さしの仕方 此は椿、山茶花等の花卉類を十分に繁殖せしむべく爲めに、用ひらるゝ處の方法であつて、其の法はさし木せんと欲するつぎはの切斷部

葉挿の仕方

を、尙ほ堅に裂き切り、其の裂き目へ粘土の小さく圓くまるめた物を挟み其の狀、恰も南京玉を含ませたる如くにし、而して其を挿木にするのである。○葉さしの仕方 此はゑだを差すのでなくして、最も元氣よき葉を選びて之を濕り氣の十分にある砂地へさす法にて即ち葉の周囲にある刻々より、地中の養分を吸ふて芽を出し、根を生ずるのである、此れは十分成熟したる葉を選ばざるべからざるを以て、夏の中頃より秋の初へかけて行ふをよろしとす、先づ成熟せし葉を取りて、其を横に半ば以上土中へさせば、其れで可いのである、斯の如くにしてさしたらば、太陽の光線の直射を避るために日をひをして、常に其の土地に水氣の絶ぬ様



葉挿の仕方

になすこそ、此の上もなき大切なことである、重に草花類で、彼の菊、秋海棠の如き物に施して、大に其の功能のある方法として、園藝家の夙に貴ぶところのものである。

先づ以上の仕方に依りて、さしぎをすれば園藝の術に長せざる物と雖も、十中の九までは十分に發育繁殖せしむることが出来るのである。

さて已上の方法によりて、さしきに用ゆべきさしはは、成るべく地面に近き處に在る枝を選ぶべく、而してさしはは其の之れを切斷したる後、三十分間ほどは水に浸けて置きて、然る後に差すをよろしとす。

挿木をし  
たる後の  
手當

又た差したらば日覆をして、成るべく太陽の光線に直射せしめざる様にして、三十日ほど経れば、芽を出し初めるものである。

挿木をし  
べき時

又たさしきを行ふに幾時にても、さしき的时候でさへあらば、差支はなるとは云ふものゝ晴天ではいけない、曇天にして風のなき午前九時より十一時までの間に於て行ふを最もよろしとす。

晴天の時は避るがよろし。

要するに花卉類に在つては、實生法によつて繁殖せしむるより、此の挿木法による方が早く、好き苗を得らるゝを以て實生法に繁殖せしめざれば、苗を求むる事叶はざる物は兎も角も、其の他の物は成るべく挿木法によつて、繁殖せしむるをよろしとす、而も其の法無難作にして、好結果を收むるの易ければ……

壓條法の  
仕方

### 丁 壓 條 法

壓條法と命名らるゝ繁殖法は、俗に云ふとり木法の事にて、其の方法たる最と易しいものである、即ち樹のゑだを其のまゝ地中へ壓入れて、其のゑだより根を生せしめて、而して後に樹より其のゑだを切り取つて、一本の樹となす方法である、ところが如何なる樹木にも、此の法を行ふて繁殖させ得るかと云ふに、決して左様でない、草花の類には無論行ふことは出來ず、又た彈力に乏しき樹木や、根を出すことの遅き樹木類には、此法を用ゆる事は斷じて出來ぬのである、故に彈力に富んでゝ、而も根を出すことの容易なる樹木類、仮令ば藤

彈力性の  
樹木を貴  
ぶ

さり木法  
を行ふ時

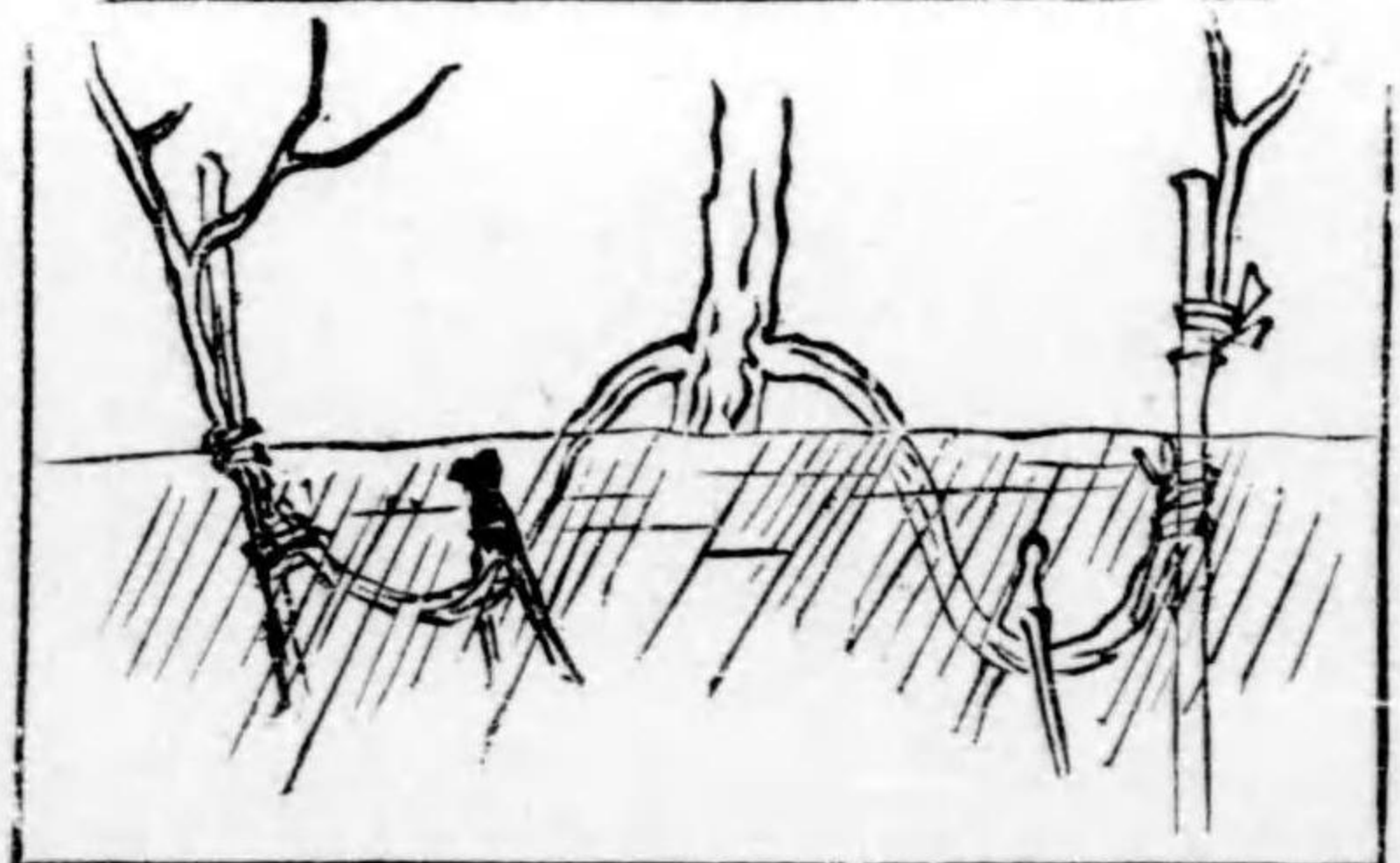
とか柳とかの如き物は、此の法を用ゆれば容易く繁殖させる事が出来る。さて其法は春と夏の二季に行ふので、先づ春なれば前年に生じたゑたを用ひ、夏なれば今年生じたるゑたを用ゆ、即ち成るべく樹の下の方にある元氣のよきゑたを選びて、其の葉を摘み取り、而して其の中央の處を庖丁にて皮を剥いて置き、折れぬ様に靜かに曲げて、地中へ入れ、跳ね返らぬ様に、一方の端へ棒を打ち込んで、ゑたの尖を結びつけ、尙ほ土の中へ埋めたるゑたの中央の部分、跳ね上らぬ様に樹を鑿の手なりに切つた物を打ち込んで、壓へつけて置ひて、其の上より土をかふせ、而して毎日少しづつ水を與へてゆけば、秋に至つて立派な根が生じて苗となるから、此の時に其の枝を母樹より切り離して、それから他へ仮に植へ換へ、翌年芽を出す頃に、又た移植すれば此に完全なる物となるのである、尙ほ假植する時には、餘り肥氣の無い土地を選びて、また肥料も餘り濃からざる物を、少しづつ與ふるがよろし、假植中は樹が未だ幼稚なるを以て、肥氣の強きは其の發育に反つて害となるのである。

假植に就  
ての注意

根分法

### 成 根 分 法

此の法は繁殖法中の極めて容易なるものにて、其の根を損じぬ様に分けてうゑて、水と薄き肥料とを與へてゆけば、完全に發育してゆく方法のことを云ふのである、此の法も亦た何れの物に施してもよいと云ふ譯の物では決してない、此の法に依つて繁殖せしむべき物は、凡ての草花中の宿根物に限られてあるもので、宿根物とは牡丹類、芍薬、菊の類、又は燕子花、莓等を云ふのである。樹木草花等凡て、以上の五種の仕方によつて、繁殖せしむれば、蓋し思ふがまゝに繁殖發育せしむることを得るのである。



成 根 分 法 の 圖

耕し方の  
仕方

### ○ 耕 し 方 の 仕 方

園藝を行ふに際して、耕し方の必用欠くべからざることたる事は、前に述べた通りであるが、さて耕すと云ふことは、如何にすればよいかと云ふ事に就て、聊か述べむ。

耕すと云ふことは、鋤を持って土を掘り、塊をくだきて地をならし、石塊、瓦の破片などを取り除きて、土を平にすることで、此れは土の性來を益々よろしくし、併せて雑草を取り除くと云ふ功がある。

土地を掘りて土をこね返し、石塊瓦片等を去れば、土は道理上膨れて且つ軟らかくなるを以て、地中まで太陽の光線を能く受け、随つて空氣の流通もよろしく、又た水分及び肥料等も萬遍なく浸みわたると云ふ、便利あれば園藝に就て耕やすと云ふ事は、尤も必用であつて、一の物を植ゆる毎に、其の土は必らず十分に耕す様になすべく、且つ耕すこと屢次なれば、成るほど其の土地は益々善良なる物となるのであるから、耕す時には表面のみを浅く掘り返さず、成るべく深く掘かほして耕やす様になすをよろしとす、又た耕やすには晴天の日

耕すことの利益

耕すべき時期

の日に於て、之れを爲すべく、雨天曇天さては日没頃などには、耕さぬ方が其の土地の爲めに如何ばかりよろしきか知れぬので、此等の事は亦た深く注意すべき要件である。

### 第三編 草花培養法

艶にして美、麗にして雅なる草花の培養は、家庭園藝に於て最も趣味深く、且つ心を樂しましめ、目を喜ばしむるの多大なるは、恐らく草花培養の右に出るものやあらむ、而も其の法殊にやさしきものである。

### 第一章 總 說

草花は畦に作りて之れを養ひ、花壇を作りて之を飾り、或は鉢うゑとして、雅致ある棚に陳列なしつゝ、四季異なりたる妙なる花を賞するは、家庭に於て如何ばかり樂しきことなるか、一たび鉢うゑの興味を味ひ、花壇の艶美を知らば草花培養の念は勃々として生じ來るものである、吁美なる哉草花、吁艶なる哉草花……

草花の培養

○草花の培養

凡ての草花を培養するには、畦を造り所謂花園に於て培養すべく、又た鉢うねとして棚に陳列して培養するのである、花園に培養すると鉢うねとなすに論なく、凡て太陽の光線を能く受け、空氣の流通殊によろしき場處を選ぶが、第一に肝心なることである、又た花園を作るには、畦の中も三尺乃至六尺として長は園の廣狹に應じて、見計らひ而して畦と畦の間を三四尺ほどあけて、通路を造りて正しく拵へるをよろしとす、花壇を作るには又た風通しよく日當よき場處にて、凡ての飾に心を用ひ、花その物の色の配合をよくする、即ち種々の花を色彩よく、陳列すると云ふ意匠を十分に凝さざるべからず、又た花壇には不時の風雨強き日光の直射などを避る爲めに、相當の日覆居根等を設くるの必要がある。

○草花の移植と鉢植の仕方

草花を移植せんとするには、凡て花を開くべき前に於て爲すをよろしとす、先

草花の移植と鉢植の仕方

づ前以て花園に移植する物は、畦を能く耕して元肥を十分に施し置き、又た鉢へ移植するには元肥を十分に施し置きたる肥土を用意なし置くの必要がある、さて移植せんとする苗の周囲を深く掘りて、根廻を入れ根を損じね様に土をつけてとり出だしてうへ、うへたれば其の周囲の土を足にて踏み壓へ置くか、棒にて能く壓へて、而して後に水を與へる、鉢なれば前同様の手續にて、瓦の破片又た小石の類にて、鉢の穴を塞ぎてうへ、周囲に肥土を詰めて、指にて堅く壓へて、而して後に水を與へて置くのである、而して移植に用ゆる鉢は、陶焼の粗末なる物を貴ぶ、染付物の美しき物などを用ゆれば、必らず苗を枯すのである、故に陶焼の鉢へ移植して、十分につきて花を開きたる時に、染付物などの立派な鉢へ植ゆるがよろしい。

又た天氣よき日は決して移植を行ふてはならぬ、曇天にして風なき日の午後四時後夕方までの間に於て行ふをよろしとす。

尙ほ草花の培養に就て、室温室等の必用がある、此れ等の必用は時ならぬ時に

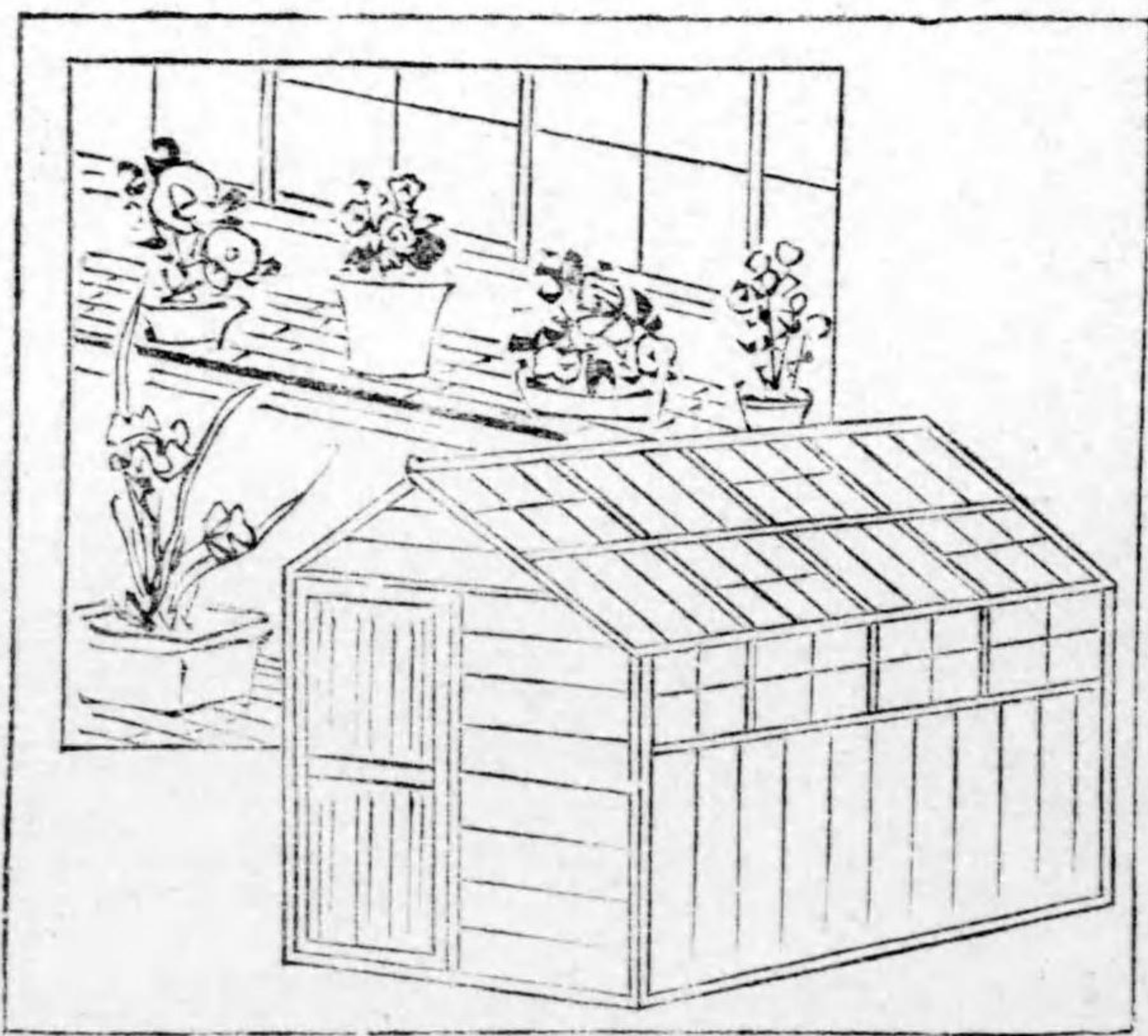
移植すべき時

鉢の関係

温室の拵  
へ方

時ならぬ花を咲すべく、人工の妙を誇る目的にて設けるものにて、結局進歩したる學理の應用に外ならないのである、室温室等を拵ねんには必ず相當の土地と相當の設備を用する事なれば、家庭園藝を行ふ初めの人には、格別の必用もなかるべく、なれど参考までに温室の拵へ方の一般を記さむ。

完全なる温室は、硝子屋根硝子窓にて造られたる室へ、蒸氣管を通じて絶ず蒸氣を通して置くのである、併し斯の如きは富豪の家庭にあらざれば、なし能はざるを以て普通は南向にして屋根も周囲も硝子張の一



温室の圖

棟を拵へ、其の内へ花卉を入れて培養するので、結局太陽の光線をのみ利用して暖を取るのである、又た古來より用ひられてる物は、南向の奥行の淺き土藏である、又た南向の土手へ穴を穿て其の内へ入れて置もよろしい。

第二章 各論

花を愛べく香氣を賞すべき花卉類は、其の數實に百以上もある故に其を一々説んは、蓋し容易の業にあらねば、數多の花卉の内に於て其名も一般に高く知れ渡り、其の花の特に艶麗なる物のみ就て、乘して置かむと思ふのである。

すみれ

○堇菜 名を聞ひてさへ、慕はしき感の生ずる堇菜を栽培せんには、先づ六七月の頃に淺き陶焼の鉢へ細かく篩ひたる土に、肥料を與へたる物を盛りて種子を下し、上より土と砂とを混たる物を薄くかふせて、暖かき處に置けば日ならずして芽を出す、此の時に油粕を薄く溶した物を與へ、其れより秋の彼岸に暖かき畦へ移植して肥料を與へ、十二月頃にまた肥料を與ふれば、一月の末より二月へかけて花開く、開花中も亦た肥料を一回與ふ、その他は時々

牡丹

水を少しづつあたふ、肥料は油粕をよろしとす。

○牡丹 牡丹は花卉中の王なり、之を栽培するには、成るべく乾きたる土地にうゆべく、之を繁殖せしむるには實生法と接木法によつて爲すがよい實生法は秋に種子を茶滓と土とを等分に混ぜた物の中へ入れて、土の中へ埋めて置き、春に至つて肥土又は厩肥乃至は油粕の肥料を與へたる床場へ種子を下し、芽出で三四寸苗となりたる時に之を畦へ移植し同時に肥料を與へ、寒中に又一回肥料を與ふれば、春には花を開く又たつぎをなさんには、八月の下旬に於て切つぎを爲し、其のつぎはの隠る處まで、土中に埋めて芽を出すまで其の上より陶焼の空鉢をかぶせて置くがよい。



牡丹の栽培圖

燕子花

○燕子花 亦たうるはしき花にて、其繁殖法は實生法と根分法とに依る、さて新らしき好みの物を培養せんとならば、種子の未だ莢を破つて出でざる中に採りて、砂の中に入れて、風の當らぬ暖たかき處に貯へ置きて、春に至り肥土または元肥を施したる床場に下し、上より砂を薄く掛けて置きて、朝夕欠さず水を與ふれば、五月頃には早や二三寸の苗となる、その頃に肥料を施し其から入梅の頃に移植せば、其の翌年に至りて花を開く、その花を開く前に二三度薄き肥料を與ふれば、良好であるまた根分せんと欲せば落花後に於て掘り出し陶焼の鉢なり床へなりうねて、肥料を十分に與へ秋の彼岸に至りて移植するがよろし、さて此の花は肥料を好むものゆへ、落花後夏の土用、秋の彼岸、寒中とそれから春先と、開花前とに薄き肥料を、必ずかゝらずに與ふるがよろし。

花菖蒲

○花菖蒲 是れも亦た中々に眺めのある花である、之れを培養せむすには實生法と根分法とに由る、その委しき手續は前條の燕子花と少しも異ならないの

である。

○石竹 亦の名を唐撫子と云ふ絞り紅白などの花をひらきて、見るからに麗はしき花である、之を繁殖栽培せむすには、實生法に依るに限る、その仕方は秋の彼岸に砂と肥土とを等分に合した物にて、作りたる床場に種子を下して水を與へ、上より砂をかけ置き芽を出したる時に、薄き肥料を與へ、花の咲く前に砂勝の土地に移植して、少しく肥料を與へて置けばよい。

○美女撫子 是れは五六月の頃に紅白黄さては絞りの麗しく艶なる花を咲き、長は一尺余に達するものにて、之を繁殖栽培せむすには、實生法によるがよろし、元來この花は濕り氣のある砂勝の土、さては細かさ結氣のさまで多からざる土質を好めば、その心得にて秋の彼岸頃に素焼の鉢へ、肥土と砂と眞土とを等分に混ぜたる物を盛りて、種子を下し上より砂をかけて水を與へ、乾かぬ様にして置けば芽をだすから、その時に薄き好みの肥料を與へ、さて翌年の春に至りて移植して、肥料を少しく與へ、更に五月初旬に肥料を少

しく與ふれば、六月初旬には美事なる花を開くのである。

○芍薬 牡丹と相並むでの名花にして、御存じの如く艶麗にして、而も美しく大なる花をひらくのである、此を繁殖栽培せむすには、春季落葉後に於て、根分法を施すがよろし、此の花の性質は乾ける土壤を好みて、濕氣多き土地を忌が故に栽培せむすには、右の心掛が肝心である、併れども夏期炎熱強き時は、其の部の殊に乾燥するは、反つて良しからざれば、時々水を與ふるの必用あり且つ又た夏期には其の根の得て、あられ易き恐あれば根の部へ藁を切りて覆せ置く心得が必用である、さて落花後に根を損せぬ様に分けて、肥土に眞土砂等を各等分に合したる畦を能く耕し置きて、元肥を相當に施し其れから分けたる根を暫らく日光に曝して置ひてから植へるがよい、肥料は春期開花前と、落葉後と秋と寒中の四回に之れを施せば、十分で又た肥料は何を與ふるも敢て差支なけれど、其の中にて能く利くものは油粕人糞さては魚の洗ひ汁などよろし、斯して栽培せば分植せし年より、三年目に於て又た分



植することを得。

○牽牛花 炎暑の候此ぞと云ふ花の見るべき物なき時に當つて、人の最も愛翫賞美する物は、即ち此の牽牛花である、御存じの通り牽牛花の種類は殊に多く、花に依りて其々雑多の名稱が附せられてある、左れば我れ一と風變の珍物を咲せて、誇らむとするのであるから、朝顔と菊の栽培とに就ては園藝界の苦心物にて、又た園藝界の大立物の二幅對と云つても不可なきである、故に其の栽培方も従つて復雜にして、多大の注意を用するのであるから、栽培せむず人は、分て丹誠を凝し經驗の功を積み、面白き物を培養するの工夫が肝心である、さて其の栽培法の一般を示せば、先づ肥土又は溝土の乾燥せる物を、細かく碎きて篩ひ置き、其れから床場をたがやして、石瓦などの土に混り居らぬ様に篩ひ取りて、其れに前の溝土又は肥土を混せて、平に能く馴し置く、又鉢へ栽培せんには、素焼の隨分大なる物に底へ、瓦又は小石を平に敷き、その上へ荒き真土又は赤土の類を鉢の半まで盛り、その上へ一ば

鉢植の心得

いに前に示めせる肥土亦是溝土を盛るのである、さて斯して床なり鉢なりへ下さんとする種子を、一寸置き位に指で一二分ほどの穴を穿ちて、種子を一つ宛入れ其の上へ何れも川砂を覆せて水を與へ、尙は竹にて其の上への如き物を拵ねて、其の種子の區別を嚴重に付けて置く、此れは其の花の何にたるを鑑別すべき爲である、さく以上の如き装置にして、五月の初旬より六月の初旬へかけて、極く天氣の好き日を選びて、日中に種子を下せば隔日位に如露にて水を少しつゝあたぬるがよい、尙は欲には種子の上へ覆せたる砂の上へ、粉殻を少しづつ一面にかけて置けば、早く芽を出す其れから床場も鉢の置き處も、日當よき場處を選ばねばよろしくないのである。

斯の如くせば、早きは四日目遅くも十二三日位を経れば芽を出す而して本葉を一枚出した時に、天氣よき日ならば夕方に、左なくば曇天を選びて、篋又は鏡の類にて根廻を入れ、根の土を落さぬ様にして、はちなと庭前などへ移植して同時に肥料をあつふ、其の移植するには、勿論肥土に川砂を混れた物を

敷くかはちへ盛りて其處へ移植す、して移植した當初は、兩三日間日をひをなし、而して後は日に當て朝夕如露にて、少しづゝ水をあたゆるがよろし、斯なしゆけば本葉次第に其の數を増して、蔓延び五六寸となりたる時に新芽を摘み取り、又た本葉の際より新らしき芽出れば、其れを摘み取る様にして隔日位に油粕を薄く溶したる肥料、魚の洗ひ汁、米泔水乃至は人糞を緩く極く薄く溶したる物などを、少しづゝ與へればよろし、又た大なる花を咲せむには蕾の出來たる時に、一つ置づゝに其の蕾を惜氣なく摘み取るがよい、次に意匠をこらしたる面白き手、即ち支柱を拵へてやる必用は云ふまでもないことである。

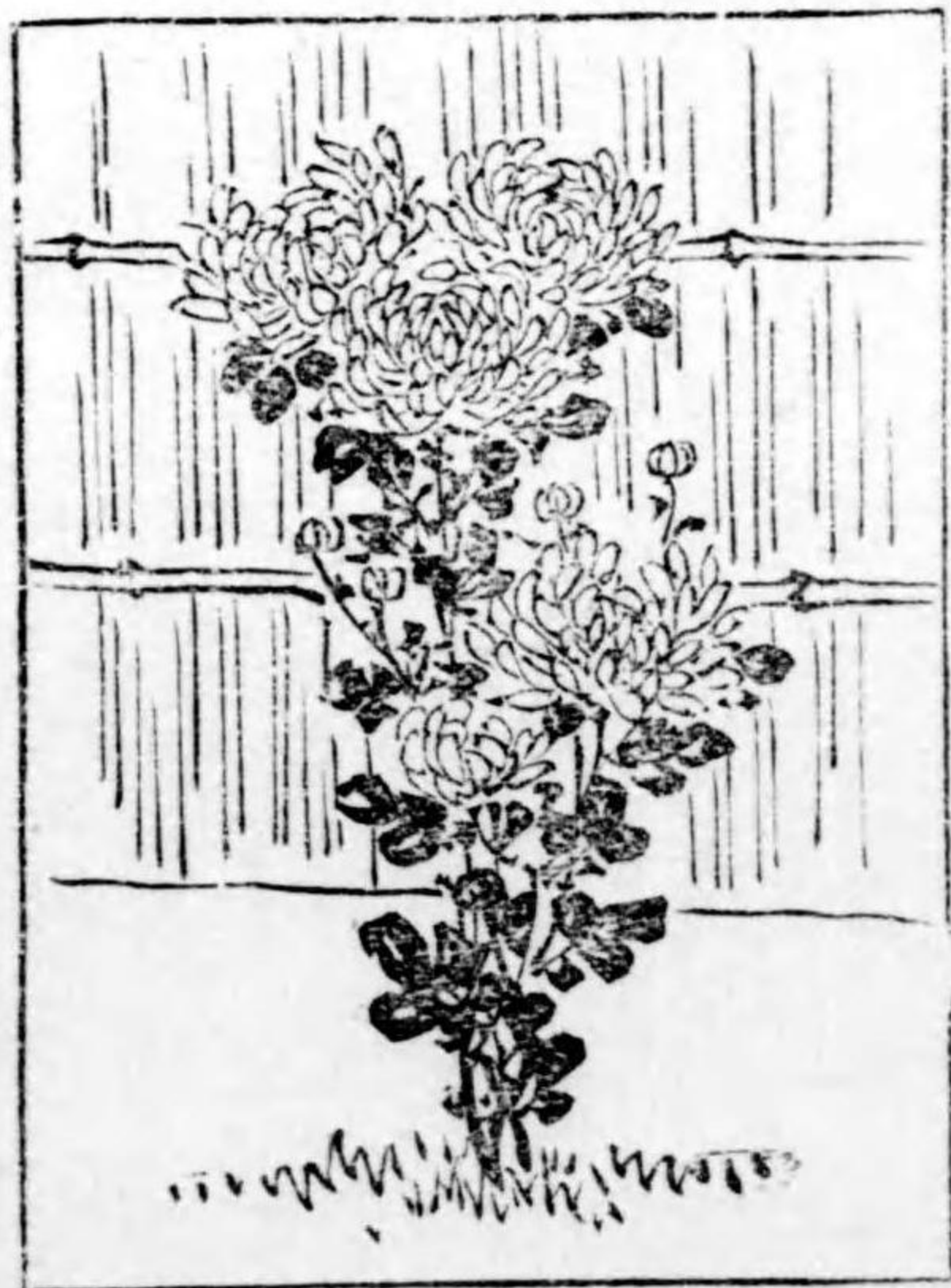
○菊 落葉地をうづめ、四顧の風物轉た寂寥を感じる折から、氣高き風韻を裝て、人の愛翫賞美して止ざる物は、氣骨稜々たる菊花なりとす、是れも亦た朝顔の如く其の種類殊の外に多くして、千差萬別殆んど枚擧に暇あらず、從つて風韻ある物を作り出ださんとするには苦心と經驗を要するのである、苟

菊

菊の根分法

くも家庭園藝を行ふはんとする者は、如何なる事あるも、菊花の培養をなさざるべからず、否な菊花の培養をなさざれば、家庭園藝を行ふとは、決して云ひ能ふべきではないのである。さて菊を培養せんには、通例根分法と葉挿法にて繁殖させるのである。

根分法に依る物は、通常三四月の頃に株を掘りて、其中より良好の物を選びて、三四寸位の長さ揃ひ、日當のよき殊に暖き



菊の花壇圖

場處を選び畦を十分に耕し、元肥をあたへて植付け其れより一月ほどの間だけ、三四回はど薄く溶きたる水肥をあたへ、さて分植せし其の苗より、新葉出で、六つ七つ生じたる時に、四つの葉だけを殘して他は摘み取り、斯て新

らしき莖くきを出させて、其の新らしき莖に新葉が又た六つ七つ生じたらば、其の葉を同じく二つ三つ残すことにして、他は悉く摘み取りて、さて五月の中頃に至りて拵らへ置きたる南向の花壇に、二三本を一株として移植し甲の株と乙の株との中間に、深さ五六寸の穴を掘りて、油槽又は厩肥を十分に腐らせたる物を入れ、上より土をかぶせて水をあたゑて置く、さて秋に至りて蕾つぼみを持ち初めたれば、毎夕夏に於て汲み取り置きたる水をあたへ、而して花壇の背後はごには圍を爲し、障子にて屋根を作り、尙ほ夜分は前に障子を立てかけて夜中の外氣がいきを防ぐふせのである、而して花をひらきたる時に一回、前條の手續に依りて肥料をあたへるのである。

芽挿法菊の芽挿法を行ふのには通例六月上旬に砂氣勝の床を設け、前年生の枝の四節目より切り取りて、其三節目せうの上の處まで土中に挿さして、簣すにて日をひを施し朝夕必らず如露じよろにて水をあたふれば、二十日余にして着きて芽を出す、其れから秋の彼岸前後に於て、花壇くわだんへ移植するのである、其れから後の手續は前

菊の芽挿法

條の根分法の時と同様でよろしいのである、

第四編 盆栽

第一章 總説

○盆栽の意義

如何なる物を盆栽ぼんさいといふか、即ち種々の樹木じゆもく艸花くさばな等を鉢ひちにうゑて愛翫あいがんすること  
をいふ、然し只うゑたのみでは盆栽とは決して云はぬ、仮令は松が其の小さく  
若きにも拘かはらず、幾星霜いくせいじゆうを経たる古來の如き觀かんを呈せしむる様に人工にて培  
養したる物を稱して、眞の盆栽とは云ふのである、其故に若き木を古木の如く  
見せむには、幹みきを曲まげ枝えだを屈くせしむるの用もあるべく、また必要に就ては根及  
び其幹こにも苔こけを生はさすべき必要もある、兎も角も若き物をば古き物の如く天然  
に變化へんかしきたつた様に作らねば、決して眞の盆栽と云ふ譯わけにはゆかず、又た盆  
栽として珍重ちんじゆうすると云ふことは出来ぬのである、故に盆栽を培養することは、

盆栽の意義

盆栽の種類

中々以て困難なることにて、肥料を選び枝振を直し、面白からぬ枝は剪り棄るし、また必要に應じては、幹をも彎曲し屈折せしむることがあるから、其の之を養ふに殊の外なる手續を要すると同時に、また其の成功の如何を待つといふ最大なる楽しみがあるのである、只だ、はちに樹木艸花をうねたるのみにては決して盆栽とはいはぬ。

○盆栽の種類

盆栽を區別して三種類とされてある。

- 一 其花を賞する観花樹木類。
- 二 其實を賞する観實樹木類。
- 三 其葉を賞する観葉樹木類。

さて観花樹木類に屬する物は、梅、櫻、椿等の類で、観實樹木類に屬するものは、桃、さくら、林檎等の類で、観葉樹木類に屬するのは、松、杉、楓等の類である、さて盆栽物には以上の三種の種類の種類に區別されてあるが、併し要するに

盆栽の形に就ての種類

其花其葉其實を賞すると同時に、その樹木の形狀を眺め、且つ面白き石を添へて、その趣きを一層高からしむる必用のあるは、素よりである故に盆栽には石の必要が必らず附いて廻るのである。

○盆栽の形狀に就ての種類

鉢に一つの樹木及び艸花をうねたる物は、凡て之を稱して盆栽と云ふ、然しそのうねたる樹自身の形に依りて、其の名稱が亦たそれ／＼區別されてある、故に其の區別を心得て置くことは、盆栽を取り扱はんとする人の、別て大切なることである。

その區別は即ち左の如し。

- 一 直幹物盆栽。
- 二 双幹物盆栽。
- 三 寄植物盆栽。
- 四 根上物盆栽。
- 五 水盤物盆栽。
- 六 懸崖物盆栽。
- 七 武者立物盆栽。
- 八 實生法物盆栽。

以上の八種である、如何なる形狀の盆栽を實生法と云ひ、將た直幹物といふか

直幹物の盆栽

の委しきことは、左に追次之れを説明せむ。

○直幹物盆栽 直幹物といふは、凡ての盆栽の中に於て、最もその風致のあるものにして文字の現はす如く、その幹は少しも曲りたる点なく、一直線に延てゐるものゝ事をいふ、恰も彼の野中に直立してゐる、一本杉の如き觀を呈してゐるものにて、中々に風致のあるものである、然しながら其の幹の延び工合に依つて、枝振をも亦た工合よく細工して整のへねばならぬから、直幹物の盆栽を仕立むことは、余程の熟練と魂氣を要する次第なるを以て、中々に面倒である。

尙ほ直幹物の盆栽には、規則として面白き石を添へ、而もその石に苔を生せしむべき必要あれば、面白き直幹物を作らんには、それに相當したる面白き石、さびたる苔を生す苦心が肝心である、直幹物として殊に良しきは、松、杉、檜、桐、楓等である。

○双幹物の盆栽 双幹とは、文字の現はす如く二本の幹が、相並んで生じてゐる形

双幹物の盆栽

の物を云ふので、此れは古き大木の自然に發育せるものには、多く見られ得るも、小さき木には此を見んこと最と難し、故に盆栽にて双幹物は非常に珍重されるのである、今双幹物を作らんと思へば、同じ種類の樹を極くこびたる物を二種選びて、びつたと着けて接木して、天然の双幹物の如く見するより他に手段はない、非凡なる技量を現せる所である。

寄植物の盆栽

○寄植物の盆栽 寄せうゑ物とは、同じ種類または其の異なりたる種類のもの、五本など七本などまた十本など、ごたくに雜に植ゑたる物にて、其樹一本にては盆栽としての價少しも無きものと云へども、斯く寄せうゑものとするれば、非常に眺めを添ゆることあり、仮令ば松を幾本となく寄せうゑにして、舞子の景を見せたり、杉を幾本となく寄せうゑにして、鞍馬山の景にかたどるなど中々に面白き眺がある、故に寄せうゑ物を造らんには、多少美術的に之を取り扱ふと同時に、又た一入の工風を用すること勿論である。

○根上り物盆栽 此れは盆栽中に於ても、眺めあると云ふより、面白といふ方

根上り物の盆栽

で、さて根上りものを造らむには、重に松に限られてある、其の特種の眺は海邊の松が長の年月絶えず波を受けて、その根の土を洗ひ取られて、根が土より上に高く洗ひ浚はれてゐる形を見せた物であるから、根上りもの、最も貴ぶところは、その上りたる根が天然に種々の形を現はしてゐる点である、之を作らんには松の若き中より、十分に丹精をこらして、自然々々に少しづつ根を現はさせてゆくようになさねばならぬのである、其の上りたるねの形には種々あれど、兎に角非常に複雑なるものを、殊更に貴ぶのであるから、その心して仕立らるゝがよろしいのである。



根上り松盆栽の図

水盤物の盆栽

○水盤物の盆栽 水盤物とは池の中の島か、亦は海の中の小島などに、樹の生じてゐるその景色を一つの盆中にうつしたる物を云ふのであるから、盆は浅くして且つ扁平物を用ゆるに限りられてある、其の作り方は盆に好みの樹をうへ砂を敷き苔のつきたる、面白き石などをあしらひふて水を十分に盛ればよろしいのである、故に水盤物に用ゆるはらは浅くして底に孔なく、その側に水はきが拵らへられてある。

○懸崖物盆栽 此れは諸處の瀨に遊びて、能く見るところのもので、彼の懸崖絶壁の上より、松の様々に曲りて下の方へ下つてゐるものがある、其の形状にならふて仕立たる盆栽を云ふの



楓の懸崖盆栽の図

武者物立の盆栽

で、此れも重に松に限られてあるのである、此に貴ぶところのものは、其のうね／＼と曲りたるところの多くありて、而も根締の強きものを云ふのである、然らば何ふ云ふ工合に、下の方へくだつて居る様に仕立ればよいかと云ふに、はちを絶壁と看なして、鉢より外へ出して下へ下らして置けばよい。

○武者物立の盆栽 此れも亦た面白き物で、一の株より幹が三本四本五本、乃至七八本も出てゐるものを云ふのである、而して幹の長は、互ひに略ぼ相揃ふたのもあれば、また長ひ短ひの差の甚はだしくある物もある、また三本に止めてゐるのもあれば、十本以上も群り生じてゐるものもある、其はその人の好みに依つて、勝手に作るがよろしけれど、武者立物は必らず幹が三本以上あるものに限られてあるゆへ、盆栽家はその心得が肝要である、此の種の盆栽を仕立るに最も適當なるものは、観葉樹木中の松杉、さては楓などである、観花樹木や観實樹木類を此の種の物に仕立んば、到底不可能である、強て仕立つるも盆栽としての價値は毫もない。

實生物の盆栽

○實生物盆栽 此れは一入の丹精を用す盆栽にて、さて實生盆栽とは、好みの木の苗を盆栽に仕立ることを云ふのである、故に之を用ゆる鉢は、成るべく淺くして且つ平つたきものを用ゆるをよろしとす、之を仕立んには先づ種を下してそれを發育せしめざるべからず、之に一定の法則がある、即ち好みの木の種を秋に採つて、それを二日ほど日光に當て乾かし、それから土を掘てその砂を十分に入れ、その砂の中へ種を入れて、上より土をかぶせて、翌年の春の彼岸までうすめて置き、彼岸に入らば平盆に土を盛り、砂を盛りて種を掘り出して蒔き、そうして絶す砂の乾かぬ様に水を與へて居れば八月の始めには芽を出す、乃で此の苗を林の如く澤山に列べて、生そふと思へば、その割合にて種子を澤山に下すべく、またまばらに生さむと思へば、その割合にて種を少なく下せばよいのである、次に實生盆栽に仕立るには、何にても差支なしとは云ふものゝ、其の中にて松、銀杏、樅などが、特に眺めのよろしきものである、尙ほ委しきことは、樹そのものに就ての育て方を、別に述

盆栽用の土

へ置きなれば就て承知あるべし。

○盆栽用の土

凡て動物が相當の榮養を收めて生活を繼續すると同じく、樹木にしる艸花にしる、その生活を繼續させべき物がなくてはならぬ、其は何になるか即ち土である、故に土がなければ決して發育成長すべき筈のものでないから、盆栽には土が、非常に大切である、乃で盆栽用の土にはその種類が殊に澤山にあるが、その澤山の土に就て、何の土を用ひても差支はないかといふに、決して左様でない、その土の質に依て、樹木また艸花等に適應ぬものがあるから、若し無暗な土を無暗に用ひたら、それが爲めに盆栽の發育を妨げ、甚だしきに至りては終に枯すことがあるから、盆栽を試みる人は土と云ふ事に就て、多大の注意を拂はねばなりません、今土の種類に就てその重なるものを示せば。

- 砂。
- 合せ土。
- 黒土。
- 溝土。
- 忍土。
- 黄土。
- 赤土。

田土。 眞土。 肥土。

先づ雑と以上の十種である、兎も角も盆栽を扱はんとする人は、以上示めす十種の土の性質を心得て、之を實地に應用せねばならぬ、さて各種の性質の委しきことは、第二編の土壤の部に詳記したれば重ねて記さず。

○盆栽の肥料

盆栽の肥料

盆栽は野生物と異なつて、仕立べきそのものを云はゞ束縛して培養するのであるから、水の外に必らず相當の肥料を與ねば、如何なる種類の盆栽と雖も、決して満足に發育し能はぬのみか、終には勢ひを失ふて、一寸とした障害に逢ふても枯るものなれば、肥料をあたへると云ふことは、決して忘れてはならぬのである、因て肥料の事に就てその心得べき事柄を委しく述べむ、

○肥料の拵らへ方 肥料は凡てその何にたるに拘はらず、決してそのまゝにてあたへずに、先づ水を二倍又は三倍ほど加へて能く交せ、そのまゝで貯はねて置ひて、腐らしたるものを用ゆるがよろし。

肥料の拵らへ方



肥料の種

かの油粕や干鰯のごとき硬きものは、能く碎きて粉とし、水を加へ火にかけて煮きて、溶けたらばそれを器物へうつして貯はねて置ひて用ゆるがよろしまた泥渠の土などは、それを樽などへ入れ水を十分に張りて、その水を腐らせてそれを用ゆるのである。

○肥料の種類

盆栽に施すべき肥料の種類は、其數中々に澤山にあれど、今一般に廣く用ひらるゝ物を擧ぐれば。

油粕、 貝殻、 鶏卵の殻、 泥水、 米泔水、 魚の洗ひ汁

干鰯、 下肥、 松魚節、 茶滓。

等である、右の各種性質は第二編に、詳記したれば、此には重ねて云はず、此の中にて米泔水は上等の盆栽物には與へぬがよろし、とは土に水の滓のたまりて白くなるにより、其の体裁甚だよろしからぬものである。

○肥料の與へ方

肥料の與へ方

凡て盆栽に肥料を施すには、根を中心として、其より少しく離れて圓く萬遍なく與ふるがよろし、又油粕干鰯の類はその儘碎きて土を掘りて施すも差支なけれど、併し斯の如きは肥料分の廻り方遅く、時に根を損することなどあらば、それよりは碎だきて粉とし、水を加へて煮きて溶したる物を與ふる方がよろし又た盆栽によりては、一面の苔の生ゐてる物がある、此の時には竹の籠にて根廻を入れて苔を取り除きて、而して後に肥料を與へるがよろしく、又た夏の暑さ烈しき時には、餘り濃き肥料を與ふことは見合せ、成るべく薄き物を選びて少しづつ與ふる様ですが、何により肝心なることである、次に盆栽物の種類によりて、肥料を與ふべき時季に、其れれく相違がある、その委しき事は第二章の各種の盆栽に就て承知あれ。

○寒肥

寒肥

寒肥とは寒中に、殊更に與へる肥料の事を云ふので、松杉等の觀葉樹木の盆栽には、寒中に肥料を與ふる必要なけれど、觀花樹類、殊に觀實樹類の盆栽物に

は、寒中に一回乃至二回ほどは、肥料を與へねばならぬ、その目的は翌年に至つて實を余計に結ばしめむ爲めと、二つにはその結びたる實の落ちぬ様、即ち實の持を丈夫になさしめむが爲めであるから、觀實樹類の盆栽物には必らず寒中に肥料を與ふると云ふことを、怠たてはつならぬのである。

盆栽の苔

○盆栽の苔

盆栽を仕立るに就て、石と相並びて必要なるものは、即ち苔である、さてこけにも色々の種類ありて、上等の物もあれば、又た劣等のものもある、併しながら一般に盆栽に用ゆるものは、先づ左の五種である。

- 一 叡山苔。
- 二 石苔。
- 三 岩苔。
- 四 天鷲絨苔。
- 五 青苔。

此の中に於て頗る上等のものは叡山苔にして、次に天鷲絨苔と石苔である、而して劣等のもものは青苔である、また人工にて石へ苔を生すことも出来るのである、左に五種の苔の性質、并に苔の生し方及び植む方等に就て委しく述べむ。

○叡山苔(最上等の物) 此は比叡山の三中に多く生ずるより、此の名あり、併

し叡山の山中に限つて、生ずると云ふ譯ではない、何れの山を捜しても在ることあるが容易に手に入り難い、故に従がつて珍重とされるれば、又た此れほど美事なる苔はないので、盆栽に用ゆる苔の中では、第一の上等たるものである此のこけの特別な性質は、地上を匍て行く毎に、一本宛の細ひ根を生じて行く加のみならずこの苔は、其發育極めて遅く、且つ寒さを非常に嫌ふ性あるを以て、寒中になれば往々枯れることがある、左れば盆栽家が此れを育てんには、余程の注意を用す又た時に依ると寒中にこのこけの赤く色を變ずることがある、併し赤く成りたるを以て、直に枯れたりと思ふなかれ、この苔は寒に逢ねば往々斯の如く色を變ずるの質あるを以て、此れ等は別て心得べきことである、乃で盆栽家がこのこけを得れば、先づ第一に勤むべきは繁殖法である、先づ細き根を一本宛箸にて挟みて、土に植へ絶えず土を濕らし置きて、それから冬になれば藁を以て上ををはひて、寒を防ぐ用意を爲すところ別けて肝要なることである。

石 苔

○石苔 此のこけは、叡山苔天鷲絨苔などには兎ても及ばぬ彼の谷間の石垣などに不規則に匍ふてゐるこけの事なれば、固より珍重するほどのものではないが、併しその手入よろしき時には、盆栽に用ひて随分面白きものである。此を植んには先づ足の長く出でたる處は、惜氣なく切り棄て、短かく能く揃はて、水に浸けて丁寧ていねいに洗ひ、箆はしにて挟みて土へ植はつけその上より砂をこけの頭たまごが一寸と見ゆる位ままで、撒りまき置くのである然る時は次第ついでに芽を生じて来て、終には面白き風致なごめのこけとなるのである。

岩 苔

○岩苔 此のこけは彼の青こけと同じく、最下等のこけなるを以て盆栽用としては、余り用ひぬものである、此の日陰の岩又は陰の土地に多く生ずるこけで其の色艶いろつやも悪わるければ、其の趣おもむさも甚だよろしからぬものである。

天鷲絨苔

○天鷲絨苔 又た花こけとも云ふ、此は山中の湿地などに多く在る苔で色澤よく、手觸てまわりよく宛然まなから天鷲絨の如き觀を呈す、此こけに二種ある一はその莖短かく、一は長きもので其の莖の長きものは体裁ていさいよろしからざるを以て、盆栽に

青 苔

用ひんには、その莖の短かき物を選ぶがよろし、苔の中にて叡山苔に次での上物である。

○青苔 青こけとは、少しく黒色を帯てゐる肌肌の荒き極く短かき質たちの苔で、此は最も多く且つ何處にでもあつて、無雜作に手に入れらるゝ、即ち石に生じたり瓦に出来たり古き竹、腐つたる樹などに在るこけである、此はこけの中で最も下等なる物ゆへ、盆栽には多くは用ひない、併し強て用よふと思ふならば、先づ鉢に砂を盛り其の中へ入れ、絶えず水を與へ置きて、其の新らしき芽を十分に生じたる時に、盆栽へ始めて移すをよろしとす、斯の如くなせば、色澤いろつやもよく且つ其の眺ながめもよく爲るのである、決して其體たいにて用ゆるなかられ。

盆栽にこけを置くには、先づ以上の五種に就て、其の尤もよろしき物を成るべく選びて用ゆるが可い。

次に石へ苔を生せしむることゝ、又た石へこけを植はつけて早くはわさするこ

石に苔を生す法

となどは、亦た盆栽家に必用なることなるを以て、其の方法を述べむ。  
○石に苔を生す法 苔あれば其を植れば可けれど、こけの無き時に苔を生さむとするには、好みの石を取りて其れに人糞じんごんをかけて、日陰に置きて乾かし、乾きたれば水を注ひて濕ほし、又た乾かし、又た水をかける、斯の如きことを幾度いくたひとなく繰り返して行へば、終に極めて上等のこけが石に生ずるものである試みらるべし。

石に苔を匍す法

○石に苔を匍す法 盆栽家には必要な事で、素人は唯だ石にこけをつけて水を與へ置きさへすれば、其れにて可なりと思ふ様なれど、中々左る無雑作なこにはあらず、又たこけを附べき時期がある、其は梅雨ばいうに入る半月ほど前に成るべく上等の細き苔を選びて、水に浸し置き、それから付ようと思ふ石に先づ粘土ねはつちを薄く平につけて置く、斯なし置ねば石のみでは苔は付かぬ、さて斯様にしてこけを一つ宛箸つくばしにてはさみて、右の粘土へ植へつけ、更に上より少しく土を振りかけて、此を水盤すいばんの中へ入れて、水氣の絶ぬ様になし置くべし、さて梅雨ばいうとなれば苔の根は石につきて、苔は次第しだいに芽を生ず、其の十分に芽の生じたる時に、水盤より取り出だして、好みの盆栽に添ゆるのである。

石に早く苔を匍す法

○石に早く苔を匍す法 是れ亦た心得べき事にして、通常石に苔をはわす法は前法の通りすればよろし、けれど其の時候の必用がある、故に差し迫つて石に苔をはわさんとなれば、びろどう苔の如き成る可き、きめの細かき苔を選びて水に浸けて置ひて、さてはわさんとする石にとりもちを平に敷き、其上へ右のこけを箸にて、一つ宛挟みて着けて、水を與へ置けば、數日を出でずしてうるはしき芽出で、美事みごとにはふものである。  
とりもち成るべく上等の物を選びて、出來得るだけ薄く延して、つけるがよろし、又た苔を石へつけたれば、水氣の切れぬ様にして、朝夕少しづつ與へる様になすべく、水が絶れば苔の發育を防げ、甚だ面白からぬ結果を生ずる恐れがあるのである。

○水盤物の石に苔を早くはわす法 水盤物に添ゆる石に、苔を早くはわさんには、麩糊を用ゆる必用がある、其法は河原などに在る石を用ひずに、山か野原の石を選び先づ麩糊を煮きて、其れを刷毛か筆の如き物にて、石へ薄く平に敷き、さてはわさんとする苔を乾かして、其十分ばらくに乾きたる時に其の苔を手にて取つて、細かく揉みて苔の粉を右の麩糊に一面に撒りまき、其れから水を與へて絶えず濕はしてゆけば、苔は立派に芽を生じて美事に石へはふのである。

苔の置き方

○苔の置き方 盆栽へ一面にこけをはわさんには、先づ水を先に盆栽の土へ少しく與へて、其れからはわさんとするこけを能く乾かし置きて、一つ宛に割りはなして箸にて一つづゝ挟みて置くがよろし、面倒なりとて連なつたまゝの物を置けば、はわぬことはなけれども、發育してからの体裁甚だよろしからねば一つ宛挟みみて置くべし、尙ほ置き終らば水を與へをくこと勿論である。

水

○水

動物界に水がなければ、一日も其生活を續くる能はざると、同じく植物の生活に就ても水は亦た欠くべからざる大切なる、物たることはいふまでもなし、故にまた盆栽にも水を十分に與へることを忘れてはならぬ、因て水に就ての心得を聊か述べむが、元來盆栽に水を與へると云ふは、甞に其物を養ふばかりでなく、土中に含まれつゝある肥料を溶かして、其れを早く樹木なり草花なりが、吸い取る媒介をなすのであるから、極めて必要である。

盆栽に水を與へる心得

○盆栽に水を與へる心得 通常盆栽に水を與ふるは、三百六十五日欠さず之れを爲すが可い、先づ二月の初より六月の初までは、日中に水をあたふるがよろしく、六月の中旬より九月の下旬までは、午後四時過より夕方に至るまでの間にあたふる様なすべし、次に十月の初より正月一ばいばい、日中に與ふるを宜しとす、而して五月の下旬より六月の初旬へかけて、朝夕二回宛與へるがよい、此の時に凡て新しき根を出す時であるから、植物は最も水の必用を

はちど水との関係

感ずるのである、而して盆栽に水と與ふるには、必らず如露を用ひて萬遍なくわたふべし、子杓より與ふるは甚だよろしからず、如何なれば水の落る力強ければ、根を洗はれ土を流さるゝ等の憂いあれば、殊更に注意すべきことである。

○鉢と水の關係 素焼の鉢ならば格別注意を拂ふ必用なけれど、染付鉢に至りては、水の排き方悪しく、又た少しの油断にて、早魘を來たすことあるを以て、少しづつ與へて、早魘を防ぐ様になすべし、然らざれば時に樹を痛め損じることがあるのである。

水を選ぶ事に就ての注意

○水を選ぶ事に就いての心得 盆栽に水の必用なることは、云ふまでもなければ、併し唯だ水でさねあれば與へて可いと云ふ譯ではない、盆栽の水として最も宜しきはくたぶれてる水、即ち川のみづが第一で、第二は雨みづである井戸のみづは其の汲みたての物を直に與へるのはよろしくない、故に井戸のみづを與へようと思ふ時には、桶へ汲みて日和水と爲し置きて、其れをあた

水と與へるに就ての注意

へるが可い、汲みたての非常に冷たき水は、盆栽の爲めに甚だよろしくないのである、又塩分を含むでる水、鑛氣を含むでる水などは、如何なる事あるも斷じて與へてはならぬ、塩氣と鑛氣は植物には大敵なれば、此の事は深く注意を用ひねばならぬ。

○水と與ふるに就ての注意 盆栽に水をあたふるには、前にも述べたる如く、如露を用ひて根元の土に多くわたふるをよろしとす、葉の上よりどしどしと撒く人あれど、其は間違にて、余り多く葉に水を與ふれば、其が爲めに葉の色變じ、時に害虫を發生して、葉を齧食する等の恐あれば、別けて注意すべきことである。

○盆栽を仕立てる事に就ての心得

盆栽を仕立てると云ふ事に就ては、一つの樹木を狭き鉢の中へ植て、其れを枯さぬ様に發育させるのみではなく其枝振をも直さねばならず、又た樹の恰好をも拵ねねばならぬ、此れ等の事をば満足に行ふを仕立てると云ふのである、故に其

盆栽を仕立てる事に就ての心得

の仕立方が拙ければ、盆栽としての價値は毫もないのであるから、仕立ると云ふことに就ては、其の凡ての心得を、十分に會得して熟練の功を積ねばならぬ。

○荒木を盆栽とする心得 山野に生じてる物を、堀つて來たばかりの荒木は、決して其儘で之を鉢へ移して盆栽とすることは出来ぬ、何んとなれば今まで廣々としたる處に、自由自在に發育せしものを、俄かに小さき鉢の中へ入れることゆゑ、勢ひ樹の弱る恐れがある、因て先づ根固として通常の地面へ植て置くか、又は深き瓦鉢へ植ゑて完全に生育するを待ち、初めて其の移植時に於て好みのはちへ植ゑて盆栽とするのである。

植込の法

○植込の法 樹をはちへ植るにも、一定の法則がある、決して無暗に植てはならぬ、石のあしらいを置かず、樹のみ一本植んとならば、鉢の中心にうゑべく又た二本一所にうゑんとならば、横に正しく列ぶ様にうゑべく、好みに依て石をあしらはんとする時は、石と樹と正しく斜に成る様にうゑるが可い、樹

盆栽に就て一般の手入方

がはちの中心に在りて石が片隅に在るが如きは、決して巧なるうゑ方と云ふことは出来ぬ。

○盆栽に就ての一般の手入方 植ゑて其の儘では決して上等の盆栽にはならぬ水をあたへ肥料を施し、枯葉を去り虫を除くなどは盆栽に就て一年中絶えず注意せねばならぬ手入なるが、此の他に別て施さねば成らぬ手入がある、其れは一年に一回、其の移植期に於て、樹をそつくと鉢より取り出して、太き根を削り、古き細き根は遠慮なく切り取りて、はちの底へ肥土を置きてうゑ替を爲す、斯の如く手入に心を碎かば、其の樹の發育いよく宜しく、且つ萬一土の中に蚯蚓などの這ひ込み居ることあるも、之れを除くことが出来る若も、此の手入を怠りなば、甞に其の樹の發育を妨げるのみならず、終には枯すことなどあらば、盆栽家は殊更に注意すべき大要件であるのである

○盆栽の棚 棚とは盆栽を竝べて置くべき臺にて、亦た大切なもの、否な是非なくてはならぬものである、故に盆栽は凡て棚を造つて、其の上に載て置く

盆栽の棚

盆栽の造り方の

が可い、然せずして直に地面へ置が如きことあらば、鉢の水吐より地上の水  
 分を絶ず吸ひ取り、又た水吐より蚯蚓或は其の他の虫が這ひ込みて、樹の根  
 を損じ土を荒し、肥を吸ひ取り、はては盛んに繁殖して、終には知らぬ間に  
 樹を枯して了ふ恐れがあるから、盆栽は必らず柵の上に置くべし、斯すれば  
 風の通しもよければ、虫などのつく憂もなく、樹は完全に發育するのである

○盆栽柵の造り方 たなを造るには、大小は兎も角成る可く頗丈に三尺ほどの  
 高さにして、二段或ひは三段に作る、其の場處は近邊に樹なく風通し日射り  
 共によき處を選んで、北向にして拵へるが可い、風雅を好みてきやしやなた  
 なを拵へる人あれど、是れ大なる誤まりにて、強き風吹けば爲めに毀れ、大  
 切な盆栽を形なしにすることがある、又た余り高く拵らへると、水や肥をあ  
 たふる、不便を感じるのみならず、風當り強くして樹を損ずる恐がある、又  
 たたな板柵の足には、絶ず注意して若し少しにても腐りたる處あらば、惜ま  
 ず手入をして、新らしき物と取りかゆる様になすが可い、然らざれば知らぬ

盆栽物の  
枝に就て  
の心得

間に柵こわれて、盆栽を片なしにすることがある。

○盆栽物の枝に付ての心得 凡ての盆栽に就て、其の枝が正面より出でゐる物  
 は下等物なりとて、一般に擯斥する故に、枝は樹の後より發生せしめて、前  
 へ曲らせようなど、横へはわせようなど細工するが可い、乃で樹の後より枝  
 を生そふとするには、人工にて特別なる手段はない、然しながら植物學上の  
 原則に依れば、枝を南の方に向けて發生させるのが、其の性質であるから、  
 盆栽を置くには正面を北に向けて、後を南にする様にして置かねばならぬの  
 である、此の事は盆栽家には何により、大切なる心得である。

元來成功したる盆栽と云ふは、樹その物が有してゐる天然自然の形狀を、毫  
 も失はさぬ様に人力を加へて巧みに、面白く細工せし物を云ふのである、故  
 に兎てもでないが余程熟練するにあらざれば、満足なる盆栽を作り出ださむ  
 事は、實に不可能である、假令その凡ての仕立方を心得居るも、枝のため方  
 訣の入れ方などは、屢々失敗の結果に終りて、經驗の功を積み、而して後に



盆栽物の  
枝を切る  
心得

あらざれば、美事なる物を仕立上げることは出来ぬのであるから、心を籠めて腕を練る、即ちためたる枝も自然に曲りたる如く、殊更に切りて其の切り口も、全く自然に折れたるかと思はしむる様に、拵へ上げねばならぬ、斯して初めて満足なる盆栽を仕立得られるのである。

○盆栽物の枝を切る心得 凡で盆栽を作ると云ふことに就ては、不用な枝、面白からぬ枝、枯たる枝などは其れを惜氣なく取り除かねばならぬ、然しながら其れを取り除くには、鉋や小刀の類を用ひず、手にて裂き取る様にすることが、何より肝要である、刃物を用ゆるのは、盆栽家の大に忌ねば成りぬことである。

○盆栽物の枝を裂き取る心得 凡て樹の枝は必らず幹より別れて出てゐる物ゆへ、取らんとするゑだの幹より、分れてる分岐点、二た股に成つてゐる、其の枝の根の處へ左の拇指を當て、幹を握り、右の手にてゑだの中央を握り、左りの拇指でためてゐて、枝を持てる右の手を前へ引きて、裂き取るのである。

盆栽物の  
枝を裂き  
取る心得

枝をため  
る心得

る、ゑだには素より大小色々あれど、凡て此の方法に依りて裂き取るが可い裂き取つた痕を如何にも天然に、斯く成りたる様に見せねばならぬから、毎日閑ある時には、其の部を手にて擦りてよくならす様に、心掛くるが盆栽家の技量である。

○枝をためる心得 盆栽家には最も大切で、ためるとは色々な形に曲ることを云ふので即ち直なるゑだをうね〜と曲らしたり、曲りたるゑだを直にしたりすることが、ためると云ふのである此の枝をためると云ふことは、第一に肝要なことで、ゑだを巧みにためたる物は、即ち價値のある盆栽にて、下手な物は劣等である故に斯ふ云ふ形にためようとか、斯く曲よふとかと云ふ者は、各人の頭脳にあるが、其のため方には、一定の方法がある、樹の中には弾力に富んで居つて、少々位の無理をして曲げても、容易に折れぬものもあれば、又た鳥渡したことで直にばきつと折れて終ふ物もある、枝にも大小があつて細い物や、又た弾力に富んでゐる物を、ためるには格別骨も折れない

が、太いゑだ、幹さてはさくい物をためようとするには、中々骨の折れることであるから、一と通りの法を心得て置ねばならぬ、さて先づためようとするゑだを、細き物なら左右の指にて摘み、太き物なら両手に持ちて、皮に少しも傷つつかぬ様に、極めて静かに或は前へ或は後へ、其の曲よふとする處をまげたり戻したりして、軟らかく成る様にして、其れから其のまげよふと思ふ部へ、麻繩か棕櫚繩の細き物を平に巻きつけて、而して後に自分の好む通りのゑだ振にまげ、其ゑだが細ければまげで其れを巻きたる繩の尖にて、其の樹の幹へ縛へつけて置ひても可けれど、若し太き



枝のため方の圖

時か或は幹をまげたる場合には、地面へ其の樹の傍へ薪木の類を二本打ち込み横に一本堅く縛いて、片假名のサの字の形にして、此にまげた枝か幹を其のまゝ縛いつけて置くがよい、斯なせざれば折角まげたる枝は、其の弾力によつて忽ち元の形に戻るゆへ、此の心得を忘れては成らぬ、次に太きゑだ及幹は鉢へ植たるまゝにてためることは出来ぬゆへ、此の場合にははちぐるみ地面へうゑて、其れから前法の通り其傍に木を打ち込んで、ためたるゑだを縛へつけて置くがよろしい、但し細きゑだならば、鉢植のまゝにてためても差支ぬ、又ためたるゑだを針金で縛いて、幹又は太きゑだへ引き寄せて置くことがある、此れもためる一の法である、此の場合には余程注意せぬと、巻きたる針金がゑだにくゐ込んで、樹にその痕を存し、大ひに盆栽の價値を損ずることがある故に、針金を用ひんとする時には、竹の皮を細く裂きて、暫らく水に浸して置ひて、それを平らに二三枚重ね巻きて、其の上より更に針金を巻けば如何なる事あるも、木に針金の巻き痕のつくべき憂は決してな

いのである。

○根を切る心得 一の樹を盆栽に仕立んとするに際して、太き根を長く張りて其れが爲めに鉢へ收むる能はざる時には、惜氣なくその根を中央の邊より、切り去るが可い、根を切りては樹を痛めはせぬかなどと云ふ、考を起すが如きは、全く盆栽の培養方を知らざるものである、ところが其の根を切るにも、一定の規則がある、其は其の切口の下に向く様に切るがよい、故に缺を圖に示す如く、下より上へ向けて、斜に切るがよい、若し此の反對に切口を上に向けんか、土の中に在る塵埃又は松などの樹脂出で、其の切口を塞ぐ恐れあるを以て、爲めに根は土中の養分を吸收する能はずして、終に



根を切る圖

枯死すると云ふ不幸を見る、因て樹の何にたるを問はず凡て根を切る場合には切口を下に向けるぞ肝要である。

○新芽を摘む事 樹木草花に拘はらず、凡て一年に一回又は物に依りて、春秋の二期に新芽を出たすものである、此の時に能く其のゑだ振を視て、若し少しにても良しからぬ枝なりと思はば、惜氣なく切り取るがよい、初芽を切り取るには缺を用ひてはさむをよろしとす。

又た前にも述べたる通り、盆栽は日にあてるを貴ぶとは云へ、夏は直接に日にあてるは、反つて良しからず、ゆへに必らず柵の上に相當の日覆をなすべく、尙ほ掘つて間の無き荒木は、決して強き日に當てゝはならぬ、強き日に當れば十中の八九までは枯れるである。

○移植に付ての心得

移植とはうねかむることを云ふことにて、盆栽を取り扱ふ人には、亦た此の上もなき大切なことである、さてその植替をなすにも、相當の時期と相當の注

## 根固の事

意が必要でありますから、其の事に就て少しく述べましょう。

○根固めの事 根固とは其のねをならずといふ意味である、山より掘り出して来た許りの物を、そのまま直にはちへ上げては、その木は必ず満足に發育せずして、枯死するのが十中の八九まで、皆な左様ですから、さてこそ根固めせねばならぬ必要があるのです、其の法は掘り立ての荒木を一旦柔らかき地面へうけて、水を與へて先づ半年ほど其のまゝになしをき、十分についてから始めて相當の手當を施して、鉢へ移植する、之を根固めといふのである。

○荒木を掘るべき時期 山野に在る面白き荒木を、盆栽に仕立べく爲めに、掘るには一定の時期がある、何時なしに掘り出して来たんでは、決して着かぬその時期は陰曆の正月下旬より、三月の始までか、又は八月の下旬より九月の下旬迄の、年に二期である、此の期間以外に掘り出して来た物は、十中の九までは勞して功なき、不成功に終るものたる事を、忘れてはならぬのである。

## 荒木を掘るべき時

## 根固のし

○根固の仕方 根固の仕方は、前に述べたる通り、荒木をそのまま軟かき地面へうけても、固より良しけれど、併し尙は人事を取りて、十分なる成功を望まんには、成るべく大きな瓦鉢即ち陶焼の鉢へうけて、其のはちぐるみ軟らかき地面へうけて込んで置くが一番によろしいです、彼の摺鉢の焼き損じ物を盆栽の根固に用ゆるは、誠にその當を得たるものにて、摺鉢は即ち陶焼物なれば、根固に用ひて大むによろし。

○移植すべき時期 凡ての樹木をうけ替るには、一定の時季がある、何時なしに移植したんでは折角丹精の功を積みたる物をも、其れがために痛め損じる恐れがある、さてその時季は樹木その物の性質によつて、一定せぬ或は秋の候をよろしとする物もあれば、又た春の候をよろしとする物もあるから、其は各論に於て樹木その物に就て、其の時季を一々述べなければ、先づ一般に移植を行ふに就て、多大の注意を要するのは、凡て晴れ渡りたる天氣の日を避け成るべく曇天にて風のなき日を選びつ、午前の十時までか、又は日暮の

## 移植すべき時期

移植に就ての注意

頃に於て爲すをよろしとす、日中は勤めて避くるがよろし。

○移植に就ての注意 根固をなしたる樹木を、盆栽に仕立べく爲めに、はちへ移植する時には、第一にそのはちに合してねを小さくする必要がある、即ち太きねを切り古き細きねをも切りとつて、鉢に合ふ様になすのである、然し此の際に於て特に注意すべきは、新に生じたる細き根に、鉢を當て傷をつけぬ様にする事である、新らしき根は凡て樹木の成長と云ふ事に就て、最も大切なるものである、其は土中の養分を盛んに吸ひ取るからである、さて斯の如くにして、移植し終らば、そのねの部を指にて軽く壓へつけ、上より砂を薄く敷きてそれから水を如露にて静かに與へて置くが可い。

移植と肥料

○移植と肥料 唯だ移植したばかりでは、良しくない必らず相當の肥料を與へねばならぬ、故に總て移植する場合には、先づはちの底に木炭の碎きたる物を少しく敷き、それから肥土即ち土に肥料を交ぜたる物を、たつぷりと敷きその上へうねべき樹木の根についてゐた土を置きて、木をうつし土と砂とを

半々に合した物を、その周囲へ一めん詰めて、さてうね上げるのである。

○盆栽手當方

盆栽は云ふまでもなく生てゐる物を取り扱ふのみに依つて、又た四季その時候に就て、相當の手當を行なはねば決して満足に培養し能ふべき筈のものではない、故にその時候に就ての手當方を心得べき必要があるから、次にその手當方に就て述べむ。

盆栽の手當方

春の盆栽手當方

○春の盆栽の手當方 盆栽の手當について、一番に必要を感じるのは、夏と冬であるが、然し春先にも亦た相當の手當が必要である、春先には得て一夜の中に、寒氣増して霜の下りることがある、此に注意をして手當をせぬと、俄かに枯して終ふことがある、因て若き芽の出はじめた時には、毎夜椽の下か室内へとり入れる様にするがよい、又たそれが面倒ならば、藁にて霜除を造り、日暮に盆栽にかぶせて、朝とる様にするがよい。

○花を十分に咲す用意 總て桃、櫻、椿などの、観花樹木類の盆栽に、花を十

花を十分に咲す法

夏に於ける盆栽物の手当方

分に咲さんと思はゞ、肥料を十分に與ふること固より必要なれど、先づ第一の手当は毎年落花後に於て、鉢よりとり出し、元根をさり古根を切り取つて移植る様にし、而して移植したらば水を十分に與ゐて、半月或は一月ほど、成るべく日陰に置く様にする、尙ほ此の時に古き枝を惜氣なく切が可い、古枝を切ると云ふ事は、花を咲す唯一の手段である。

○夏に於ける盆栽物の手当方心得 夏向に於ては日中だけ、盆栽棚の上に簀篋の日覆を施して、日光の直射するを避る様にして、朝夕の二回に日覆をとりて、根元に如露にて十分に水をあたふべし、但し葉には余り餘計にかけぬを宜しとす、次に日中は如何なることあるも、必らずしも水をあたゐてはならぬ、夕方に至たり水をあたへたる物は賞翫せむとて、棚より飛石の上などへ下すことがあるが、此等は大ひに注意すべきことで、飛び石の上へ下さんとする時には、先づ其石に水を十分にあたへて、石を能く冷し、然る後に下す可い、然らざれば日中より焼きつてる石の熱、盆栽にうつりて害を爲す恐

冬に於る盆栽物の手当方心得

れがある、又た朝は兎も角夕方水を與ふる際には、決して汲みたての水を用ひずに日向水とした物を用ゆるがよい、又た肥料は暑さ中は油粕の溶きたる物、魚の洗ひ汁などの極く薄く爲したる物を少しづつ、度々あたふる様になすがよい、濃き物は總て盆栽の爲めに宜しからずと云ふ、中にも松、杉、楓などの葉を賞する物は、殊に十分に日覆をなすべし、左りとてそれが爲めに風通しのあしきが如きはよろしくない。

秋は特に手当について心得べきことなければ略す。

○冬に於る盆栽物手当方心得 寒氣も盆栽にはよろしくない、故に貴重なる盆栽を多く貯はふる人は、防寒の用意として、特に温室を設けて置くが、併し普通の家庭では温室までにも及ばぬ、故に霜が降り初めたら、それを機として夕方より翌朝まで、椽端又は椽の下の如き處に置きて、寒き風、霜などに當ぬ様にして、日中は必らず棚へ上せて、日光に十分にあてる様にするがよい、日光にあてずに絶す室内に置が如きは、盆栽をして苦しましむるものと

盆栽の鉢

云はざるを得ない。

○盆栽の鉢

盆栽になくてならぬ物は、いふまでもなく鉢である、ところが此のはちにも色々の種類があつて、その價の非常に高さものもあれば、亦た非常に廉き物もある、その上物を用と、安物を用ひ様とは、人々の任意であるが、聊か参考までに、はちの種類とその用ひ方とについて、少しく述べて置こう。

鉢の種類

○鉢の種類 盆栽に用ゆるはちの種類を、一々數へ來たらば實に百以上からもある、なれど之れを大別すれば、その形状に於ては。

- 一丸鉢まる。
- 一角鉢かく。
- 一水盤すいはん。

の三種で、又たその焼き方の上について、區別すれば。

- 一陶焼物たうやき。
- 一染付物そめつけ。

の二種である、盆栽その物の爲めに注意を幾分か省き得るゝといふ点については、染付物より陶焼の方がよろし、然しながら体裁の上よりいへば、染付

水盤

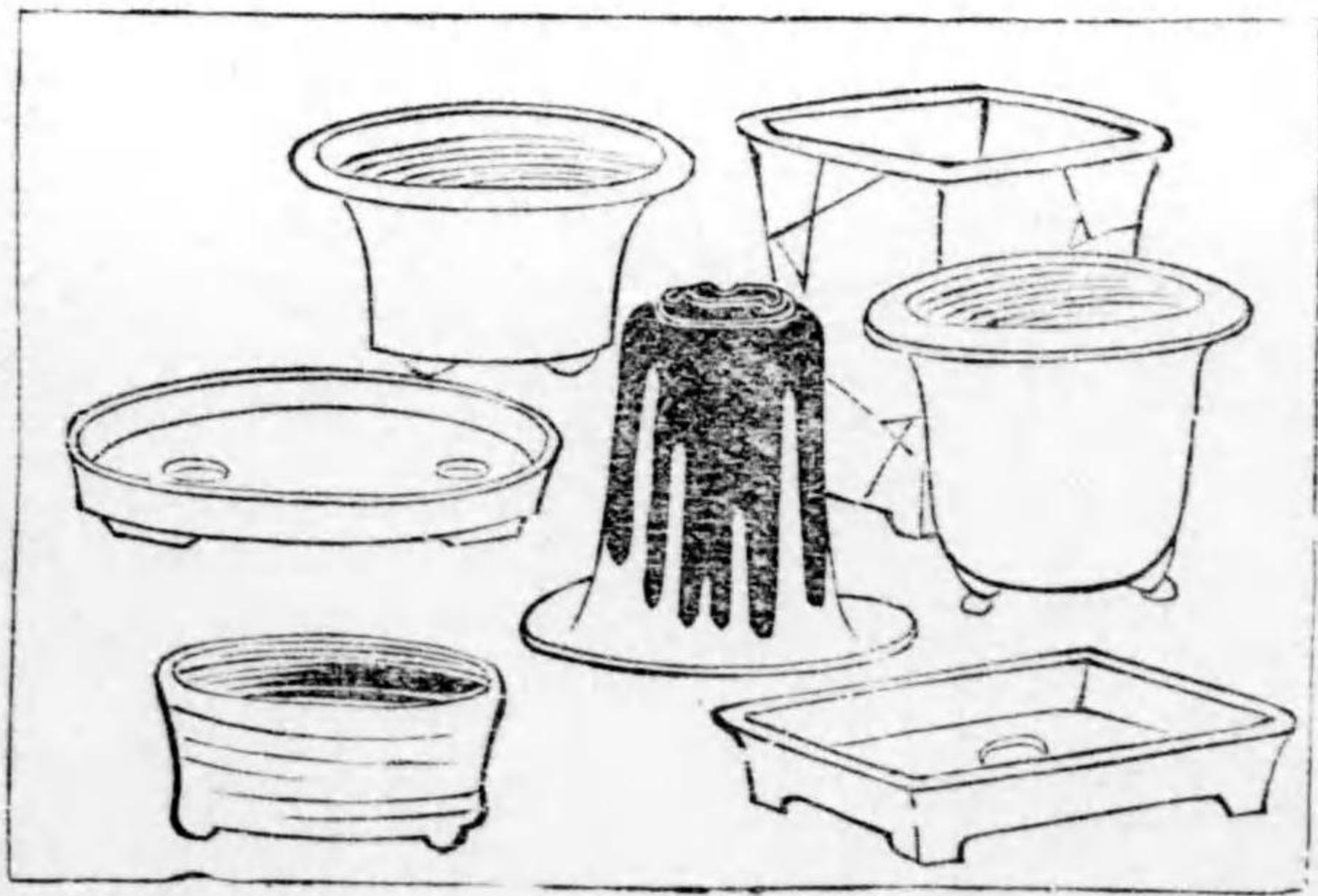
物の方が遙かに優つて見へるのである。

丸鉢の中にもその形状の變化は澤山にあるれど、先づ總て丸くして深きものである角鉢には四角形、長方形、或は五角六角杯の種類があるが、總て淺きものである

○水盤 水盤とは水盤物の盆栽を育てるはちの事にて、通例のはちより極く淺く、而して水吐が底にあらずして、横に付いてゐるものである、又た形にも色々ありて、丸き物四角なもの卵形、長方形、太鼓形などがある。

先づはちの種類は雜と以上の如くである、

尙は形についての委しきことは一々記るさざれば、瀬戸物屋について實地に研



盆栽用鉢の種類圖

究さるゝがよい。

尙ほはちにて上等なるものは、古伊萬里深ばち古九谷焼、古薩摩焼などである然しながら一般に賞用さるゝものは樂焼であるのである。

盆栽に就  
べて注意す  
べき事

○盆栽に付て注意すべき事

盆栽について心得べき事實は、既に十分説き明したれば、尙ほ價值ある盆栽又は盆栽の害となるべき事等について、少しく心得べき注意あれば、それを左述べむ。

○盆栽の價值 御承知の如く盆栽の品柄に依ては、一鉢の價二百圓三百圓、甚だしきに至つては、千圓からするのがある、何んな点に價值があるか、一は此を欲する人の好にもよるべけれど、然しそれだけ何處か他のものに飛び越へた風致がなくてはならぬ、左れど斯様な趣きがあれば五十圓、或は百圓の價值があるといふことを示す譯にはゆかぬ、然しながら價值のある盆栽と云ふのは、その樹木の天然の形を、人工にて巧に施して、而もそのものが數百

年を経過した古木の如き、觀を呈する様に仕立あげるのである、然らば何うすればかくの如く巧みに仕立あげることが出来るかといふに、其れは兎もかくされよと筆もて教めることは出来ぬ、その人の天賦の技量と熟練とにある譯ゆへ、熱心と經驗の功を積むところ、此の上もなき大切なることである、若き木を古木の如く見せしむるには、幹の体裁枝の有様、さつては苔を這させたりする必要がある、此に於てか幹をまげ、枝をため又た必用に應じては、ねだを切り拂はねばならぬのである、此れ等の手入の巧みに施せば、山より掘り出して來たばかりの荒木と雖も、五六年をいでざる中に、一二を争ふ天下の佳品となり、百圓二百圓の直打をたさしむるのは、蓋し何んでもないことである、此の反對に無暗に枝をさつたり、ためたりしたら、仮し五十圓の直打のあるものをも、三文の直打もなくなして終ふことがある、此れ一に經驗と熟練の如何による次第なれば、盆栽を試みんとする人は、數多くの直打ある盆栽を見て、勤めて其の形を自己の盆栽に移すように心懸るが、



鋸の齒形  
鉄の痕

何により肝要なことである、要するに盆栽の秀で、直打のあるは、樹に就て様々な自然天然の變化を、人工にてたくみに、而も天然に斯の如き變化を起したに相違ないとより、思はれぬ様に仕立上るのである、次に尙ほ十分に心得べきは、盆栽の直打を落す事で、盆栽その物の凡ての容子が、中々に直打のあるものでも、枝や幹に鋸で挽いた痕や、鋏を入れた痕などがありくと残つてゐる様では、その形が幾許上等でも、三文の直打はない、即ち此の形は人工で加へた物であるといふことが、一目見て知れるからである、如何なる高價な盆栽と雖ども、自然にその形の備はつた物は決してない、皆な人工にて自然の如くに細工した物であるから、鋏や鋸を入れた痕の知れぬよう如何にかくなりたるかのごとくに見せる様にせねばならぬ。

盆栽を取り扱ふ心得

○盆栽を取り扱ふ心得 多少に拘はらず、盆栽を取り扱ふに親切と注意といふことは何處までも非常に大切なることである、少し無性をすると上に煤がたかつたり、又た吉野紙のごとき薄き巢を、蜘蛛がはるころとがある、斯様な

盆栽の害  
となる物

ことがあつては、その直打をすんと下るのみならず、樹の發育を妨げまた枝の尖を損ずることがある、且つ之を取らんとする時に、或は葉を落したりすることがあるから、斯る憂のない様に注意して、取扱はねばならぬ、煤や蜘蛛の巢のたからぬ様にしようと思はゞ、常に極めて風通しのよき處に、盆栽を置く様にすべし、樹の下扉の陰などのごとき場處には、決して置かぬ様になすがよい。

○盆栽の害となる物 盆栽物の大害となるものは、塩分である、故に塩分を含むでる水や、塩分を含でる肥料は決して與へてはならぬ、誤まつて塩分を含むでる物をあとふれば、終に枯死する恐れがあるから、盆栽を仕立むとする人は、塩分といふことについては、深く心を用ひねばならぬのである、昨日までも今日までも、殊の外に元氣よかりし物の、日ならずして枯れ氣味となるは、是れぞ全く幾時しか知らぬ間に、塩氣を含むでる物を其れと心付ずして與へたからである、又た鉢へ移して日の經ぬ物を、夏の日に強き太陽

盆栽の臺

の光線にあてるが如きことあらば、俄かに枯ることなどあるを以て、盆栽家は是れ亦た深く注意すべきことである。

○盆栽の臺 盆栽物を床に直し、又は坐敷へ飾りたりする時には、如何なる場合と雖も、そのまゝにて置かすに必らず相當の臺を用ゆ、此れを盆栽の臺とはいふのである、その臺には色々ある、或は角な板或は四角く焼かれたる、陶器製の物、又は紫檀黒檀桑などにて製作されたる四角形、長方形乃至は圓形にして、三本足又は四本足などの附いてゐるものもある、だが併し盆栽の臺はその拵へ方の風雅なる物を好むで、用ひむよりは寧ろ頑丈に出来上りたる物を用ゆるがよろし、何を云ふても盆栽は相應の目方あるものなれば……又た椽端などへ取り入れる時にも、盆栽を直に置かすに、必らず板を敷きて其の上へ取り入れるがよろし、然らざれば水吐より水流れいで、体裁甚だあし。

○花をはやく咲す法 筆序に記さんに彼年の内に盆栽物の梅を咲して見たり、

花をはやく咲す法

或は二月三月の頃に、桃櫻などの盆栽物に花を咲せて喜ぶは、都人の常にて今は温室にて咲すれば好み通りに咲くが、然し家庭にて是れ等の物を手軽に咲さんと思はゞ、室に入るゝより他に手段と云ふてはなけれども、梅桃櫻などの花を咲せつ生花として眺めむとならば、極めてやさしき方法がある先づ咲せんと思ふ物の枝を、日向水にいれたる花瓶に挿し、毎日々向を選び出して置ひて、その水が少なくなつたら、少し熱ひ目の湯をさして、更に日向を選んでだして置く、斯の如き事を幾度となく繰り返しなば蕾は次第にぐに太りて、遂に口を開き、愛らしき花の綻ふを見るに至るものなりといふ。

○貴き盆栽 貴ひとは珍らしきといふことで、即ち價値の多分に在る盆栽といふ意味である、仮令ば面白き根上り物、古びたる松の懸崖物、樅の直幹物、楓の懸崖物、さては枝垂樺の鉢より下に枝の垂れたる物などである、又た鳳尾竹の面白く古びたるものも、珍物として非常に貴とばれるのである。

貴き盆栽

## 第二章 各論

盆栽の培養に關する、凡ての心得は總説に於て既に十分それを説明したれば本章に於ては、各種の盆栽その物に就ての育て方を、委しく説明しようと思ふのである。

### 甲 觀葉樹類の盆栽仕立方

觀葉樹類とは、松、杉、檜、樅、檜、楓、竹、草物に在りては蘭などの種類にて、四期著るしくその色を變せぬ常盤木の、その葉を賞讚する盆栽を云のである、左れば此の種のもは花物に比ぶれば、その育て方多少困難なれど、蘭竹の類をば除くの外のもは、其性質強きを以て赤土に溝土と濾砂とを各等分に交せた土にてうねれば、仮し肥料を與ふることを怠たるも、好く生育するものである、併し時々肥料をあたふれば、更に申し分なく生育するのである、さりとして餘り屢々肥料を與ふれば、所謂肥負をして時に其發育を妨ぐる恐れあ

觀葉樹類  
盆栽の仕  
立方

るを以て、肥料は先づ控む目にしてあとふる様になすこそ宜しからむ、又た肥土に砂を十分に能く交せた物か、赤土に砂か又た忍ぶ土に砂を交せたのをば、も用ひてうゆれば、松、杉、檜、樅の類は、別に肥料を與へざるも、能く生育するものである。

松の盆栽  
の仕立方

○松の盆栽仕立方 松は最も多く人の好んで盆栽に仕立るものにて、種類多しさて人の松を盆栽として賞美するは、即ち四期色を變せぬ緑にあるのである併しながら松は他の物と異なつて、甚だ着き難き物である、然れども手入よろしく萬事の注意十分に行き届きなば、思ふ儘に發育して、決して枯る憂はなく、殊に松の盆栽は盆栽中に於て、大に賞賛愛翫される物である、今其の仕立方を示めせば、家庭に於て種を下して其の發育を待つよりは、先づ山中に出掛けて、面白さふな松を探り來たつて鉢へ移して馴し、其れより更に好みの盆に移し植る様になす方がよろしい、先づ陰曆の二月中に山へ出掛て好みの松を掘り、根に其の土を十分につけて、藁にて土の落ぬ様に十分に根

卷をして持ち歸り、其れより馴らさんとするはちの底に、細かな炭と砂利のふるつた物とを合した物を、一面に敷きて其の上に松を置き、ふるふたる砂利を堅くつめて根の動かぬ様に爲し、其れより土へ直接に水を與へず 其の葉へ如露にて水を與へる様にして、九十月頃まで決して鉢を入れたり、枝をためたりせず、其の儘に爲し置くべし、而して雨天の節には、雨のかゝらぬ様に椽などへ上げて置き、而して時々油粕を薄く煎じた汁を、肥料として與へなば、十中の九までは必ず着くものである、さて九月十月の頃に至れば枯葉枯枝を取り除きて、好みのぼんへ移し植るべし、但しうつし植ぬる時は、髻の如く澤山に生じたる根を悉くはさみ去るをよろしとす、又た枝振をなほさんにも、此の時に於てためるがよろしい、根を切るは葉の發育を善くさせる爲である、次に松のかれ枝を切る心得で、かれたる枝ならば何んでも構はぬ、切りさへすればよいと云ふ譯にはゆかぬ、切らふと思ふ枝あれば先づ極めて鋭き鋏にて、一度にばちつと切り去るべし、尙ほ注意深き人は其

盆栽の仕立る松の種類

の切り去りたる枝の尖へも、ぐさを少しあてがひて、其の上へ焼き鋏をあてるか、又は線香にて火をうつして、もぐさ焼となし置かば、松の發育に就て大によろしとは、斯道の専門家の意見である。

○盆栽に仕立る松の種類 盆栽として愛翫する松は、赤松、黒松、姫小松などである、何れも前に記した松の仕立方に依れば、好みの盆栽と爲し得らるれども、併し其の種類は異なるに從ふて、其の土に多少の區別がある、黒松は赤土に砂利を交せた物がよく、赤松は赤土三分に砂利七分を合した物がよろしく姫小松も赤松と同じ仕立方にて育つればよろしい。

○松の實生盆栽の仕立方 手数は多少かゝるべけれど、實生盆栽として最も眺のよきは松である、他の樹と異なりて芽を出すこと最も宜しく、其の上うつしうゆることも容易なれば、芽を出してから其の發育の大なる物は、大なる物のみ揃ひて、別のはちへ植は變るもよろし、さて松は種を秋の末に採りて砂にまぶらかして土中に埋め置き、翌年の春の彼岸に土中より出して、はち

松の實生盆栽仕立方

松の葉を短くする法

に蒔き、水氣の絶ぬ様に爲し置ば、入梅の頃には早や愛すべき可愛らしき芽を生ず、凡ての實生の物の中にて松ほど無雑作に芽を出すものはない、又た家庭にて尙は容易く松の實生物を作らむと思はゞ、陰曆の二月中に小松を山にて集めて、之を程よくばんへ移しうゆるもよろし、次に此の實生物は大低六七年の後には、頃合の面白き松とはなるのである。

○松の葉を短かくする法 松の枝の長く延びて、葉の殊に著るしく短かきは、盆栽として非常に珍重されるものである、さて其の葉を短かく爲さんには、四五月の頃新芽出でたる時に、其の葉の尖を針で靜かに十扁ほど突いて置けば葉は極めて短かく發育するのである。

○銀杏の實生盆栽仕立方 銀杏を實生盆栽に仕立れば面白き物にて之を作らむには、秋の中頃に種を取りて、砂にまぶらかして土中に翌年の三月まで埋め置きて、盆へ下すのである、其の下す時に種へ薄く切り形を入れて、蒔くが可い斯して蒔きたならば、其の芽を生ずるまで水氣の絶ぬ様に注意すべし

銀杏の盆栽仕立方

榿の盆栽仕立方

水氣少しにても絶る時は芽を生せざることあり、芽は入梅の頃に至りて初めて出すさて斯して四五年も経ちなば、盆栽としての眺め殊の外に宜しく、丹精の功を積が肝要である。

○榿の盆栽仕立方 榿は又の名を杜松とも云ふ、其の葉は純縁色にして宛然小松の如く、而も其の針は松より遙かに鋭し、此の樹は盆栽として、松と相並び非常に珍重さるゝ物にて、價值高きは一鉢二百三百金といふ逸品も、決して少くない、其れから榿に二種ある、一つは枝垂榿と云ふて、其枝が細く長く様々に曲つてゝ、恰も柳の如く下に垂れてゐるもの、一は普通の物にて、普通物に在つては重に面白き枝振の直幹物をたつとふ、此の樹は大低到る處の山中にあれば、種を下し苗を仕立て作らむよりは、三月より四月の上旬頃までに山へ出掛て、面白き物を捜し出し、持ち歸りて根固の爲み假をうへを行ひ、十分に着きたれば、秋口に盆へ上して手入をし、枝振をなをして面白き物に作り上るが可い、此の樹は割合に着き易きものにて、ばんへ移植す

檜の盆栽  
仕立方

る時には山土に砂を等分に交せ、下の方に肥土を置き、水を與へて時々薄き肥料を與ふ、肥料は油滓の溶き液、米泔水、魚の洗汁などよろし、又た種は其の葉の發生殊に速かなる物ゆゑ、絶ず心を配りて面白からぬ葉は爪にて摘み取りて間をすかす様に爲すべし、然らざれば虫生じ蜘蛛の巢を構ふことなどあれば、注意すべきである、またむろは其のゑだの發育殊の外速やかなるものなれば、之れを工風して懸崖物に仕立つれば、おもしろき物を作り得らるゝことが出来るのである。



圖の方立仕栽盆の物垂枝

○檜の盆栽仕立方 其の性質として、檜は山土に砂を等分に交せた物を好む、十分に元氣よき苗を求めて、根固をし時々肥料を與へて春ならば三月、秋な

櫻の盆栽  
仕立方

らば十月の中間迄に盆へ移植すべし、先づ盆の底に炭の碎きたる物と砂とを交せた物を敷き、古き根を切つてうへ、砂と眞土か又は肥土に、砂を等分に交せた物を固く詰め、水を與へて成るべく風通しの上處に置き、時々肥料をあたふべし、肥料は米の洗ひ水にて、油滓を溶きたる物にてもまた單に米の洗ひ汁にてもよろし、かくして來年新芽を生じたる時に、長しからぬ芽があれば、惜氣なく爪にてむしり取るが可い、また檜は勢ゐは非常に強き木なるを以て挿木をなすも、十分に成育す、其法は春の彼岸前に根元の枝を、一尺あまり切つて、葉を少しくつけ置き、濕氣多き土地に斜に挿すべし、斯し置ば來年の春には、立派に鉢へ上すことが出来るのである。

○櫻の盆栽仕立方 櫻は其の成長殊に遅きものなれば、風致よき盆栽に仕立んには少なくとも七八年を要す、其仕立方は苗を求め、山土に砂を等分に混たるか、眞土に砂を等分に混せた土を、瓦ばちに入れて其の中へうね込み、凡ての手あてをして時々肥料を與へ、來年の三月上旬、新芽を出す少し前に、好

みの盆へ移植するがよろし、移植の時には一般の法則に従ひて、古根を切り取るがよろし、また秋に移植なさむと思はゞ、九月の中頃より十月の中頃までをよろしとす、肥料は油滓に米の薄き洗ひ汁を交せて、一度煮きたる物を腐らせて用ゆるがよろしく、又た魚類の洗ひ汁を腐らせた物も効がある、樽をばんに上せて恰好を作り、十年ほど経たる物は、上等の盆栽として珍重される。

楓の盆栽仕立方

○楓の盆栽仕立方 楓は懸崖物に仕立るに限る、其法は枝に糸にて相當の重量を振ら下げて柳の如くゆたを下らせて造る、紅葉は實生と接木の二法に依つて、成長させ頃合の物となりたれば、根固をして一年其のまゝで置きて後、初めてばんへ移植す、肥料は二三月の頃に與へ、秋は余り多く水を與へぬがよろし、期は移植四月より五月迄と、九月より十月迄の二期とす、夏と冬は決して動かしてはならぬ、肥料は油粕を最もよろしとす。

桐の盆栽仕立方

○桐の盆栽仕立方 桐は盆栽として、青桐を賞美す、故に直打ある物を仕立ん

には、青桐の丈低く木の太きものである。因て青桐の苗を求め根固をして着きたら、三月頃に鉢へうつすが可い、桐は元來乾きたる土地を好むもので、その鉢へうつすにも濕氣の余り無き土を用ゆ、即ち野土に砂を等分に合した物を用ひて、古根をさらず唯だ元根の尖を少しく切つてうゑて、上に砂を置き、水を與へて時々油滓の煎じたる汁、又は米泔水などの肥料をあたへ、春芽の出でたる時に、無駄な物は爪にて摘み取り、餘り多く水をあたへぬ様にし、三四年丹精を盡さば、小さき鉢の中に太き見事なる桐の、元氣よき盆栽を得られるのである、但し夏回だけは肥料をあたへぬがよろし。

櫨の盆栽仕立方

○櫨の實生盆栽仕立方 櫨を盆栽に仕立るには、實生物に作るが第一です、此の木の實生盆栽は、其の趣き々々によろしきものゆへ、盆栽家に此れを非常に喜ぶのであるが、然しその馴れざる者が、これを慰みに作らんには多少の注意を用することにて、と云ふのははじは誠に芽の出にくるものであるからである、さて其の作り方は、松銀杏などと同じく秋の末に種を採つて砂にま

杉の盆栽  
仕立方

ぶらかして、土中にうづめ置き。翌年の三月に至つて、掘り出だして鉢へ種を下し、水を十分に與へ置けば入梅の頃には愛くるしき芽を出す。

○杉の盆栽仕立方 杉は一本なれば直幹物に仕立てるに限ざるが、然らざれば大小森疎を見計ひて、寄植物となすをよろしとす、さて其の作り方は種を下して作るもよろしけれど、家庭にて慰みに行はんには、其の既に苗木となりたる物を求めて、根固をし十分能く着いてからはちへ移植するがよろし、さてはちへうつさんとするには、二月の中頃より三月のすへまでに行ふべく、先づ碎きたる炭と砂とを等分に交てはちに敷き、其れから肥土と砂と等分に合した物を入れ、而して其の古きねを切り棄て、うねたらば上に砂を置き水を灌ひで、手入を施し、冬に至つて初めて肥料を與ふ、肥料は油滓を溶きたる物、木灰などよろしく、米泔水魚の洗汁も亦た功あり、杉は元來乾きたる土地を好むものゆへ、水は夏分だけ朝夕一回づゝあたへ、冬期は三日目に一回其の他は、一日一回根の濕ふ位にて澤山である、斯して二年を経なば大

ひに發育するを以て、其れより毎年欠さず新芽を摘みとる様になすがよい、

新芽を摘みとらざれば樹の發育よろしかとすといふ。

竹の盆栽

○竹の盆栽 竹を盆栽に仕立つることは、殊の外に困難なることにて、斯道に熟達せる人と雖も、満足なる面白き風致のある物を、拵ねることは容易の業にあらず、併し家庭にて慰みに仕立んとならば、水盤物に仕立てるをよろしとす。

竹の水盤  
物仕立方

○竹の水盤物の仕立方 竹を水盤物にしたつるには、即ち水竹を用ゆ夏向なやは涼氣を生じて、一段の興味を添るも、併し鳳尾竹の盆栽などにはとても及ばず、なれど水竹も中々に面白く、且つ極めて着きやすきを以て、初心の人は大小見計ひにて、四五本乃至八九本ほど恰好よく寄植として、水盤にうつし水を絶さぬようにして、苔のはふたる石などをあしらねば面白し、さて十分にねの廻りて葉振ゆかしく作られたる物を、水盤へ上すには五六月の頃をよろしとす、殊に十分つきやすきは梅雨の頃であるのである、先づ根につき



楓實生盆栽仕立方

たる土を落さぬ様にして鉢へうつし、砂を一面に置きて水を絶さぬ様にすれば、十中の九までは必らずつく。

○楓の實生盆栽仕立方 盆栽としてのかねでは、懸崖物こそ最も貴き價值のある物とされてあるが、併しながら亦た之れを實生盆栽にしたつれば、一種名狀すべからざる面白き風致があるのである、さて其のしたて方は矢張松と同じく秋に種を採つて、砂にまぶらして土中へうつめ置き、來年の三月に至つて掘り出だしてはちへ下し、水を十分にわたへて、日當りよき處に置きて育つれば、入梅の頃には早や愛くるしき芽を出すものである。

檜の盆栽仕立方

○檜の盆栽仕立方 檜は松や榎や杉や桐などとは、兎ても肩を並ぶべき物ではないが、併し盆栽にしたてますと、また中々に棄て難き眺のあるものである殊に枝振よき直幹物や、武者たち物さては寄せうね物などに、丹誠を凝して仕揚れば随分價格よき物となすことが出来るのである、此れも亦た秋に其の種を採りて砂にまぶらかして、土中にうつめ置き、來春十分に肥料を施した

る床に播きて、時々肥料をあたへ、水を灌ぐ等の手當を怠らねば翌年の春には四五寸に成長すべし、此の時にうねかへて枝振を直し、幹を作りなぞして仕立むとする盆栽の形に作りつゝ、二年ほどそのまゝに置きて、二年目の秋三年目の春に、初めてぼんへうつし更に丹精を積めば面白き盆栽となる、その盆へ移してからの手當は、總て檜と同様にすればよい。

榎の盆栽仕立方

○榎の盆栽仕立方 榎も、松や榎ほどのよき眺はなければ、双幹物か淺きはちへ長短色々ものを、五六本見計て林の如く工合よくうゆれば、中々に面白きものを得られる、此の樹は山へ出掛て松や榎を探す傍ら、魂氣よく探せば随分面白き自然生のを掘り出し得るゝから、其れを根固めをして、秋又は春三月頃に盆へうつすがよく、又た苗木を貯はふるものあらば、其れを求めてぼんへうつすがよろし、此の木を盆へ移すには底へ炭の碎きたるものを敷き、眞土を少し置き根についてある土を入れ、古根をきりさりてうへ、砂を十分につめて根が濕はふ位に水をあたへるがよい、餘り水を多く與ふるは

柳の盆栽仕立方

よろしからず、肥料は油粕魚の洗ひ汁など、春秋の二期と寒中に少しくあたふるがよし。

○柳の盆栽仕立方 観葉樹木類の盆栽中に於て、一種の云ふべからざる、妙味

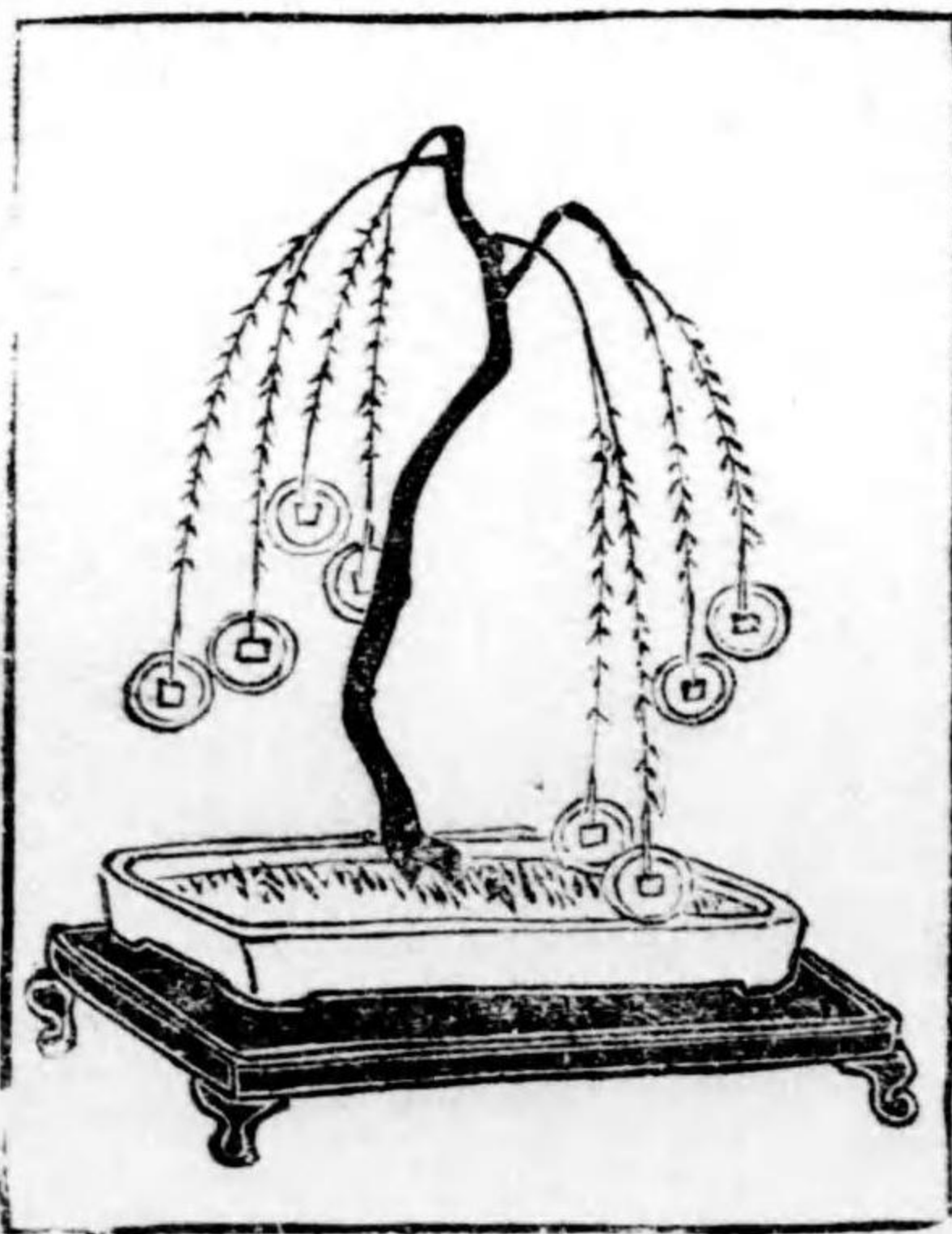
を呈するものは柳にして、而も其のしたて方いと易きものである、

柳は其ゑだの如何にも優しく枝垂れて、且つ其の葉の細かき物を貴

ぶのであれば、最初養成する時に初めて出でたる芽、及び二度目に

出たる芽との二回だけ惜まらずに摘み取りて、三回目に出でたる芽を成長させて、ぼんに上す様にするがよろし

さて柳をしたてんには、春三月の頃に柳の五六寸ほどの枝を切つて、其の根元の方を火にて焼きて、濕氣の多き地面へ深く挿して、其のね元を足で踏み



柳の枝をためた方の圖

堅めて、絶す水と與ふれば、臆て芽を生ず、其のめを四回まで摘み取りて、

三回目に出でたるめを、四五寸位に延たる時に、棒をたて、直線に延す様に其れへ軽く結びつけ、其れから秋に至りて瓦ばちへ根を小さくして、即ち

古ねを切てうねて根固をし、來年の春に更に好みの鉢へうつし、而して枝を枝垂せん爲めに、枝々へ波錢をぶら下げ其の錢の重で枝が十分に垂れたらそ

れを取る、肥料は薄き物を春に一度與ふれば十分にて、其の他は欠さを水であたけ置くがよろし、土は眞土と野土を用ひ砂は用ゆるなかれ、移植は春秋

の二期にて夏と冬は移植してはならぬ。

乙 観花樹木類の盆栽仕立方

観花樹木類の盆栽仕立方

観花樹木とは、梅、櫻、椿等の類を云ふので、即ち其の咲たる花を賞美するものなれば、枝振の面白き、さびたる樹に大きな花を咲すを貴ぶ、此に用ふる土

は、忍土、溝土、肥土などの細かく碎きたるものに、野土を等分に合した物を用ゆるがよろしく、肥料としては油粕、干鰯、魚の洗ひ汁、下水など其の功多

梅の盆栽仕立方

し、尙ほ盆栽としての花物は、その手入別て十分ならざれば、美事なる花を多く咲すこと不可能ゆへ、肥料は總て落葉後と開花前に必らず施さねばならぬ。

○梅の盆栽仕立方 梅を盆栽にしたてゝ貴ぶは、その樹の古きと其枝振の面白きとを賞するの外、花と將た妙なる香氣とを賞するものにて、觀花樹木中櫻と相竝んで最も優れたるものである、梅は比較的其性質頑丈なものゆへ、甚だしき濕氣と寒と風とを避させる様に注意すれば、必らず十分なる發育を遂させ得られる故に、盆栽にしたてたる梅は風強き時、雨多き日、寒氣烈しき候は必らず椽端又は室内へ取り入れて、保護を與ふることを忘れてはゆかぬのである、梅を育てるには種を下して苗を作ると、接木にすると挿木にするとの三通りあれど、普通の家庭にて、娛樂になさむとするには、既に苗木となしたる物をめて求來て、其れを培養するがよろしい、だが挿木として作らんと思はゞ、花落ちて新めの出でたる三月頃か、又は葉の落ちたる九月下旬又は十月頃に成るべくね元の方にある枝を缺にて切り、泥土と眞土又は田土

梅の盆栽に花を多く持せる心得

を等分に合して作りたる床の上に、斜に挿し時々水及び肥料をあたはて、寒中は根元に藁を敷くようにして育てば、立派に着く之を盆栽とするには、挿てから三年目に、先づ瓦ばちへ移植して、鉢ぐるみ土中へうすめ、水及び肥料は其のまゝにて與へ、翌年の春花の開きたる時に掘り出し、初めて好みのぼんにうつすべし、苗木となれる物を求めて盆栽にしたてたる時にも、斯の如くしてぼんに上すをよろしとす、移植は凡て三月九十月、又は花の開きつゝある時に爲す、次に移植後は一箇月ほどは強き日に當ぬよう、成るべく日陰に置く方樹の爲めによろしく、水は夏の中だけ朝夕一回づゝ與へ、其の他は時候の寒暖に應じて、一日に一回又は隔日或は三日目に一回づゝあたへるがよろし、肥料は油滓、魚の洗汁、泥水など余り濃からざる物を見計にて與ふるが可い。

○梅の盆栽に花を多く持せる心得 梅を盆栽として貴ぶ所以の物は、樹より花を賞するにあり、故に小さき樹に多くの花を咲せ、而も其の樹が古びて、幹

張枝振の面白ものこそ、上等の物なれさて多く花を咲さんと欲せば、花の残らず落たる時に、先づ其枝の細きものを残らず切り取つて、樹をはちより出して土を拂ひ、古き根は惜氣なくさり取り、其れより鉢の底へ溝土の粉にせしものか、肥土を少し敷きその上へ樹をいれ、以前の土を篩ふて十分に堅く詰め、水をわたいて一月ほど日に當ぬ様にして、その新芽のいでたる時に、好みの肥料を與へて棚に置きて、養なへば來年の春には、美事なる花を澤山に開く、斯の如きことを毎年くり返せば、四五年の先には美事なる花を持つる好個の盆栽となる、梅に用ゆるはち樹より比較的小さなはちに、根を無理に押し込む位のものを用ゆるがよい、無理に根を押し込めば、樹が損じはせぬかなどと懸念するが如きは、梅を養ふことを知らざるものであるとは去る盆栽道の直話である。

又た一本の樹にて紅白二九通りの花を咲せんと思はゞ、工合よく接木をして來年迄そのまゝにて養ひ、然る後前述の方則に従ひ、ばんに移して花を咲す

櫻の盆栽仕立方

○櫻の盆栽仕立方 花物中にて櫻は梅と相並んで、其の妙なる花を賞するのである、之を盆栽にしたつれば、其の美なること云はん方なし、さて櫻に彼岸櫻八重櫻（又た牡丹櫻とも云ふ）山櫻などの種類がある、なれど盆栽にしたつるには其の方法何れも皆な同じことである、さて櫻を盆栽として花を咲しめむとするには、苗木を其のまゝ用ひてはならぬ、必ず接木した物をばんへうつすべし、故に普通の家庭にて娛樂的に作らんと思はゞ、既に接木せし物をもと



櫻の盆栽の圖

椿の盆栽  
仕立方

めて、十一月より二月頃までの間に、瓦ばちへうね鉢ぐるみ土中にうづめ置きて、油粕、干鰯、米泔水などの肥料をあたへ、三月の中旬即ち彼岸前に、赤土と肥土を等分に交せた物に、砂を一割交せて、好みのはちへうつしうね水をそゝぎて表面に砂を敷き、其れより雨と風を避けしめ、夏は日覆をし寒中は夜分だけ室内へ取り入れるようにして、手當を施せば翌年の春には小さきはちに、美事なる麗はしき花が開くのである、肥料は秋と寒中と三月の初とに一回與へる様にし、水は夏は朝夕二回、其の他は三日目に一回あつれば十分である、櫻の移植期は十一月より翌年の三月上旬までとす、なれど最もよろしきは寒肥を與へてより、半月ほど後の頃である。

○椿盆栽仕立方 椿は盆栽としては、梅櫻には及ばねど其の花大きくして、色殊に麗はしく、且つ開花期間の長さを以て、之を盆栽にしたて、賞用すの人最も多し、さて椿は盆栽にしたつること極めて容易く、先づ苗を五月中に接木して、能く癒合たらば其のまゝ瓦ばちにうへ土中にうづめ、油粕人糞など

茨牡丹盆  
栽仕立方

観實樹木  
類仕立方

の肥料をあたへ、水を好きほどづゝ與へて、翌年の六月に至りて掘り越し、古き根を残らず切り棄て、肥土と野土と砂とを各等分に合した物にて、好みのおぼんへ堅くうね、水をそゝぎ油粕の肥料を與へ、土用中は日覆をし秋に二回と冬に一回寒中に殊に二回はど肥をあたへて、養へば翌年には花の美事なる物が咲く、又た挿木法に依りても容易に盆栽とすることが出来る、此の樹の移植期は梅雨中も最もよろしとす、寒中春先などに移植せば、樹を損じ或は枯すことなどあれば、盆栽家は注意さるべし。

○茨牡丹盆栽仕立方 此は五六月の頃に新芽を切つて、軟らかき地面へはすに挿し泥又は人糞などの肥料をあたへて、翌年の四月に至りて鉢へうね替れば五月の中頃には早や妙なる花を開くのである。

丙 観實樹木類盆栽の仕立方

盆栽としての観實樹類は、密柑、金柑、柿、栗、林檎、梨等の類にて、此れ等の物を盆栽として眺むるは、其の木振枝振などよりは、其の實を結びたること

ろ、即ち小さな鉢にうねられたる小さき樹に、美麗な實を結びたる其の有様を  
 楽しむものである、さて此の種類を盆栽として育てんと欲するには、其の物に  
 依つて多少の相違はあるが、併し一般に赤土に肥土を交せ、此に砂を混じたる  
 土にてうね、そして後肥料を十分にあたふるが肝要なことである、此の種の物  
 に用ゆる肥料は、油粕、人糞、腐つたる塵埃、魚の濃き洗ひ汁などよろしとす  
 なれども肥料を與ふるに一定の時期あるを以て、その時期を成るべく誤まらぬ  
 様になすが殊に肝心である、乃でその時期は果樹その物に依つて、多少の相違  
 あれば、その委しきことは次に示めす各種のしたて方に就て承知されたいので  
 ある。

尙は觀實樹木類に就て、殊更に注意せねばならぬのは、前に述べたる寒肥をあ  
 とふべきことである、觀葉樹木類や觀花樹木類に在つては、格別寒肥をあたふ  
 べき必用とはなけれど、觀實樹木類に在つては是非とも寒肥をあたねねばな  
 らぬ、然らざればその實の結び方も少なければ、又た従がつて結ばれたる其の

實も小さいのである。

林檎の盆  
 栽仕立方

○林檎の盆栽仕立方 盆栽の林檎は薄紅を帶たる愛らしき實の小さきはちにう  
 ねられたる樹に、ふら下り居るを別て賞するものにて、之を工合よくしたつ  
 れば、中々に價值がある、之を盆栽にしたつるには、接木法によつて十分に  
 着いた物をぼんにうつすが可い、故に普通の家庭に於て、したてんと思はゞ  
 黒人が工合よく接木した物を求めて、それを盆にうつすのである、其の手當  
 は實を結んでから盆に、肥土と野土と砂とを各等分に合した物にてうね、同  
 時に肥料をあたね水をそゞぎて、十一月の頃に根の周圍を深く掘つて肥料  
 を施し、而して翌年の春と花の落ちたる時とに、二回ほど肥をあとふれば、  
 其の年より實をむすぶ、斯の如く毎年手當を施してゆけば、三四年の先には  
 美事なる實をむすぶ盆栽となる、此に注意すべきは落花後の虫の葉に着くこ  
 とが屢次ある、此の時に注意して虫を取らねば、實を結ぶ妨げとなることか  
 ある、又た移植するには必らず實を結びたる後、半月ほどの中に爲すが可い

結實前になさば、實を結ばざることあり、肥料は盆栽物には油粕の十分に腐らしたる物、魚の洗ひ汁の腐りたる物などが別してよろし、併し無暗と與へぬ様にせねばならぬ。

桃の盆栽仕立方

○桃の盆栽仕立方 桃は觀果樹類の盆栽に屬すと雖ども、その花は櫻にも劣らぬ位の美麗なるを以て、花を賞し花落て實を賞す、故に之を盆栽にしたてゝ手入をするは家庭にて殊に面白き事とす、桃は實生と接木の二た通りに依つて、盆栽にしたてるも、家庭にては其既に工合よく接木をして、十分に着きたる物をもとめて、九十月の頃に瓦ばちにうねて根固をし、根の部に肥料を十分にわたねて、そのまゝ土中にうづめて、上より田土と砂又た肥土に砂を交せた物を十分に掛けて水をあたね、寒中に一回薄き肥を與へて、二月の下旬より三月の下旬へ掛けて、好みのはちへ移植して、盆栽にしたてるのである、そのしたて方は、はちの底へ炭と砂を交せた物を少し敷き、肥土に砂を等分に交せた物にて、根のゆるまぬ様に堅くうゆる、その時に元〇を切り細

き古根を切つてうへ、薄き肥料と水をあたね、成るべく暖かき處に置きて、秋に一度と寒中に一度肥をあたふれば、翌年の四月にはばんの裡に麗はしき花と色よき實を結ぶのである、そこから實が落ちたら新らしき枝を切りて、わた振を直し、此れと同時に幹を根元より上に向つて、縦に一箇處其皮を裂きて傷をつけるのである、斯の如き手當を爲し置かざれば、盆栽の桃は花をひらき難く、従つて實を結び難く、且つ桃は暖かき土地を好む故に、成るべく日當りよき場處に置く、併し夏日の大暑は樹を弱らす恐れあれば、日覆をなすべく寒中は夜だけ室内へ入るゝか、藁を置きて霜よけを爲すべし、次に注意すべきは肥料を余りあたへぬがよろし、即ち花をひらく前に一回、秋に一回、寒中



桃の盆栽の圖

桃の種類

に一回あたふれば十分である、余り度々與ふれば樹の爲めに反つて害がある  
又た實を結ぶ頃に、様々な害虫がうちゅうはつせいの發生しやすきものゆへ、此の頃は別て注意  
して、蟲を取り除くのぞ様にして、傍ら風通しよき處へ置くがよろしい、觀果樹  
木類の盆栽中にも、桃が最も養ひ難きものゆへ、盆栽家は凡ての注意を十  
分に施すが肝心である、肥料は油滓汁の腐りたる物、磷酸肥料りんさんなど第一に  
よろしく、魚の洗汁米泔水なども大に功がありと云ふ。

桃の種類にも色々ありて、中にも別てその實の美事なるものは、上海天津な  
どと呼ぶ水蜜桃すいみつとうである、此れ等の荒木をぼんに移して、十分に丹精せば二三  
年の中には、美事大なる實を結ばしむるを得て、別て奇觀を呈するものであ  
る、その養ひ方は凡て同一と心得らるが可い。

無花果盆  
栽仕立方

○無花果いちじくの盆栽仕立方 無花果は無論その實を賞するものにて、御承知の如く  
此れは、九十月の頃に誠に面白き實をむすびて、而もその實がさくろのそれ  
の如くはせて、一種の美觀びくわんを呈する樹である、之れを盆栽にしたつれば、又

百両金の  
盆栽仕  
たて方

た一入しほの眺めにして、一種の面白味おももしろみがある、さてそのしたて方は種を下して  
苗木を作り、それが小指ほどの太さとなつた時に、瓦ばちへ移植し軟らかき  
土の場處を選びて、其のはちぐるみうねて水を十分にあたへ、且つ肥料を與  
へ尙ほ寒肥をもあたへて、一年を経ば實をむすぶを以て、實をむすびたれば  
掘り出だして、好みのはちへ肥土と眞土と砂とを各等分に合した物を入れ、  
毎日水を少しづつあたへて、日和ひよりへ出す様にすれば、能く育ちて一二年の後  
には立派な盆栽となるのである、尙ほ云ふまでもなけれど、寒どねは十分に  
あたへるがよろし。

○百両金の盆栽仕立方 百両金たちばなもその花よりは、實を賞するものにて、之を盆  
栽にしたて、眺めんには、苗となつてから三年ほど経たる物を選び、黄土を  
能く碎きて砂を一割交せた物にて、成るべく鉢の中心にうね、土を堅く詰め  
てどぶの水をそよぎ、成るべく暖かな處に置き時々魚の洗ひ汁をあたへ、水  
は日向水を少しづつあたへる様にし、寒き日は室内へ取り入れ、寒中は藁を



柿の盆栽  
仕立て方

置きて暖め、雨多き日も亦陰へ入れて育てなば、その翌年頃より實をむすぶこと請合である、尙ほ注意すべきは此の樹は夏の蒸し暑き日に、得て葉に虫のたかりたがる物ゆへ、夏向は朝夕水をあたゆる時に、葉に注意して一疋でも虫があつたら、直ちにそれを取り除く様に、心懸ねば葉を損じ従つて實をむすぶ妨となることがある。

○柿の盆栽仕立方 小さき鉢にうねられたる柿の木に、その實の面白く下つてゐるは、さて中々に興あるものである、柿を立派な盆栽にしたてんと欲せば、種を下し苗をしたてそれを盆栽に育つるがよろし、併しながら種より苗にしたて、それをはちにうつして立派な木として、實を成らさんとするには、少なくとも六七年を用するを以て、それよりは立派な苗となりたる物を需めて三月頃に鉢へうつしうね、肥料として人糞油糟などをあたふ、その肥料をあつふるは葉の残らず落ちた時と、春芽を出す時と、寒中に一回と夏の土用頃に一回あたへるが可い、そのあたへ方は根の周囲を掘りて十分にあたへ、土

手入れの  
事

をかぶせて水を少しをくぐが可い、又た二年三年目位に、古き枝を折り取つて枝振を直すべく、又た大なる實をむすばしめんとならば、出来たる實を熟する前に、一二割ほど惜まらずに摘み取るべし、仮令ば一の盆栽に實が十個ほどつきたとすれば、それを土用頃に二つ三つほど摘み取つて、それと同時に肥料をあつふるのである、斯すれば實落ちずして比較的に大なる實を結ぶすことが出来る、尙ほ注意すべきは五六月頃風の別けて強き日には、棚などへ置かずに椽へ取り入れて風を避けしむべし、然らざれば折角形の出来たる實を、風の爲に拂ひ落さるゝ恐がある、柿に人糞はよき肥料なれど、家庭にて煩らはしければ、代りに油糟を以てさるゝがよい。

○杏の盆栽仕立方 抑も杏を盆栽として賞賛するのは、その實を結びたる点にあるのである、之を培養するには接木としてうゆるがよろし、さてあんずは寒さを非常に怖れる質の物ゆへ、寒中は根に藁を刻みて敷き、絶す日向へ出す様に心掛べく、又た之を植る土は、眞土と忍ぶ土を半々の割合にて合し、

杏の盆栽  
仕立て方

それに砂を二割方加へた物を以てするがよろしいとは、専門家の意見である。斯して時々水をあたへて、土のばらばらに成らぬ様に注意し、而して肥料は干鰯油糟が最もよろし、次に肥を置く時期は、八月の下旬と十一月の初旬とを殊によるしとす、又た枝振を直し無駄な枝を切り棄んとならず、一月二月の比になすべし、花を持ち初めたらば如何なる事あるも剪刀などは猥りに入れぬがよろし、又た接木してそれを盆栽にしたてんと思はゞ、三月の初めに比に接木法を施し、そのまゝにして翌年の秋に於て、それを瓦焼の鉢に十分肥料を施して移しかね、而して此の鉢ぐるみ更に土の中へうすめ置けば、聽て花をひらき實を結ぶに至るべし、此の時に初めて好むところの鉢へうつしうゆれば、此に見事なるあんずの盆栽はなるのである。

栗の盆栽  
仕たて方

○栗の盆栽仕立方 栗を盆栽として愛するはその實であるが、併し盆栽として著るしき價値は、枝振にも無論關係はあれど、その殊に珍重する点は古き枝の尖に生じたる新らしき枝の尖に實を結ばしむるにあるのである、此れ

を盆栽にしたてんには、種を下して苗を生せしめ、それを盆に移がよろしと云ふことである、されど前年の春種を下した苗を、翌年の春花の落ちたる時にもとめて、田土と砂とを等分に合した土にて盆へ植へ、魚の洗汁油かす等の肥料をあたへ、水は夏だけ一日に一回與へその他は隔日三日目位にあたへ枝振を直し木を作りつゝ、三年辛抱すれば必らず實を結ぶのである。尚ほ以上の外に梨の盆栽仕立方は、林檎によるべく、密柑金柑の類は百兩金の盆栽仕立方に依れば、容易に面白き物を作ることが出来るのである。

第三編 蔬菜及び果實培養法

○蔬菜と果實の培養に就て

家庭にて日々膳部に上すべき蔬菜類や、さては四季清涼なる菓物を得んには、八百屋又は水菓子屋に使を走らせば、何ん時にも好むところの物を得んこと最と易し、然れどもそれは皆なそれくの人手に依りて作られたる物にて、我

蔬菜と果實の培養に就て

が手を下して好むところの物を作り、之れを口にすることの愉快にも亦た一屑味そらあじの美なる様感するの、楽しきことはあらざるべしと信ずるのである。

因て果物や蔬菜類そさいを常に家庭に於て、培養すれば一つの娛樂ごらくとなるのみならず一家の經濟上非常なる利益があると同時に、絶す新鮮なる物を膳部ぜんぶに供し得られて、且つ運動うんどうを自然に營いそなむ道理だうりになれば、個人的衛生上にもよろしく、加之しかのみならず今度は如何様な出来柄がらであらふかと、その成熟の結果を待つと云ふ實に言葉ことばを以て云ひ得られぬ樂のあるものなれば、多少の空地を有し得らるゝ人は蔬菜及び果實の培養を職務の余暇よかに行はるれば、娛樂と利益とを得ると云ふ点に於て、非常なる効果を收むる事が出来るであらふかと考へられるのである、依て家庭に於て尤も容易く培養し得らるゝ蔬菜及び果實のことに就て、其の作り方を乘しほりしようと思ふのである。

### ○蔬菜之部

蔬菜の種類は御承知の如く實に澤山に在るが、併しその中にて家庭にて容易く

培養し得らるゝ物と、或る特別の装置しかりをいたさねばならぬ物との區別が多少ある、故に特別の装置を用する物は省はぶきて、尤も單純たんじゆんにして極めて無雜作に培養され得る蔬菜類に就て述べて置きます。

#### 大根の培養法

○大根の培養法 大根にはその種類が色々ある、太き圓き物もあれば細長き物もある、又た守口大根まぐちと稱なづけて、極めて細く極めて長き物がある、なれどその培養方は何れも同じことにて、先づ九月の中旬より十月の初めにかけて、土地の土を能くならして軟らかくし相當の畝うらを作り人糞を水にて緩く溶きたる、物又は小便せうべんを散布まきて土に染み込ませて、一日二日はどそのまゝに爲し置きて種を蒔まき、その上へ藁わらを置きて二三日そのまゝになし置けば、芽出づるを以て此の時に藁わらを去り、それから漸次葉せんじが成長して來るに従ひ、その間を廣げる爲めに葉を抜き取る、之を間引と云ふ、斯して大根と大根の間を三寸置き位くらいにして、時々稀薄うすき小便を肥料としてあとふれば、十二月の初より中比へかけて成熟し、立派なる大根は得られるのである、又た大小便の代り

二年子大根培養法

にはしかを水で濃く溶きてあとふるも大ひに功がある。

○二年子大根の培養法 又た一にからみ大根とも云ふ、即ち細長くして色の極めて白き、皮の厚き大根である、之を作るには先づ好みの大きさの畝をつくり、土を十分に軟らかくならし置きて、一回に肥料をあたへ、それより三四日経つてから種を下して、芽を生じたる時に、込みたる處を抜き取りて間をすかし、こねを置くこと胡蘿蔔と同じ様に爲し、それより時々見廻りて、込みた處のなき様に氣をつけつ、月に二回ほど肥料をあたへて、翌年の四月ごろに至りて抜き取り用ゆるのである、肥料は水に小便を三割ほど合した物か又たは下水の溜水をあとふればそれで十分である、此の大根の種を下すは十二月の初より末までである。

蠶豆の培養法

○蠶豆の培養法 先づ十月の中旬より、十一月の初旬へかけて種を下すがよろしい、蠶豆は畑地へ下すも亦た田へ蒔も、何れにてもよろしけれど、畑豆よりは田の物の方が其味よろしと云ふことである、初めに畝を作り土を軟らか

豆類の培養法

くならして、人糞をあたへて二日はど経てから種を下し、稍や成長したる比に小便を時々あとふれば五月上旬には青々として豆となる。

○豆類の培養法 豆の種類の内にて、蠶豆豌豆の類は別なれど、大豆小豆刀豆等の類はその育て方極めて無雑作にて、特に手の入さるものである、故に畑の端など庭の隅など好み次第の處にて育てらるのである、その植む方は凡そ一尺四五寸を隔て、棒にて一寸ほどの穴を穿ち、その内へ蒔んとする豆を三四粒ほどづゝ入れて、上より土をかけて置く、而して二葉の生じたる時に、溜水に小便を程よく合した物を肥料としてあとふべし、その種を下す時期は五月の中旬より六月の中旬まで間のをよろしとす、又余り度々肥を與ふるは、反つてその發生をさまたぐる恐れあれば、先づ實の入るころまでに三四回はどあとふるをよろしとす、また肥料は溜水に小便を二割ほど混じた物か、或は小便に水半々を混じた物かを用ゆるがよろしい。

垣豆の培養法

○垣豆の培養法 又たきんぐ豆とも云ひます、莢ともに用ゆる扁平豆で、

此は竹垣などの下へ蒔き置けば、その蔓が次第ぐに垣へ上つて、豆が出来ますので垣豆と云ふ、此れは垣の下の日當のよき處を選んで、土を掘て軟らかくならし、小便と水を等分に合した肥料をあたへ、一日二日そのまゝにして置ひて、それから種を下し、時々小便と水とを等分に混ぜた肥料をあたへて置きますと、その段々と成長するに従つて、垣根へ蔓が上つてゆくから、土用になつたら朝夕水を少しづゝあたへる様に手當をすれば、七月の下旬ごろより豆が出来初めて、十月のはじめごろまで絶えず新しい豆を取ることが出来る、種を下すのは五月の下旬より、六月の中旬ごろまでがよろしい、此の豆は竹で垣をしてやらねば、蔓の延びるものなるを以て、家庭にてつくらんには、垣の下の日當のよき處へ種を下すに限る、

土芋の培養法

○土芋の培養法　また里芋とも云ふ、家庭にて二三十株ほど作つて置きますと九月ごろに至つて、毎日軟らかさ、新らしき芋を膳部に上すことが出来る、その作り方は亦た極めて無雑作で、先づ相當の畝を拵らへて、その上へ人糞

きやべい菜培養法

を水にて緩く溶きたる物か、乃至は小便を撒き、土に肥料を十分に浸み込ませて、それから親芋の種を一尺置き位にうづめて置きますと、初に嫩葉の芽が出て、それが次第に大きく延び、葉も澤山に出で、終には葉が非常に大きく成り、莖も延びて小芋が澤山に出来るのが、先づ九月の中旬より十月の始ごろです、肥料は小便泥溝水を時々あたへ、夏は毎日水をあたへるが肝心である。

○きやべい菜の培養法　此れは西洋料理に用ゆる軟らかくして、味の殊に宜しき菜である、此を植るには成るべく上等の種を選ばざるべからず、然らざれば往々發生せざる恐あり、さて成るべく日あたりのよき暖かき土地を選び、土を十分に軟らかく耕し、その上にごもくの腐敗つた物を敷き、その上へ更に軟らかき土を篩でふるふて五分ばかりの厚に撒き、而してその上へ種を蒔くのである、さて葉生じて二寸ほどの長さとならば、それを他の場處へ植へ變るをよろしとす、而して植へ變たらば溜水に、小便を二割ほど交せた

燕青の培養法

る物を肥料として、その周囲へたつぷりと與ふべし、而してそれがまた盛長して四五寸ほどに成つたら、他の場處へうつしうゆべし、斯して十分に盛長すれば、宛がら大なる牡丹の如き、誠に美事なる球状とはなるなり、而してその種を下す時期は三月彼岸の入より中日比までをよろしとす、尙ほ植へ替せずとも無論發育は成すべけれど、うへ替せざればその味よろしからずとなり、又たきやべじい菜は漢字にて葉牡丹と書す、即ち文字の現はす通り、牡丹の花の如き形状なせる圓き大きな菜で、一枚宛絶して用ゆるものである。

○燕青の培養法 大小あれど凡て燕青は、九月の中旬より十月の初へかけて、種を下すものである、その作り方は家庭にては夏向茄子胡瓜などの類をうねたる、その跡を十分によく耕やして、土を極めて軟らかくならし置き、それから畝一面に水と小便とを半々に合したものを撒きて、五六日そのまゝに爲し置き、而して後に種の重ならぬ様に蒔きて、その上より小便と水とを半々に合したものを散く、斯して二た葉が生じて來たらば、能く調べて込みたる

百合根の培養法

處に抜き取りて間をすかし、肥をあたへつゝ絶す見廻りて、成長して込みたる處があつたら、それを抜き取りて間をすかす様に手入をして、五六日或は八九日目位に肥をあたへつゝ、その十分に成長せるを待つのである、此に用ゆる肥料は、水に小便を三割ほど合した物か、溜水に一割の小便を混じた物を用ゆればそれで十分である、而して取り上げは十二月の上旬より中旬まである、

○百合根の培養法、百合根は非常に砂糖分に富んでゐるものにて、之れを工合よく調理すれば、その味も特によろしく、且つその性たる極めて消化し易きものなれば、小兒亦は病人などの副食物としてあたへて、功の多きは人の知る所である、その育て方は、種を蒔くに春の彼岸の入より四五日の間をよろしとす、先づ好みの大さに畝を作り、土を十分に掘りて軟らかく爲し置き、その上にこもくの腐敗つた物を少しく置き、更に土を少しく置きて、其上へ四五寸ほど間をおきて、種を五の目より植るべし、而して肥は時々あつふる

南瓜の培養法

を宜しとす、肥料は人糞の腐敗せる物、油滓などよろしきも、家庭にては下水の溜水たまりみづに二割の小便を混じたものを用ゆるがよろし、此れはその發育せるものを取りて賣買ばいばいに付するも、その收入しゅうにゅうの夥多おほくたしきものなりと云ふ。

○南瓜なんまの培養法 四月下旬より五月中頃までの間に、種を下すをよろしとす、先づ畝を成るべく廣く拵へて、土をならし下むのゆるき物を掛けて、二日はど打ち棄て置き、それから種をまばらに下して、上へ藁を載せて置き、芽が出たらば藁を去りて、漸次發育せんじはつういするに従ふて蔓が長く出る、此の時に畝へ藁を二三本づゝまばらに置き、下肥をとときぐあたへる、但し藁は延びたるつるの下へ置ので、根へ置ひてはならぬ、斯の如くすれば大なる橙色の花咲きて、七月の始より八月の中頃へかけて、立派なる南瓜が出来上るのである。

夏大根の培養法

○夏大根なつだいこんの培養法 夏向の用に供する大根にて、此れは家庭にて極めて無雜作むざうさくに養はれる、その法は先づ土をならし置きて、下肥を撒き二日はど其のまゝ

になし置きて、さて種を互たがひに重なり合ぬ様に、ばらぐと卸さろしの上より土をかけて置きます、斯の如くにして二十日あまり打ち棄てゝ置くと、芽を出して一面に二た葉となります、此の時に余りこみ入つたる處は、その二た葉を抜き取つて間をすかすのである、然らざれば葉にむしの生ずる恐がある此二た葉は所謂摘み菜いむゆわつとして用ひ、さて残れる物ものは倒れぬ様に左右より土を少しづゝ盛り添へて置ひて、それをら暖かき日に時々水をあたへる様にして行くのである、さて肥料のあたへ方は十分に腐敗したる人糞を用ゆるがよろしい、腐敗せざる人糞は反つて害があると云ふことです、併しながら家庭では腐敗せる人糞じんふんを用ゆると云ふことは困難こんなんですから、それより下水たまりみづの溜水たまりみづに一割の小便を混じて、それを時々あたへるがよろしい、又た練なれざる素人しろうとには丸き太き物をつくらんには中々に困難であるが、併し之を植る時にその畝を深く掘りて、埃溜ごみだめの腐りたる塵ちりを入れ、その上に少しく土をまきて、その上より種をまく時は非常にその發達を盛ならしむるのである、尙ほ更に注意

唐辛の培養法

したきは、まく前に土を深く耕たがやして、土を軟やわらかに爲し置くが肝かん要ようであるして種をまく時期は三月の十日頃までに畝を作り置き、彼岸の入りいりにまくべし、遅おそくれば其發成はつせいよろしからずと云ふ。

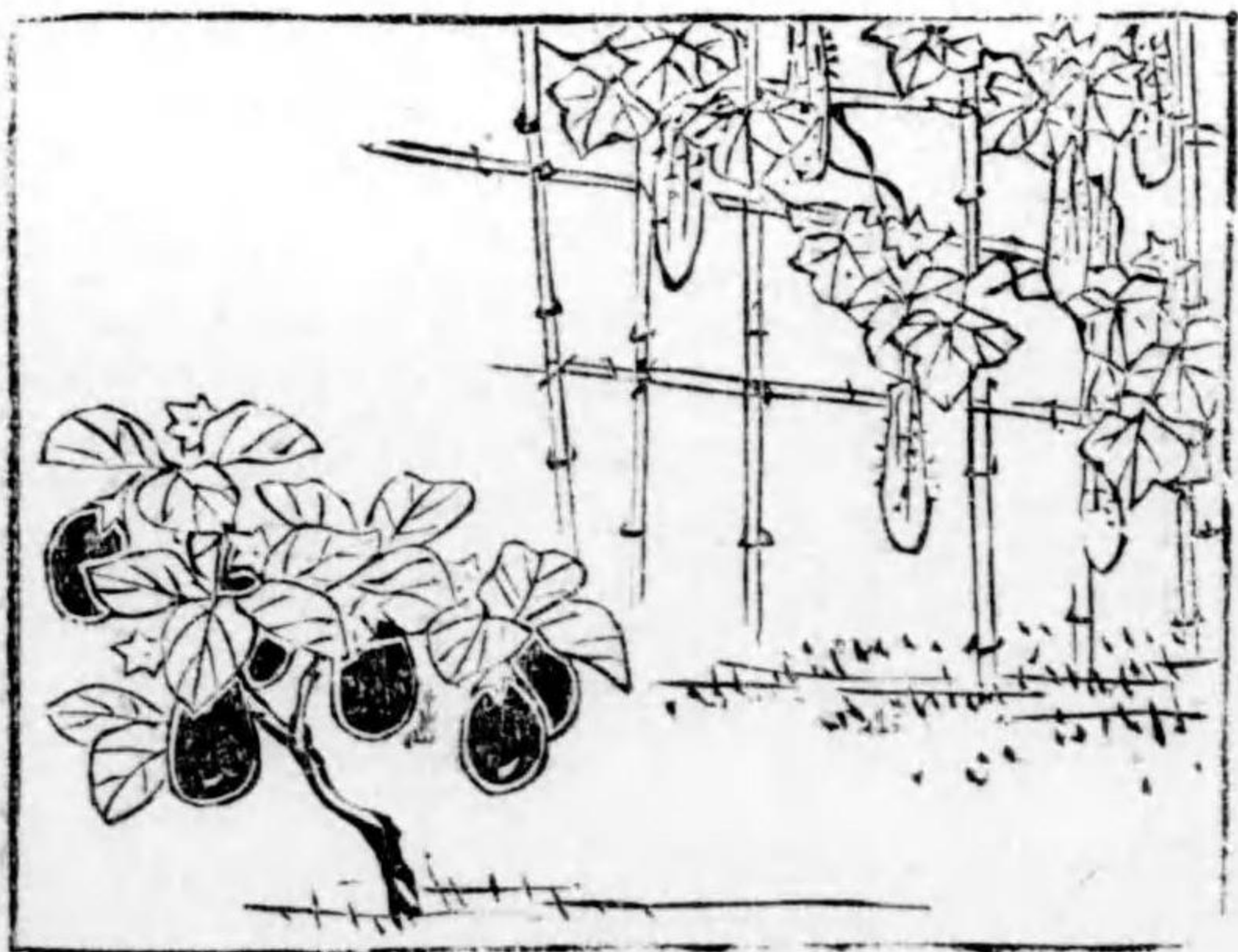
○唐辛とうがらしの培養法 唐辛に二た通りある、即ちその味あじの辛からき物と、からからざる物とである、辛からき物は兎も角も、からからざる物は、夏向なつむきき之れを煮き、油でいためて膳部ぜんぶに上せば、その味中々に捨て難がたきものである、故に家庭にて之れを培養し置くは、亦た樂たのしみなものである、さてその作り方は極めて容易で、先づ小さき畝うらを拵しらへて土を成るべく軟らかく能く馴ならして置く、それから小便と水とを等分に混た物をかけて、土に浸みこませて置き種を卸すのである、漸々だんじやくと成長して來たら、小便を極く薄く溶したる物を肥料として時々あたへるか、又は腐つたる下水の水などをあたへ、夏向の照りつゞきたる時は夕方にみづをあたへる様にすれば、七月の末ごろより九月の末ごろまでは、美事なる物が出来る次第である、唐がらしに強き肥料をあたふるは反つ

て宜しくなす。

茄子の培養法

○茄子なすびの培養法 夏時かじの野菜やさいとして、吾人に別て欠くべからざる物は茄子なすびである、さて茄子は農事專業の者なれば、種をまきて育つるも宜しけれど、素人が家庭にて慰なぐさみなみに作らんとするには、その既に苗なとなりたる物を求めて植る方がよろし、さて茄子の苗は五月の下旬より六月の中旬までにうね終るをよろしとす、

苗をうゆるには土地を耕やして能く土をならし、二尺ほどの距離へたよりに直徑ちきん五寸ほどの淺あなき穴あなを穿あけ、その穴の内へ待まちち肥まとして小べんに水を等分に交せたる物を、普通の杓柄ひしやくに半分ほど宛の割合にて注ぐのである、さてその儘ままにして五六日置き、それから茄子なすのなへを其の中



茄子と胡瓜の培養法



水の心用

へうねこみ、此と同時に少し水をあたへ置き、而してその根には藁の類を六七寸ほどの長さに切つたものを敷き、而して旱の時には水を灌ぐべし、それから幹の倒れぬ様に竹又は細き棒を立て、糸にて此に結び付けて置くべし、斯の如くにして一箇月に三回は水と小便を半々ほどに交せた物を、杓柄に壹杯ほどづゝあたゆべし、茄子に就て特に注意すべきは、土用中の天氣つゞきの時には、必らず朝夕適宜に水をあたふることを忘れてはならぬのである水不足なれば枯死する恐があるから、なすびを造るには水が非常に大切である。

胡瓜の培養法

○胡瓜培養法 なすびと同じく、初に先づ畝を能くならして土を軟らかに爲し置き、一尺ほど間を置きて徑五寸深さ二寸ほどの穴を穿ちて、其内へ水と小便を半々に合したる物を柄杓に一杯ほどづゝ入れて五六日置きて、それから胡瓜苗を植へ、それと同時に水を與へて置きて、一尺ほどに延び上りたる時に芽を摘みて、高さ一間位ぬの竹の荒き塙を造りて、蔓のそれにからみ付よ

白瓜の培養法

うに爲して、月に三四回小便と水とを當分に交せたる肥を與へ、尙ほ暑氣激しくして天氣の時には朝夕一回づゝ水を與ふるがよろし、胡瓜もなすびの如く家庭にて素人が之を造らむには、種を卸さんよりは既に苗となりぬる物を求めて、五月の初旬より下旬までの内に植るがよろし。

○白瓜の培養法 白瓜も胡瓜と同じく四月の初旬より下旬へかけて蒔く、始めに能く畝をならして干しかを煮きて溶かしたる、余り濃くない汁を土に與へて、一日二日其まゝにして置ひて種を卸し、藁の上に置きて二三日経て芽を出して來らば、藁を去り小便と水とを半々に合した物を、時々與へて成長し來たら、竹にて手を拵へてやる、斯して毎夕少しづゝ水を與ふれば、七月の頃には立派な物となる。

胡蘿蔔の培養法

○胡蘿蔔培養法 胡蘿蔔には二九通りの種類がある、一を東京胡蘿蔔一を大阪胡蘿蔔又た金胡蘿蔔とも云ふ、東京胡蘿蔔はその形細長くして其色赤黄色を呈す、大阪胡蘿蔔は太く短かくして其色は眞紅色を呈す、さて之を造るに

は、五月の中旬より六月の下旬までに種を蒔をよろしとす、先づ好みの大きさの畝を造りて土を十分に柔らかくこなし置き、その上へ一面に小便と水とを等分に合した物をまきて、三四日其の儘に爲し置きて、其れからばらくと種を卸して、其の上より肥を置きてさて、芽が出て二三寸ほどに延びたる時に、其の込みたる處を抜き取りて、間を十分にすかして肥を與へ、其れより時々見廻りて込みたる處あれば、抜き取りて肥を與へ、間を十分にすかす様に心掛けて、月に三四回ほど宛肥を與へる様にしてゆけば、農事に經驗なきものと雖も、立派な胡蘿蔔を造り得らるゝのである、その出來上るのは先づ九月の下旬より十月の中頃である、猶ほ注意すべきは土用中炎天打き續きたる時には、朝夕水をよき程づゝあたふる様になすべし、然ざれば枯死する恐あり、猶肥料は水と小便を等分に合せた物を、少しづゝ幾度もあたへるがよろし。

○水菜の培養法 一に京菜とも云ふ、大豆小豆瓜類などの夏作物を取り上げた

水菜の培養法

る其の跡の畝を能く耕やして、土を十分にならし、其の上へ水と小便とを等分に合した物を一面に撒きて、七日或は十日ほどそのままに爲し置きて、種を一面にばら蒔き、その上より肥を十分に與へて、芽の生じたる時にそのこみたる處は引き抜きて十分に間をすかして、十日目位に肥を與へ、且つ時々見廻りてこみたる處があれば、其を引き抜きて株と株の間を、一尺ほどづゝすかす様に心掛けてゆけば、素人と雖ども立派な菜を作り得ること最と易し、此に用ゆる肥料は下水の溜水か、小便二割を水に合した物を用ゆれば十分である、次に種を下す時期は、十月の末より十一月の初めをよろしとす。

○果實之部

果實の部

果實には蔬菜物ほど多くの種類はないけれど、併し吾人の間食物となる物を數へ來たらば、その數は中々に澤山ある、なれどその中に就て家庭に於て、尤も容易く培養し得らるゝ物の手入方を、少しく乘りして置く、而して手入方面倒

## 桃の培養法

なる果實は、殊更に之を省きつ。

○桃の培養法 夏の始めの果實としてその味のよろしき物は桃である、桃は何れも同じものゝ様なれど、種類がある、其中にて形も立派なれば味も優れて其の長さは近頃別て稱用さるゝ、水蜜桃である、水蜜桃の中にも上海天津の二種ある、上海桃は其花大きくして其色薄紅を呈し、その實は在來の桃と少しく異なつて、殆んど眞圓である、而して實の色は薄黄色を呈して、天津桃は上海より小さくその實の色は殆んど深紅にして、その形狀は卵圓形である、而して水蜜桃は我國在來の桃よりは、何れも其形が大きい、さて桃の養ひ方は十一月より三月までの間に移植するがよろしく、肥料としては人糞乾縮などを用ゆるもよく、油滓は殊にその効あり、上海も天津も凡て同一の養ひ方でよろしきも、上海は虫害を防がむ爲に、其の實を結び始めし頃より、新聞紙又は反古紙にて袋を造りて覆せ置をよろしとす。

## 杏の培養法

○杏の培養法 杏は桃などに比ぶれば酸味強きを以て、人に依りて好むもあれ

ば、好まぬもある、併しながら之れを鑑詰とし又は干菓子ざいりょうの材料として、多く用ひらるれば、亦た主要なる果實として大ひに珍重されるのである、杏は元來濕潤氣のある土地を好むを以て、成るく濕潤る土地に植ゆるか、左なくば時々其の根元へ水をあたへる様にするがよろし、杏を培養せんには種を下して發育させるのと、接木法に依つて發育させるのと二種ある、併しながら一般に稱用するのは接木法である、故に家庭にて之れを培養せんには、其の既に苗となりたる物を求めて、桃に接木をするがよろしい、其の接木をする時期は十一月より翌年二月一ぱいが尤も適當である、(接木の仕方は第一編の總論に述たり)さて接木をなせば、肥料を與へずに水を十分にあたへて置ばよい、其れから肥料は八月の下旬と、葉の落たる後とにあとふるがよろしく、肥料には油滓干鰯か乃至は人糞など大ひに功がある、接木をして斯の如く其々肥料をあつれば、二年目より實を結のである、猶ほ若き杏に就て注意すべきは、其の花の開ひてる中に、晩霜が下りて其れが爲めに樹を非常に

痛めることがあります、其れ故に樹の若き中は寒き夜なりと思はゞ、樹に藁を覆せて豫じめ霜を防ぐ用意をなし、翌朝に至りてわらを去り、日光に當し  
ひるようなすが肝心である。

李の培養法

○李の結養法 李は杏より下品なれど、酸味の中に一種云ふべからざる甘味を有てゐるものゆへ、人の多く好んで之を喰ふ、其の培養方は接木をなすもよろしく、又た種を下して拇指ほどの太さとなりたる時に、移植もよろし、元來李は其性質杏と異なりて、硬き土地を好むを以て、何れの如何なる處へ植るも能く成長するものである、故に家庭にて之を培養せんには、其の既に拇指位までに成長せし苗を求めて、二月の下旬より三月の下旬までに植へるがよろしい、其の植るには先づ土を能く馴して軟らかく爲し、好きほど掘りて其の中へ油粕人糞などの肥料を好きほど入れて、土を能く混て一日二日はと其のまゝに爲し置きて、土に肥料の十分に浸み渡るを待ちて、苗を植へ、而して其の周囲へも肥料を少しくあたへ、其の後は時々水をあたへ亦た渠泥

葡萄の培養法

など、其の根に置き、而して八月と葉の落ちたる後との二度に、隣酸肥料油粕干縮さては人糞などの肥料を好きほどあたねてゆけば、二年の後には實を結ぶ、猶ほ特に注意すべきは杏と同じく開花中に於ける晩霜と、強き風とである、因て樹の若き中は寒き夜なりと思はゞ、藁を置ひて霜を防ぐ用意をなすがよろし、強き風は人力にて之を防がん様もなければ、自然に委ぬるの外之れを防がん様もないのである、亦た牡丹杏巴旦杏の類も是と同じ培養法に依れば、美事に發育するのである。

○葡萄の培養法

和葡萄と西洋葡萄の別あれど、葡萄は樹そのものゝ質として風通しの良き高ひ土地か、亦は石礫などの交せつて居る土地、或は石灰の多く含まれて居る土地などが、其の發育に最も長く適してゐる土地であるから凡ての蔬菜物などをうゆるに適せぬ土地、或は山の半腹などの如き所謂不毛の土地にも能く植らるゝ便利があれば、農家の爲には之を養ふて大に利益あり、亦た家庭にても所を選ばずに、自由に養はるゝから至極く樂みなもの

である、その移植は十一月の下旬より、翌年四月初旬までがよろしいが別て二月の下旬より三月の中頃までが宜しい、即ち此の頃には葡萄の一枝を剪みて地に移し、厩肥乃至石灰などの肥料を與ふる様になすべし、而して根元には時々雜草又はごもくなぞを與ふるも、發生に効ありと云ふ、實を結び初なば蟲害を防ぐために、新聞紙又は反古紙などにて袋を造りて、かぶせ置もよろし、西洋葡萄は和葡萄より繁殖速かにして、且つ實の結び方も多し、然しながら味に至つては、和葡萄に及ばざる遙かに遠しである、次に葡萄に腐敗病といふ一種の病氣を發生することがある、此れはその名の如く實を結ぶに當りて、枝及び葉が枯れて、腐るが如き觀を呈する事で、之れを其の儘打ち捨て置けば、實を結ば



葡萄の培養法

梨の培養法

ざるは素より、終には其の樹を枯し倒すことに成る、此の病を發するは樹その物の性質にも因るべけれど、多くは時候の不順と空氣の流通殊に悪きとに依るべければ、葡萄畑は成るべく其の周囲に障害物のなき様にして、常に空氣の流通を善良ならしむる様に心掛るが肝心である、乃で一朝此の病氣に冒されたことを發見せば、硫黄を湯にて薄く溶きて之を其樹へ刷毛にて、隔日に一回づゝ塗するがよろしい、斯の如きことを四五回くり返すと、其の樹は大ひに元氣を生じて來て、以前の物となりて立派に實を結ぶのである。

○梨の培養法 梨は果實中の王とも云ふべき、優れたる味を有てゐるもので、人々の殊に珍重するものである、之を家庭にて培養せんには、其の既に幹が拇指ほどの太さに成り居る苗を求めて、二月下旬より三月の下旬へかけて、地を掘ちて土を能く馴し、其の中へ人糞油粕米糠などの肥料を好きほどあたへて、一日二日其のまゝに爲し置きて苗を植へ、水をあたへて、十二月中旬過より霜を除けべく爲めに、藁にて上を覆ひ、其れより三月の下旬肥料をあ

たへ、花の落ちて實を結び初めたる時に、再び肥料をあとふ、故に肥料は花の咲く前と實を結び初めたる頃との、二回にあたへるのである、斯の如き手入を施せば三年の後には、美事なる梨を得られるのである、猶ほ梨の培養に就て注意すべき事は、光線の能くあたる様になすべきことである、日陰などに梨をうゆれば管に其の實を結ばざるのみか、樹成長せずして果は枯死する恐れがあるを以て、梨は樹と樹との間を十分隔て、植へ、且つ樹の周囲には日光を遮さざるべき障害物の無き様に心がくべく、又九四五月の頃には得て害蟲の發生し易やすきものなれば、常に注意して害蟲を驅除くじよする方法を講すべきである。

梨の實を  
多く結ば  
す法

○梨の實を多く結ばす法 誰たれにても二十より三十、三十より四十と多く實のらすを好まざる者なければ、多く實のらせんには、前年より聊いさか此れが手入をなさざるべからず、其法は實を取り入れて後、枝の勢いきひ鋭すどくして延のび過ぎたるものを、凡そ全体の四分の一ほど切り去りて、十分に風通しよくなし置

き、其れより九月下旬に至りて、新芽を出せば亦またた容赦ようしやなく之れを摘み切り更に葉の落たる後に於て、枝の甚だしく横に延び廣がりたる物は、其の尖を切りて成るべく上に向く様に作る、斯の如くして翌年花を開く前に、相當の肥料をあたふれば、何れの枝も著るしく花を開きて實をむすぶこと殊の外に多きものである。

又た時候の不順ふじゆん等に依りて、花の莖くきが細く延びて咲くことがある、之れを其のままに爲し置かばむすびたる實は中途ちゆうとにて落ちて、大ひに其の收穫しゆうかくを減ずるものである、故に替つばの時に能く注意して、若も花の莖が伸び過ぎてゐたらば、その花の開かぬ中に根の周圍へ鋏くわを入れるか、又は鎌かまを入れて其の細さ根を切るのである、斯せば花の莖は次第に縮みて花開くに依り、實を結ぶも中途にして落る憂うれなく、十分の收穫を得られるのである。

猶ほ實を結びつゝある中に、葉に赤色を帯たる物が生じなば、容赦なく其れを摘つみみ去るがよい、然らずして之れを其のまま打ち捨て置かば、忽たちち他の葉

## 林檎の培養法

に傳染して、終には實の結び方を減する恐あれば、決して些少なことと思はずに十分注意されたいのである。

○林檎の培養法 林檎も梨に續ひて美なる味を有して果物である、之れを培養するの手續は梨と大差なく即ち實生に依りて繁殖せしめむも、亦た接木に依りて繁殖せしめむも、其は勝手なれど、家庭にて培養せんには其の既に苗となりたる物を求めて、二月より三月すままで地を掘り土をならし、其の中へ人糞又は油粕或は米糠等の肥料をあたへ、土を能く混て其の中へうねるがよろしい、而して九月下旬に肥料をあたへ、翌年の花の咲く前と花が落ちてからとの二回に肥料をあたえて風通して、日當りを十分に成る様に爲し置かば二三年の後には美事なる林檎が出来るのである、肥料は前にも述べたる通り花の咲く前と花の落ちたる後との二回あつればよい、猶ほ慾には新芽を出す頃、即ち九月の下旬に一回あつればよろしい、次に最も注意すべきことは、四五月の頃に害蟲の得て發生し易きものなれば、此の際には特に注意し

## 蜜柑の培養法

て害蟲の驅除に従事すべく、又た林檎は極めて乾きたる土地を好むものゆへ之れを植むには成るべく高き土地で、毫も濕潤氣のなき土質を選びてうめるがよい、若し此に心を用ひずして、濕潤ある地に植むなば、根より木喰蟲生じて、次第に幹を喰ひあらし、果は樹を枯死せしむる恐があるから、林檎には余り水を與へぬがよろしと云ふことである。

○密柑の培養法 果實を培養せむすには、肥料をあたへると云ふことが、何より大切なことであるは、素よりなれど取り別け密柑を培養せんには、より多くの肥料をあたふる必要がある、若し其れ肥料を惜むが如きことありては兎ても満足に實のらし能ふべきものではない、さて密柑を培養せんに、苗を得るには四五月の頃に枳殼臺に接木するがよい、なれど家庭にて培養せんには、斯る手数を掛すに十分發育したる苗か、又は接木せる物を求め、砂地に植へる、其の植るのも矢張四五月の頃がよい、さて植むたらば油粕骨粉などの肥料を其の根に十分にあたえて水を灌ぎ、其れより土用中に一回及び寒中

## 肥料の與へ方

に一回下肥をあたふれば、二年目位より實を結ぶものである、凡て密柑金柑の類を培養するには、四五月頃に肥料をあたへ、其れから土用中少し與へ、次に寒中に少くあたへることが肝要である、其の肥料を與へる方は、凡て根の處を掘りて其中へ埋め土を掛けて上より水を與へる様にするのである。

木草花 盆栽培養法

著 作 權 所 有

大正拾參年七月廿日印刷  
大正拾參年七月卅日發行

盆栽培養法與附  
定價金四拾錢

著 作 者	榎 本 編 輯 部
發 行 者	大阪市南區松屋町三九番地 榎 本 松 之 助
印 刷 者	大阪市南區松屋町四番地 鳴 田 良 治
印 刷 所	大阪市南區松屋町三九番地 榎 本 法 台 館 印 刷 工 場
發 行 所	大 阪 市 南 區 松 屋 町 三 九 番 地 榎 本 書 店
賣 捌 所	大 阪 市 東 區 住 吉 町 十 七 番 地 村 田 松 榮 館



288  
114

最 新 版

<p>裁縫早學<small>附造花獨習</small>び 定價四形二 四十百錢頁</p>	<p>盆栽培養法 定價四形二 四十百錢頁</p>	<p><small>婦人心得</small>女禮式 定價四形二 四十百錢頁</p>	<p>染色<small>附化粧の仕方</small>と洗濯法 定價四形二 四十百錢頁</p>	<p>茶の湯の手ほどき 定價四形二 四十百錢頁</p>
--	----------------------------------	---	--	-------------------------------------

終

